
スカイ・ポリス ～国立特殊能力学園～

朱夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スカイ・ポリス ～国立特殊能力学園～

【Nコード】

N6100W

【作者名】

朱夏

【あらすじ】

超能力者の犯罪が多発するメガ・シティでは、それを取り締まる為に特別な能力を持った者を養成する、空に浮ぶ島に設立されたエリート学園があった。その受験に三度も失敗して、この頃ではすっかりやる気を無くした主人公、重形青は、たまたま学園の生徒を洞窟に案内する羽目になったが、彼らを狙う犯罪者や、謎の海賊に出会って戦いに巻き込まれて行く……。現在、「学園の怪物編」連載中

繊細な彫刻が施された、円錐形の先鋭な塔らしき建物の中は、夜も深く湿度を帯びて陰気で酷く不快だった。

天井は高く暗闇に覆われて、その先は肉眼では確認できない。

外から光につられて入ってきた蝶が、壁に取り付けられた年代物の蜀台の蠟燭に、命を落として時折炎が揺らめいた。

音も無く光も乏しい、あるのは永遠の孤独と絶望、そして心の奥に広がる漆黒の闇……。

そんな肌を刺すように緊張した時間の流れの中、二人の男が向き合っていた。

1人は拷問椅子の上で腕を縛りあげられ、頭には幾つものコードが差し込まれていた。もう1人の男はコードから送られてくる情報を、コンピューターの画面で確認しながら、その価値の大きさに満足げな微笑を漏らしている。

しかし、白衣を着た拷問椅子の男は白目を剥いて、もう殆ど虫の息だった……。

くすんだ皮膚やピクリとも動かない様は、まるでマリオネットのようで、男の成すがまま乱暴に頭からコードを引き抜かれても、最早、何の反応も無く、頭を横に倒したまま口から唾液を垂らしていて、魂が抜けたかのを知らせるかのように、やがて椅子から転げ落ちた。

惑星暦191125年。

ますます貧富の差が激しくなって、犯罪はさらに巧妙、そして特殊で悪質になる一方、多国間同士の小さないざこざや協定破棄など、情勢も不安定な中、ここメガシティにおいては国家警察部隊が強力

な力を持つて抑圧してきてはいたが、近年、特殊能力者の犯罪が多発し、彼らの横行を阻止すべく、それに対抗する国家特殊能力警察部隊、通称NSAPを設立した。

メガシテイの大地は浮硬石という、名前の通り硬くて浮く性質を持った石を、多く含む強力な磁場を発する土でできていて、太古の昔に大陸から地殻変動で切り離された島が、空中に幾つか点在しており、NSAPの本部は第一ターミナルと言われる、一番大きな島に建設されていた。

未来のNSAP候補生やバイオ研究機関、そして心理学など、あらゆる犯罪に対しての研究機関とそれを学ぶ生徒が通う学園都市は別の浮島にあり、その他、国家警察本部とその横に前人未到の脱獄不可能な監獄が、個別にこの広い空中に点在していた。

人々は何度かの地殻変動が起こった後の、陽の降り注ぐ大地と、地下に潜って生活する民、或いは海に居を移して海上都市で暮らす者と千差万別に暮らしていた。

しかし、概ね光り輝く緑の大地と海上都市には裕福層が居を構え、岩をくり抜いて生活する民は貧困に喘いでいた。

その、大地と海の狭間に建設された素神を祭った大神殿の一角に、7歳から15歳までの子供たちが勉学と修行に勤しむ武道館があった。

「宮司様、重形青しげかたあおが午後の授業に現れません。また武道の授業をサボったようです」

執務室で祭事の準備をしていた宮司に、禰宜ねいが眉を潜めて伝えた。

「うむ」
年配の宮司は手を休め、いつもの事とは言え、あきらめ顔で頭を振った。

「どうせ奴は今年も学園入学は無理でしょう。身体能力は人並み以上でも、素養、教養、協調性全く無しで、選考試験資格はおるか推薦もできません。去年から全く進歩無しです」

厳しい口調で禰宜が言った。

「三年前に姉の瑠華^{ルカ}が学園に入学した時、かなり悔しがってあったから負けじと頑張るかと思いきや、反対にあれ以来、年々意欲が失せるようじゃのう……」

宮司は長く白い顎髭を撫でながら思索した。

重形瑠華と青の姉弟がここに来てかれこれ十一年になる。青はまだ三歳になったばかりで瑠華は物心ついた五歳になっていた。

その頃から瑠華は物体を空中で止めることが自在にできる、特殊な能力を持っていたが、同じ血を引く弟の青は成長しても能力と言え、手のひらで石ころを転がせるくらいでしか無かった。

三度の受験失敗は、いかに呑気な青とて落ち込まざる得ないのか、最近では意欲もすっかり失せて、授業をエスケープしては洞窟に入り込んで仲間と遊んでばかりだ。

「姉の瑠華とは仲が悪くしょっちゅう喧嘩してましたからね……、自分より先に学園に入学されてがっかりしたんでしょう。まあ、年齢も3歳違いますから当然と言えば当然ですが、ある意味ライバルでもあり、たったひとりの肉親でもあって寂しさもあるんでしょう」

「尚更、学園に行けるよう頑張れば良いものを……。全くやる気無しで遊び惚けておるな」

「はい、その通りです」

NSAP学園に入るには、瑠華のような特殊能力が要求されるので、試験だけができて入学を許可されるわけではない。

重形の出た一族の系統を辿ると、青に能力が遺伝してない方がおかしいが、それにしても能力の開眼があまりにも遅くて宮司は危惧していた。

「ところで、明日の準備はそつが無くできておるか？」

「はい宮司様。NSAPの生徒を乗せた護送艇が降りてくる広場は、午前中誰にも使わせないよう通達しておりますし、学園の学生達も一緒に食堂を使えるよう昼食の準備をしてあります。午後に出発と聞いておりますので」

「よかるう。」

「では、失礼いたします」

「うむ」

欄宜が去った後の執務室で、宮司は久しぶりに青の機密出生ファイルを取り出し広げると、暫しそれに目を通した後に深くため息を付き、窓の外、子供達の歓声が上がる運動場を見ても無しに見るのだった。

「ひゃっほ、ついて来れるものならついて来なっ」

青のエア^{アオ}ボードは勾配60度の岩窟道を、猛^{マウ}ピードで走り抜けていた。

ここは神殿から30キロも入った薄暗い地下道の中で、地下四層から三層になつている一番上の階で、奥に入り込み過ぎて殆ど人が訪れない場所で、青は隣町の少年達とエア^{アオ}ボードのスピードを競い合っていた。

所々に天然の空気穴が開いていて、地上からの光が差してぼんやりと道を照らしてはいたが、光と陰のコントラストは返ってそれが災いし、目の焦点が合わしづらい。

青は暗闇でも見えるゴーグルを掛け直した。

先頭を走らなければ、このスピードで少しでも岩盤に触れると、小石が散つて後方に飛ぶ。

しかし、先頭を走る青は態と石壁に触れて、小石が剥がれるのを念じた。すると、その石が当たった後者の隆^{リウ}二が悲鳴をあげた。

「てめ^めゝゝゝ、青^{アヲ}っ^ー待ちやがれ！ ショ^{ショ}ボー能力使^スうんじゃねえ！」

「うつせえ、がけ崩れ起こしててめえを下敷きにするぞ！」

「偉^偉そうな口利きやがって、できねえくせによ、そんな能力あつたらとつと受験受かつてんだろっが」

青は悔し紛れに指先で壁を崩すまねをして、幾らか小石がぼろぼろと落ちてきたが、全くもってそのしょぼさは拭えなく、落ち込むのであった……。

以前、姉の瑠華が一メートル程の岩を空中で止めたことがあって、それを見たときはその凄さに唖然としたものだっただ。

あんな風に大きな岩を投げ飛ばしてみたいものだとか常々思ってはいても、どうにも青の能力はこれ以上開眼しない……。

「反則だぞ！ 危ねえじゃないか！」

「竜二、今回も俺の勝ちだ。金持ってんのかよ」

竜二は、2メートル程前を進む青の、靡く漆黒の髪を眺めながら悔しさに喚いた。

ここ、洞窟の中は無数の縦穴だけでなく、横穴や螺旋といった通路は縦横無尽数にあって、浮力を利用したエア・ボードでスピードを競い合う、青ら少年達の絶好の遊び場となっていた。

しかし、こんな狭い所で人と接触したら重大事故にもなりかねない。

洞窟のあちらこちらに住居を構えて、生活をしている人々との事故を避ける為に、こんな奥深くまで入り込まなくてはいけなかったのだ、青はこの日のように授業を度々エスケープしなければならなかった……と、言うより進んでエスケープしていた。

「ゴール……！」

青がゴールを決めると、そこにいた数人の少年達から歓声が上がった。

急ブレーキで足元のエア・ボードを止めると、青はしたり顔で竜二に手を差し出した。

「ほら、500ウンよこしな」

「ちくしょーーーーーっ、この貸しは倍にして返して貰うからな」

竜二は胸ポケットから500ウン札を一枚取り出し、忌々しそうに青の手中に手渡した。

それを見ていた竜二の仲間三人も、彼と同じ顔して悔しそうに青を睨んでいる一方、青の仲間、同級生のセイとふたつ年下の誠まことは、同世代では青に敵無し、竜二に100勝25敗と断トツに勝っている青を賞賛、或いは仲間として鼻高々で彼の肩を抱いた。

「さすがだな青」

「楽勝さ！　じゃ、竜二、また修行しとけ、いつでも相手してやっからな」

「生意気な口利きやがって、いつかその口を塞いでやる」

「負け犬は黙ってな、帰るぞ、セイ、誠」

そう言つて青はゴーグルに手を当てた。

「よー、おまえらは孤児だから、毎日遊び惚けても誰も気にも掛けやしないだろうけど、俺達や両親揃ってるし、ちったー勉強もしないと叱られるしな」

「なんだとー」

殴り掛かろうとする青を、セイと誠が両脇からとり押さえた。

「てめー、もういっぺん言ってみやがれ」

「何度でも言つてやるよ、みなしご、孤児め！」

青の腕力に押さえきれなくなつたふたりは、諦めたようになつさり手を離し、ため息を付いた。

その瞬間、青の拳が竜二の頬に当たつた。

「やりやがったな、青ー！ー」

そして、直ぐさま反撃に出た竜二だったが、取り押さえる者は無く、セイらと共にふたりの取っ組み合いを呆れて見ていた。

「毎度のことなんだけどね、試合で負ける度に青にいちやもん付けるの止めてくんないかな、毎度毎度止めに入るのもアホらしくなってきたよ。」

「まーなー、竜二も負ける度に喧嘩吹っ掛けるのは、癖みたいなもんなんだけど、いい加減青もそれに気づけばいいのに、毎回毎回、あの口車に本気で乗りやがってさあ……、お約束みたいなもんじゃないか……」

竜二の取り巻きのひとりが、うんざりしたように呟いた。

「青の単純さは長所なんだけどね……」

セイが苦笑いした。

青とセイ、そして誠の三人は神殿の横に建っている孤児院で育ち、同じ広大な敷地に建っている学校で、竜二たち一般家庭出身の者と、一緒に勉学に励んでいる。

一般家庭と言っても、この辺り地下で暮らす者は貧しく、片親だけと言つのも珍しくなかった。

よつて、少年達の境遇はさして変わる物でも無かったが、元来、負けん気が強い青は喧嘩を吹っ掛けられるたびに、いちいち乗ってしまふ単純な性格なのであった。

「どっちもどっちだけどね」

「まったくだ……」

で、全員うなずいて、ふたりの気が済むまで見守ることの、暗黙の了解がいつしかできていた。

五分くらい経っただろうか、ふたりは呪いが解けたようにいきなり立ち上がると、気が済んだのか衣服の埃を払うと、何事も無かったようにエア―ボードに乗っかり、その場を後にした。

「なんだよ青、待てよ」

少年達がそれぞれの住处に戻って行くと、辺りは静寂に包まれた。

2・最悪の出会い

神殿はオリン岬と言う周りを海に囲まれた、岩盤の広い敷地に建っていた。

青やセイ達が帰ってくると、そこは何やら人で溢れ返っていて、学校の校庭前には大きな護送艇が止まっていた。

「すっげえ！」

青はその護送艇の大きさに圧倒されて、嬉しそうな悲鳴を上げた。「そう言えば、今日学園の生徒たちが来るって言ってたよな」

三人は神殿前の大きな灯籠に隠れて、こっそり辺りを伺っていた。「さあさあみんな、荷物を持ってここに整列しろ」

まだ顔にあどけなさが残る青たちと寸分違わね年齢の、少年少女が足元に置いていた荷物を持って、意外にもきびきびした動作で、声を掛けた教官らしき人物の周りに集まり始めた。

その紺や茶色、黒といった色の違う戦闘服らしき制服を見た青は、大凡の検討を付けて目を細めた。

「あれってさあ、上の学園の奴らじゃないか？ あの特種部隊を養成する超エリート为学校の訓練服だよな……」

セイが言った。

”上”とは、地上の莉空地に立つ高層ビルの事でも無く、海上に立ち並ぶ建物の事でもない。

それは天空に浮かぶ巨大空中都市のことだった。

そこではあらゆる犯罪に立ち向かえるよう、特別な能力のある者だけを養成し、スペシャリストとして育て上げるアカデミー及び、国家防衛特別犯罪対策のエリートが集まる建物が建っていた。

特別な能力とは、体術、武術は勿論、魔術や透視力、物体移動、等のあらゆる超能力を含み、犯罪対策の率先力となると判断される

程の秀でた能力の持ち主ならば、一芸だけでも入学は可能であったが、そうは言ってもここはスペシャリストの集団、選り抜きの生徒たちであるから、すでに学園へ入学した時から、実践に出ても戦える程の能力を持ち合わせている者が多かった。

それ故に、とても狭き門なのだ。

その学園は三部構成になっていて、下は初等科七歳から十二歳までを一学年から六学年とし、そして十三歳から十八歳を同じように六学年で区切り、それ以上は自分に合った専門分野でそのまま実践に就く、実戦経験を積みながら勉学に励んだり、或いは博士号まで勉学に励んだり、様々な選択肢が用意されていた。

しかし、優秀で実践能力のある者は、勉学途中であれども任務要請と、本人の希望により現地に赴くことも多々あった。

何れにしても、彼らはこの国の超エリートと言つて過言では無い。今ここにいる学生達はその黄金の卵たちで、授業に取り込まれている実践訓練の一環として此処へやって来たのだった。

「さあ、揃ったか？ 7チーム各5人編成で、今回は五、六年は上級試験の為に、実践に赴いているので、今回は四学年生がリーダーを務める。と言つても、能力はみんなが知つての通り、年に関係ないからね。後は実践で経験を積み生かすことができるかどうかだ。教官三名、イルモア・レイ教官とフドー陽教官及びスリン・エリ教官が、これから約一時間後にここを出発して洞窟内に潜伏、或いは向こう側タツプ岬の方向に向かう……やも知れぬと言ふことだ。それは教官が自ら行き先を決めることになっている。彼ら三人はそれぞれ別行動を取るの、一人でも捕まえたチームはその時点で終了、俺に連絡後そのまま引き返してここで待機すること。期限は三日間。今回の選抜チームは勿論先鋭揃いだ。今回の成績は進級試験評価に含まれ、7チーム中教官を捕獲できた3チームは勿論、できなかったチームもその方法、活動状況を分析して評価を考慮するので最後まで

で手を抜かないよう全力であたるんだ。君たちはここで昼食を済ませてから、みんな一斉にスタートする。俺はここにいてみんなの報告、安全、位置を確認しつつ見守ることになっている。万が一、何かトラブルが出た場合は速やかに報告すること。分かったか？」

「はい」

生徒全員が返事した。

「木先生、質問があります」

「何だ？」

「今回追跡装置は無いのですか？」

「そろそろ実践に慣れないといけないからね、いつも追跡装置を相手に着けられるとは限らない。今回、君たちに与えられる装置はこの地図ひとつだけだ。と、言っても君らが元々持っているその腕の通信装置、探査ゴーグルはそのまま使用して良し。もう一度装備の点検をして、出発までにチームで攻略方法を思案するんだ。では、昼食まで解散」

木教官がそう言い終わるや否や、逃亡役の教官らしき人物三人は互いに笑顔を交えながら、エア・ボードに乗ると神殿奥の洞窟へと入って行った。

学生たちは各チーム事に年長のリーダーを囲んで円陣を組み、装備の確認や追跡の手順などの話し合いに入った。

そんな彼らの様子を隠れずと見ていた青は、少しばかりの羨望と悔しさを滲ませながら彼らをじっと見ていた。

「相変わらず格好いいよな、二年前にここで爆破事件があった時、犯人を追い詰めてここまでやって来た、特殊警察部隊の人を養成する学校だよな？ あの時隊員はあつと言う間に犯人を捕まえたっけなあ」

同じくセイも彼らに視線を奪われたまま言った。

「そうだよな。うわあ。本当だ！ かつこいいなあ。青が三年続けて

試験に落ちた学校でしょ？」

誠の屈託のない言葉に、青の拳が頭を打った。

「いつてーっ」

「それは禁句だよ誠、青だって武術は誰にも負けなかったって聞いているよ、だろ？ 青？」

「ふん」

全く持つて不服そうに返事をした。

「じゃ、何が原因なの？ あ、試験でしょ！ 試験の点数悪かったんだ」

黙ったまま青に睨み付けられた誠は、自分の口に封をすべく両手を当てた。

「試験はそんなに悪く無かったよ。原因はあいつだ。あいつのせいで落とされるんだ」

青の視線の先、黒い戦闘服を身に纏い、腕を組んだ背の高い男をセイと誠は見た。

年は20代前半、茶色の髪を風に靡かせ、その顔に微笑みは宿しているが、目は鋭く人を見透かすような、射すくめる目をして辺りを伺っている。

「あいつだよ。あいつが教官で居る限りオレはきつと受からないよ。ちっ、木京介……もくきょうすけ名前も覚えちゃったよ」

彼の周りでは荷物を背や手にした生徒たちが、立ったまま彼の話を真剣に聞いている。その中の数人が身に着けている黒と水色の制服は、去年の受験に合格したら青も着ることになっていた、憧れの制服であった。

「女の子もいるんだね青。あの肩までの長さの茶色い髪の女の子可愛いや」

セイが目を輝かせて言う。

しかし、青はその隣にいるプラチナ・ブロンド色の髪の毛に、アイズ・ブルー色の瞳を持った女の子に興味を持った。

さつきからにこりとも、笑顔も見せずにじっと木京介の話に耳を傾

けている。不思議な空気を感じるその子に目が釘付けになった。

少なくとも、青が受験した年にはこんな綺麗な子は居なかったなと、考えていた。

もし、受かっていたら、今頃一緒に訓練していたはずだと思ったら、青はちよっぴり悔しかった……。

こんな特別な風貌の女の子がいたら、絶対に気づくはずだ。

「その隣の子の方が可愛いよ」

青は言った。

「そっか？ まあ、綺麗な顔してるけどな」

「ねえ、ふたりともまずいよ、禰宜様とセザール先生がすごい顔してこっちにやって来るよ！」

誠が言い終わるか言い終わらないかの後、あつと言う間に側へやって来たセザールは、三人を頭ごなしに怒鳴った。

「こらっ、何度言わせるんだ！ 仮病を使って授業をサボるなど！ おまえ達はまったくしょう懲りもない奴だ！」

「いや、先生！ 朝は確かにお腹が痛かったんだけど、途中からは直ったんで少し散歩に……」

「バカ者……！ 三人が揃いも揃って腹痛とはあり得ん！ 首謀者として重形青！ これから全校舎の掃除を命じる！」

「ええええ……っ、何でオレ一人なんだよ！」

「首謀者はいつもおまえだからだ！」

「遊んだのはこいつらも一緒じゃんか！」

「校庭100周、猛ダッシュマラソンも追加して欲しいか？」

セザール先生が緑の目を細めて静かに言くと、青はこれ以上罰を増やしたくない一心で校舎へと走り去って行った。

勿論、とぼつちりを受けたくないセイと誠も一緒に。

そんな彼らは、広場にいた学園のエリート生徒達の、失笑を買ってやる事も勿論知らずにいた……。

「セザール先生、重形青は相変わらずのようですね」

そう言いながら木が、セザールに近づいて来た。

「あ、久しぶりですね木教官」

木は微笑みながら、セザールと並んで彼らの後ろ姿を見ていた。

「もちろん青は、今年も受験するのでしょうか？」

その言葉にセザールは顔を曇らせた。

「それがですね……、青は今年はまだ受けない言っのです……」

「え？」

「流石に去年三度目の受験に落ちたのが堪えたようで、あの時の落ち込み様は半端ではなかったんですけど、あれ以来勉強は愚か体術の勉強も全くなりまして、授業をサボってばかりで叱咤激励しても、もう奴の耳には入りません。残念ですが本気なんだと思います。」

「彼はまだ相変わらずですか？」

「ええ、姉の瑠華は物心ついた時から力は使えたのですが、青の方はさっぱりでして、流石に本人も諦めたようです。同じ血の流れをくみながら、青はせいぜい念じた小石を転がせるくらいでして、特にこれと言っほどの能力は……こういうこともあるんですね」

彼の二歳上の姉瑠華は十二歳の時に一発で受験に合格してから、かれこれ今年で三年間修行している。

元々、念力という未知なる力があつたものの頭脳明晰、身体能力抜群でトップの成績で合格した。それに比べて青は体力こそあつたものの、勉強も武術もエスケープが祟り、進級すれすれであつたし、言われてるように瑠華のような目を見張るくらいの特種能力は持ち合わせていなかった。

元来、こういう能力は血統でもあるから姉が持つているなら、同じように持つていても不思議ではないはずなのだが……。

周りの心配どおり未だ、開眼せずにいた。

学園とて姉がトップの成績だったとか、特種能力の持ち主だとかだとしても、弟も何時かは等という浅はかな理由でアカデミーに入

学させるほど甘くはない。

青の後ろ姿を見送る木の顔から笑みが消え、ここに来て初めて彼の顔が曇った。

神殿の修行者と共にほぼ掃除を終えた青は、最後に大食堂の配膳を任された。

昼食時とあつて食堂は教職者や神職者、そして学生たちで溢れ返っていて、石作りの高い天井に声が響き、いつそう活気を帯びていた。

みんなの食事が済んだら、青もやっと食事ができる。

「何だつてオレだけこんなことしなきゃいけないんだよ、ぜーたい虐めだ!」

「悪いな青」

トレイを持って並んでいるセイが、肩を竦めてすまなそうに苦笑いした。

青がぶつぶつ不平を言いながら、白いタブリエを腰に巻いて大鍋のスープをかき混ぜていたとき、学園の学生達の一団がどつと入って来た。

この食堂は神殿の従者及び、ここで生活をする子供達が一斉に食事を取つても、学園の学生が昼食を共にしても、まだ席は十分に余裕があった。

「お、青、さっきの女の子たちだよ。うあ、可愛いなあ」

列の後尾に、トレイを持って並ぶ赤茶色と、例のプラチナブロンドの女の子を見つけて、セイが目を輝かせた。

セイは食べ物を選ぶ振りをしながら、自分の後ろに並んだ生徒を何人かやり過ごして彼女らが側にくるのを待った。

「青、俺力ボチャスープ大盛りでな」

「残念でした、今日はカボチャスープはもう品切れでした。タマネギスープで我慢しな」

「ちえっ、もう売り切れかよ。一番おいしいのにな」

青はそう言つて、無理矢理セイにタマネギスープを注いだカップを渡した。

その時、丁度例の女の子達がセイの横にやつて来た。

「彼女たち、今日のおすすめスープはカボチャだよ。」

女の子達に、にっこりと微笑んで青はそう言った。

「おまえなあ……」

セイは拳を作つて殴る構えをした。

「そうなの？」

赤い髪の子が微笑んで訪ねた。

「そうそう、絶対お勧め。馬鹿はタマネギスープを選ぶけどね」

彼女らの後ろに回つて、セイは拳を高く上げて振り回す。

「じゃ、それ貰うわ」

「OK！ じゃ、隣の彼女もこれでいいかな？ 君可愛いから大盛りにしてあげるよ」

さっきよりも、更ににっこりと笑つてカップにスープを注いでいた青が顔を上げると、辺りが硬直するような凍てついた、気まずい雰囲気始めて気がついた。

「な、何だ？」

付近にいた学園の生徒、みんなが青を凝視している。

そして、目の前のアイスブルーの瞳は、勿論その色の如く氷のように冷たく、その表情は微動だせず青を見ていた。

そして、数秒経った後、その場は大爆笑に包まれた。

「あはははははははははは」

赤毛の女の子が青に指を向け、大口開けて笑っている。

しかも、目に涙さえ浮かべて……。

「な、なんだよ？」

青もセイもみんなが笑つて理由が分からない。

「あ、あなたね……、あははははは」
まだ笑っていた。

「何がそんなに可笑しいんだよ！」

「あのねえ、シオは女の子じゃないの、”男の子”なのよ」

「ええええええ！？」

驚いた青とセイは、再びマジと”彼女”を見た。

白い肌や長い睫、肩までのプラチナブロンドに輝く髪の毛の容姿は、あり得ない程綺麗な顔立ちをしている。

「マジかよ……」

「まあねえ、確かに間違えても無理はないでしょうけど、シオ、得なんだか損なんだか分かんないね」

「ふん」

シオと呼ばれた男の子は、何事も無かったかのように無表情で、食べるものをトレイに乗せて前へと進んで行った。

確かに声や動作もよく見ると、きびきびとして男の子らしい。黒に紺のラインの制服は青と同じ年齢を示しているので十二か十三歳だろう。

身長は青と同じくらいだろうか、年齢からすると飛び抜けて高い方でもない。黙ってじつとそこに立っていられたら、誰だって女の子と間違っただろうと思える容姿に、ふたりは口をあぐりと開けたま呆然とシオを見ていた。

「ちなみに私は周梨子^{しゅうりこ}。彼はリグラス・シオ、よろしくね」

「よ、よろしく……」

青は我に返るとしどろもどろで返事をした。

「相変わらずバカね」

「瑠華先輩！」

彼女はトレイを持って隣にやってきた、髪の高い3歳年上の重形瑠華と、その隣で穏やかに笑っている工藤^{リク}莉空のふたりを見た。

「あーーーーーっ」

青が瑠華を見て大声を出した。

「てめーもいたのかよ」

「青の姉ちゃん！」

セイが驚いて声を掛けた。

「こんにちは、セイ、久しぶりね。大きくなったね。バカ青は相変わらずド馬鹿だけど」

瑠華は冷静に青を見て言った。

「うん。相変わらずバカ全開だよ」

「こらっ、セイ」

「瑠華先輩のお知り合いですか？」

「お知り合いも何も、残念ながら、この厨房野郎は私の不甲斐ない馬鹿弟なのよ」

「えー、そうなんですか？」

美しく才に長けていて、みんなから一目置かれている瑠華の弟となると、少しばかり見る目が変わってくるのはしょうがない事だったが、目の前の少年が悪ガキ以上には見えない事に、少しばかり驚く梨子だった。

青にしてみれば三年前に、一緒に受験を受けて自分だけ受かった瑠華が、この世でたった独りの肉親であるにも関わらず、あれから一度も自分に会いに来てくれない、姉の冷酷さに腹が立っていた。

目の前の姉は当然ながら青が知っていた当時より、かなり身長が伸びていたし、面影は少しばかり大人に成長していた。

「この子バカだから3年連続受験に落ちてるのよ。話しているとバカが移るわよ梨子」

「なんだと！ てめー」

青は怒りでお玉をくるくる振り回す。

「さあ、さっさとかぼちゃスープ入れなさいよ」

瑠華は顎を癢って鷹揚に命令した。

「ブスは玉ねぎスープにしときな」

「あんたねえ！」

「瑠華、姉弟喧嘩はそのくらいにして先に進んでくれないか？ 僕

はお腹すいたんだけど？」

その声に振り向くと、今回瑠華のチームのリーダーを務める、ひとつ年上の工藤^{リク}莉空がいた。

「莉空先輩！ すみません！ このバカが絡んでくるもので……」

「君が瑠華の弟だつて？ 僕は工藤莉空、よろしくね」

背が高く少し長めの薄茶色の髪と、薄紫色の瞳を持つ工藤莉空の、余りにも穏やかで礼儀正しい様に、青は圧倒されて思わず頭を下げた。

必然にかられて彼には、素直にカボチャスープを入れた。

「こらーっ、あんた私だけ入れないつもり？」

そう言つて激怒する瑠華を見て苦笑する莉空は、自分が入れて貰ったスープを嫌さず瑠華のトレイに乗せた。

「あ、莉空先輩……」

「僕はいから」

「青、莉空先輩に挨拶なさい」

「は、はじめまして……、重形青です」

青は照れながら挨拶をした。

「青君、こちらこそよろしくね」

「青でいいです……、みんな呼び捨てで呼びますから……」

「そう？ ありがとう青」

そう言つて微笑む莉空を見た青は、これまで会ったこともない器の大きな人間だと直感した。

それにしても瑠華の外見は少し変わりはしたものの、中身はちつとも変わらないことにほつとすると同時に、いま同じ立場にいない自分が少しばかり歯がゆかった。

「瑠華先輩とは初めて一緒に任務に就くけど、こんなキャラだっけ？ もっとクールな人かと思ったな」

苦笑しながら梨子がシオの耳元で囁いたが、シオは口角を少し上げただけで何も言わなかった。

そうして青は仕方なくもう一度、莉空の為にスープを入れて渡す

と、彼は優しく微笑んで礼を言い、まだふざけ合ってる後輩を急かして先に進んで行った。

彼らの楽しそうで和気あいあいな姿を見て、羨ましさや悔しさが入り交じった複雑な心境で、青は彼等の後ろ姿を見送るのだった。

3・海に落ちた地図

すべての配膳を終えて、やっと食事になりつづけることになった青は、トレイを持ってセイ達を探した。

「おい、こっちこっち！」

南側のテラス横のテーブルで、セイが手を振った。

隣のテーブルには瑠華たちのグループ他、学園の生徒達も大勢が座っている。

彼等は既に食事を終えて談笑する者、テラスから透き通ったエメラルド色の海を見て、その綺麗さに感嘆する者など、様々に午後のひと時を楽しんでいた。

「はははは、お前、掃除やらされてたんだって？」

いつの間に帰って来たのか、セイの横に座っている竜二がケラケラ笑った。

さっきまでの敵は、同じテーブルで食事をとっていた。

「お前はどこから入ったんだよ」

「俺？ 今帰って来たところ、どさくさに紛れて午後から授業に出ようと思って」

そう言つて、竜二は外で買ってきたらしいハンバーガーを嚙った。こついうところは抜け目のない竜二だったが、不器用な青はいつも目玉をくらって罰を受ける羽目になる。

「今日は奴らが来るって知ってたから、先生たちもそれどころじゃ無いと思つてね。それにしてもうじゃうじゃ居やがるな」

「青ったらさあ、あのテラスにいるだろう？ プラチナ色した髪の子が、彼をさあ女の子と間違えて爆笑もんだったよ」

セイはまだ笑いかみ締めて言う。確かにシオは隣の女の子よりも背は高いが、

何より華奢であどけなさが宿る中性的な顔をしていた。

「男かあ？ あんななよつちい奴が男？ しかも学園の生徒なのかよ」

「竜二、声がでかいよ」

セイが口止めする間も無く、テラスに凭れていた学園の生徒数人が、怒った顔をして振り向いた。

勿論、噂の張本人であるシオや、さつき梨子と言って自己紹介してくれた女の子も、一斉にこちらを見ていた。

「なんだよ」

竜二は悪びれてない……、まあ、いつだってそうだが……。」

「ゲス野郎は黙れ」

シオの隣にいた同年代らしき、少し長めの薄グレー色した髪の、背の高い少年が竜二に言った。

「なんだと！」

「おまけに単細胞」

「おまえ喧嘩売ってんのか？ 上等じゃねえか」

竜二が立ち上がって少年を殴りかかろうとしたので、流石に青は止めにかかった。

「やめろつて竜二」

ふたりの間に入って、青は竜二の胸を押さえた。

「負け犬の遠吠えか？」

少年は青たちを見て、勝ち誇ったような薄ら笑いを浮かべた。その見下したような高慢な態度は、青の怒りに火を点けた。

「こっちは訓練受けてるんだ、喧嘩じゃ負けな……」

ドスツ。

少年が言い終わらないうちに、隙を見てぶち込んだ青の拳が少年の腹にあたり、その拍子に彼が手にしていた機械が、宙を舞って外の海へと落ちて行った。海面まで百メートルはあるだろうか、更に水深は百メートルはあり、その切り立った岸壁にこの建物は建っていた。

「あーーーーーっ！」

青の素早いパンチが効いたのも驚いたが、何より彼等が焦って見
ていたのは機械の方で、そこに居た誰もが固唾を吞んで深い海の底
に落ちて行く、小さな機械の固まりを見送っていた。

一瞬にして、さっきまでのざわめきがピタリと止んで、辺りは重
苦しい静寂に包まれた。

みんなの視線は、信じられない程の高速パンチを喰らわせた青と、
腹を殴られて機械を落とした少年に集中していた。

「バカーーーーー、トオル！ どうすんのよ！」

梨子^{りこ}が怒鳴った。

トオルと呼ばれた少年は、さっきまでの強気から一転蒼白な顔し
て、二度と取り戻すことのできない機械の行方を呆然と見つめてい
た。

「あんた、あれを落としたと言うことが、どういう事が分かってる
わよね……」

近くにいた瑠華が、トオルの首に腕を回してドスの効いた低い声
で囁いた。

「あ、あの……え……と、すみません瑠華先輩……」

「ああああ最悪！ 渡された物を壊しても無くしても、二度と同じ
物を貰えないのは分かってるんでしょよね！」

今にも瑠華に、首を絞められそうなトオルに梨子が詰め寄った。

「でもさ、まだ始まってないんだし、木先生に話してみれば……」

「あつまーーーーい！ そんなことは絶対あり得ない！ 無くした場
合は自分たちで何とかするしかないのよ！」

「く、苦しいです瑠華先輩！」

「あんた、私たちに評価Dを付けるつもり？」

トオルの首が更に閉まる。

「なんだなんだ？ 余程大事な物らしかったんだな」

連中の血相を変えた様子を見ていた青と竜二は、彼等のただなら
ぬ慌て振りを見て、大変な事になったという事実だけは分かった。

ただ、テラスから身を乗り出して下を見ていた莉空とシオのふたりは、妙に冷静な顔をしていた。

「黙れおまえら！ 元はと言えばお前が悪いんだろうが！」

トオルは青に叫んだ。

「あんなに簡単に訓練生が殴られると思ってなかったんでさあ、こっちが驚いたぜ」

「わからない奴らだな、手加減してやったんだよ！ それよりどうしてくれるんだよ！」

「あれ、今度は俺たちへ責任転換か？ 油断した自分が悪いくせによ……」

その時、瑠華の回し蹴りが青の腹にジャストフィットして、青は5メートル程後方に吹っ飛ばされた。

「おまえもな！」

周りの者が息を呑む。

「ぐえっ！ 痛っ………っ、油断しちゃった……」

青はお腹を抱えたまま、頭を床に着けてうずくまっている。

「殺されたいか青」

瑠華が青を見下ろしながらそう言い放ち、トオルの胸倉を掴んだので彼は思わず咽せ込んだ。

「我がチームの女性達はなかなか気が強いねシオ」

莉空とシオはクスリと笑った。

「やめるんだ」

「先生！」

何時の間にか、側に来ていた木京介が手を翳して騒ぎを制止した。
「放してやれ瑠華。まあ、詮索の要となる大事な機械を、海に投げられちあぁ頭に来るのも当然だろうけどな」

「当たり前です！ 大事な地図なのに！」

瑠華が喚きながら漸くトオルを放した。

「そうですよ先生！ 怒って当然でしょう？ それとも新しい物を貰えますか？」

「それは無いな」

「ほら~~~~やつぱり、木先生つてばケチっ」

梨子が文句を言う。

「違っよ、今回はまだ搜索始まって無いわけだし、どうしようか一瞬考えたんだけどね、余分な計器は持つて来てなかったんだよ」

「じゃ、私たちに地図無しで探索せよと言っんですか？」

「瑠華、でも君はこの出身だし地図が無くて大丈夫なんじゃ…

…？」

「先生！ここは何層にもなる居住区ですよ。しかもトラップ岬まで逃げられたとなると、もう迷路としか言いようがありません。青のように毎日遊び呆けてる奴ならともかく……」

そこで瑠華は、何かを思い出したように言葉を止めた。

「そうだ先生。確か規則では無くした物は自分たちで探して対処しろでしたよね？」

「そうだ」

瑠華の目がキラリと輝いた。

「じゃ、先生！洞窟探査の地図代わりに、青を連れて行っていいですか？」

「ええええええええ」

「えーーーーーっ」

みんなが一斉に声を出した。

青も叫んだ！

突拍子も無い瑠華の提案に、木でさえ黙ってしまった。

「あり得ない！こんな度素人に僕らの任務が務まるわけ無いだろっ」

真っ先にトオルが反対した。

「その度素人にさっき、いきなり殴られたでしょあんだ……」

「うん。確かに」

隣で梨子があっさりそう言って頷いた。

周りで、このチームの成り行きを見守っている人々も、頭を振って

納得している。

「うげっ……」

トオルは悔しさで、言葉にならない言葉を漏らした。

「確かに、こいつはバカだけど、勉強もしないで遊んでばかりいたお陰で、洞窟に関してはほぼ網羅してます。度素人のこいつを連れるなんて、ほんと足を引つ張られるとは思うんですが、地図が無いのでは話になりません。」

「バカバカ言うなドブス！　だゝれがお前達に洞窟の案内なんかするもんか！　ふん！」

「瑠華さんも冗談すぎるぜ、足手まといになっても手助けになる分けない！」

「確かにトオルの言う通りで、こいつは学園の受験に3度も落ちたバカで無能な奴で本当に足手纏いなんだけど……」

「てめー！　瑠華！　自分が一度で受かったからって偉そうな口利きやがって、エアボードでオレに勝ったことなんて無かつたくせに」

「ふん、あんたに合わせてあげてたのよ、今だって負けるわけないのよバーカ」

「何だとーっ」

「クソガキが！　勝負したいわけ？　何時でも受けてたつわよ！」

「やってやるうじゃないか！　ドブス！」

「じゃ、丁度いいじゃない。私たちこれから洞窟に入るんだし、勝負ついでに私たちの地図となつて中を案内しなさいよ！」

「おう、やってやらあー！　っ！」

「男に二言は無いな！」

「あつたりめえよっ！　かかって来やがれドブス！」

怒りで爆発したまま拳を高く振り上げて、青はふと考えた。

あれ？

「はい。先生決まり！　こいつを案内役として連れて行きます！　いいですね先生」

「……まあなあ」

事の成り行きに木は苦笑いした。

まんまと瑠華の策略に乗ってしまった青は、何が何だか分からぬまま、いや何かが可笑しいのには気が付いているが、今必死にクルダウンしようとしているが、この成り行きを理解できないでいた。勢いで案内すると言ったものの……。

何かが違うような……。

「ほら、急いで荷作りして来なさいよ。三日分の食料は勿論、自分が必要と思われる物。そしてエアボード。ただし、自分で持てる分だけよ、誰もあんたの荷物なんて持つちゃくれないんだから。ほら、早くして！」

「……………」

青は何が何だか分からない。

「まあ、しょうがないね認めよう。青君は未知数だなあ。君の言う通り助けになるのかハンデになるのか、賭のようなものだね」

木は笑って青を見た。

「何でい！ どうせあんたのことだからオレのことハンデになるって思ってるんだろ！」

「青！ 木先生に向かってそんな口効くんじゃないわよ」

「へん！ いいんだよ！ どうせもうおれは受験しないんだからな、オレにとつて先生でも何でもないやい！」

一瞬、瑠華の顔が曇ったのを見逃さなかった木だったが、手を叩いてその場の空気を変えた。

「とにかく、もうあまり時間が無いから青君は準備して来なさい。セザール先生には俺から話しておこう。みんなはもう一度装備の確認をして策を練ること。じゃ、一時間後に神殿前の広場に集合だ」

その言葉を合図に、みんなそれぞれのチームで集まった。

そして、青もわけのわからぬうちに荷物をまともに帰るのだった。

「莉空先輩……、これって……いいのか悪いのか……、超チームワークが悪いと思われるんですけど」

恐る恐る梨子は莉空の顔色を伺ったが、意外にも莉空は笑っていた。

「地図が無いと話にならないからね。洞窟に詳しい者がいるところちも助かるだろう。シオもトオルもそれでいいね」

「足手まといになったときは置いてくらしやいいんだ、どこかの店にホログラム地図くらい売ってるだろう」

「甘いわね、ここに精通してる青ならともかく、地図ですって？

地下何層にもなっている全部を網羅した地図なんてあるわけ無い。迷子になったら最後、探すのも大変だし下手したらここから出られなくなるわよ。だから渡したでしょう？ 私たちだけの追跡装置、絶対落とさないようにね、アームの機械で各位置が確認できるから序でに私と梨子とで他のチームにひとつずつ、鞆に追跡装置を入れて来たから、それぞれのチームの位置も確認できるってわけ」

「すごい！」

腕に付けている装置に目をやりながら、トオルの瞳が輝いた。

「流石、やるな瑠華先輩」

「このくらい他のチームも何らかの対策取ってるはずよ」

「そうだね、今回は殆ど実践に近いから気を抜かぬようにね。トオルと梨子はまだ任務に出たことないんだよね？」

「はい。シオ君は初めてじゃないのね？」

梨子が尋ねた。

「ああ」

「僕と瑠華、僕とシオは一緒に任務にでたことあるけど、今回のチーム編成は殆ど初めての顔合わせだ。僕が言わなくてももうみんな心得てるだろうけど、特殊部隊と言うのはある意味チームワークがとても重要だからね、任務成功の鍵はそこにあると言っても過言では無いと僕は思ってる。実践はそう言う意味でも個々の能力がとても試される場となりうるんだ、みんなで頑張っていこう」

「はい」

「マイクはチャンネル3に合わせておいてくれ、僕ら7班のチャン

ネルだ。瑠華、青の分あるかな？」

「あるわ。ひとつ余分に持ってきてたの」

「じゃあ彼が返って来たら着けてあげてくれ、一通り彼にルールの説明をしたら……驚いた。早いね、もう来たよ」

「あいつは、何時だって遊ぶ準備万端だから、リュックには必要なものが普段から揃ってるのよ」

瑠華は苦笑いしながら青を見た。

みんなが振り向くと、頭には緑のゴーグル、手には愛用のエアボードを、背中には黄色い大きなリュクサックを背負い、パンパンに膨らんだ荷物の中から収まりきれなかった黒猫のぬいぐるみ、マルの頭が覗いている。

瑠華が近寄りマルに手を掛けようとしたとき、青がその手を振り払った。

「触んな」

「相変わらずこの小汚いマルを持つてんのね、あんた幾つよ」

腕を組んで青を見下した。

「うるせつ、家を離れる時は必ず連れて行くんだ」

「可愛い」

梨子が笑った。

「おいおい、こんな奴で大丈夫なんですか？　瑠華先輩！」

トオルが不平を漏らす。

「なんだとお！」

「おまえと違って俺らはお遊びじゃない。この試験を機に本物の任務に就く事もあるんだ。真剣なんだよ！」

イラツとトオルが言い返す。

「なんだ〜〜〜！　オレにはお前を案内する義理はねえ！　自分たちでとつと行きやが……」

その時、瑠華の拳がトオルの頬に鈍い音を立てて当たった。

誰もが驚いている間に、瑠華は青の耳を引っ張って仲間から外すように、遠くに歩いて行った。

「……痛って……、あの姉弟凶暴だな……」

トオルは頬に手を当てながら涙目になっている。

「確かに……」

梨子は笑って、気の毒そうにトオルを見た。

「僕の出番は無さそうだ。全部瑠華が仕切ってくれるから、今回僕は楽だなあ」

莉空が笑う。

「莉空先輩、笑ってる場合じゃ無いですよ。青君が案内を拒否したらどうするんですか？」

「大丈夫だろう。瑠華はああ見えてもかなり冷静に事を運んでると思うよ」

「そうかなあ……、でも瑠華さんて見かけに寄らず気が短いんですね……しかも手が早い……、でも面白いのは青くん、学園では美人で通っていて、人気者の瑠華先輩に”ドブス”なんて言えるなんて……、なんだか大物振りを感じます」

梨子が羨望と驚きが入り交じった眼差しを、遠くにいる瑠華に向けた。

「おい、莉空、お前らのチームどうなってんだ？　なかなか賑やかそうじゃないか」

5班のリーダー・ジロイ・アッシュがやって来て、莉空の肩に手を置いた。

彼は灰色の髪で莉空と背格好も年も同じで、ふたりは良く似ているが少しばかり莉空をやんちゃにしたような笑顔で笑った。

そして、ふたりの周りにチームのみんなが集まってきた。

「まあね、面白くなりそうだよ」

「余裕で笑ってやがる。でも今回ばかりはオレのチームが先に教官を捕まえてみせるぜ」

「言ってるアッシュ」

莉空とアッシュは微笑み会った。

彼等は幼い頃から一緒に勉学に励み、任務を遂行したり、又は時

にライバルとしてチームを率いて実習に参加したりする同窓生だ。
おまけに低学年の時からずっと寮の部屋も同じで、気心も知れていて親友と言って良いほど仲が良かった。

「お、シオ。相変わらず独りだけ次元が違う顔しちゃって、今回お前が俺のチームに居ないのは残念だな」

シオは素知らぬ顔をして、腕の小さな機械をいじっていた。

「おい、シオ無視すんなよ！」

「アッシュ、白々しく偵察に来るな」

その繊細で大人しそうな容姿とは裏腹な、年上だろうが誰にでもぶつきらばうに喋るシオに、今更みんな驚きはしないが、莉空にするアッシュにしろ、間違いなく彼らがシオを可愛がっている事は確かだった。

「あれ？ シオくんご機嫌ななめかな？」

「僕のチームをからかうなよアッシュ、自分のチームの心配でもしてる」

「そうよ！ 先輩ったら失礼しちゃう！ 私たちじゃ不足だとも？」
黒髪の女の子が膨れて文句を言う。

「そうだそうだ！ 真由の言う通りだよアッシュ先輩！」
十四歳の早手草と、一つ年下の夕宇良が抗議する。

「あ、悪い、悪い。シオとは回数こなしてるから慣れてるもんでさあつい…… あはははは」

「何が”あはははは”だよ、ちょっとばかしかつこいと思っ
て何を言っても許されると思ってるんでしょ？ 先輩」

「何の話だよ宇良」

「でもね、でもね、学園人気投票では莉空先輩が一位だったんですからね、ちなみにアッシュ先輩は二位でした」

「宇良、それ仕返しかな？ 始まる前からチームワーク乱すこと
言うねえ」

「先輩こそ！」

それでも格別気にする風も無く、余裕で笑っているアッシュを、

宇良は”可愛さ余って憎さ百倍”って顔で睨むのだった。

「アツシユ、おまえのチームも揉めてるじゃないか」

「違う。でもないよお前には」

「うん。受けてたつさ」

学園？1と？2の二人は、爽やかな笑顔で微笑み合っただった。

4・7班+1人集合

「あんだねえ、今更行かないなんて男の風上にもおけないゲス野郎ね。さつき、二言は無いと言い切ったでしようが！」

拝殿近くまで連れて行かれた青は、真っ赤になった耳をこすっていた。

「あいつはいけ好かないんだ！一緒に三日間も過ごせるか！」

「あんだが受験に3度も落ちた理由が分かったわよ」

「何だよ……」

「あんたはね、自分勝手って過ぎるのよ。特殊部隊って言うのはね何よりもチームワークが大切なの、みんなとのスタート地点にも立てないあんだが、文句言うのは千年早いわよ、このクズ！」

「何だと~~~~、このドブス！」

青は瑠華の前で拳を翳した。

「ふん。だから千年早いつて言ってるでしょ~~~~っ！」

いきなり瑠華の拳が青の頬に当たり、青は外壁までぶっ飛んだ。

「痛ててててっっっ」

青は瑠華の強烈すぎるパンチに、再起不能で立ち上がる事ができない。

瓦礫がガラガラと崩れる音に、みんなが振り向いた。

「千年早いつて、さつきから言ってるのに……」

仰向けに寝転んだ青を、仁王立ちして瑠華は見下ろしている。

「もしかして、死んだ？」

動かなくなった弟に、軽薄な笑顔を浮かべて……。

「うつせえ、くそ女……痛て……。ドブス、パンチ力増しやがったな……」

「あんだだつて、ただで洞窟の案内するのは嫌だろうと思って、せっかく褒美にこれあげようと思ったんだけどな……」

瑠華は首から下げていた大粒の月光石を、胸元から出して青の目

の前でゆらゆらと揺らせて見せた。

すると、青は目を輝かせていきなり上半身を起き上がらせた。

「昔から、これ欲しがっていたでしょう?」

「ほ、ほんとか? 姉ちゃん!」

顔には笑顔が張り付いている。

「姉ちゃん」なんて久しぶりに聞いたわ。あんたは何時だって私のことを”くそ女”とか”ドブス”とかしか言わないのに……」

「ねーねーほんとか? 姉ちゃん!」

「もう私の話なんて聞いちゃいないわね、あんた」

「行く! オレ一緒に行くよ。そして案内してやる!」

「現金な奴!」

「だってさー!、それ売ったら幾らになると思ってるんだよ!

家の一軒や二軒……」

言葉を止めたのは、目の前に瑠華の拳が差し出されたからである。

「あんたね、これ売ってごらんない。殺すよ。これは母さんの形見なの、売ったら承知しないからね」

「分かった分かった! 分かったってば!、目の前で拳振りかざすの止めてくんない?」

「でもさ、もし、どうしてもお金が必要な時には……へへ」

「許さん!」

「でもさ、でもさ、命に関わるような時は……」

「まだ言うか!」

瑠華が殴る振りをするので、身の危険を感じて青は後ろに下がった。。

「で、どうすんの? 一緒に来るの? 来ないの?」

「……それ本当にくれるのか?」

しかし、青の目の輝きは衰えず、うつとりペンダントを見つめている。

「やる。でもチームは7班あって捕まえられる教官は3人だけ、その中の1人を捕獲できた場合だけよ、しかも期限は三日間だから捕

まえられない可能性もあるの、かなり難しいと思う」

「でも、誰でも一人だけ捕まえたらいいいんだよな」

「勿論、女に二言は無い」

「よっしゃー！っ、行く！」

青はいきなり起き上がって俄然張り切りだしたが、そんな彼を尻目にほくそ笑むのは瑠華だった。

”単純な弟を持つと助かるわ”……と。

「話はついたかい？」

莉空は微笑んでこちらに歩いてくる姉弟を迎えた。

「勿論よ。私たち仲良し姉弟だもの、ね青」

瑠華は弟を見て微笑んだ。

「そーだよ兄ちゃん！ 心配無いからよう。オレがいるからには一番取ってやるからな、なー姉ちゃん」

白い歯まで見せて笑う青を見て、似た者姉弟だと梨子を含め周りの誰もが思った。

「あらら……、このふたりどうやら何らかの利害が一致したようだよ」

「怖いこの姉弟……なんなの？ このふたりの不気味な笑いは……、切り替えが早いと言うか、なんとと言うか……。シオはどう思う？」

トオルが尋ねたが、シオは相変わらぬ無表情でみんなを見ていた。

「オレのアームバンドには、その場所に来たら鮮明に映し出せる、ホログラム立体地図のソフトがインプットされている、あいつが役に立たない場合はいつでも放り出せるさ」

「何で早くそれを言わないんだよシオ、それがあればあいつを連れて行かなくても……」

「もの言わぬ地図より、現地に詳しい奴がいた方が何かと便利だ。だから黙っていた」

それが何か？　とでも言うように、無表情な顔を向けられてトオルは少したじろぐ。

シオと話すといつもこんな調子だ。いつも何となく圧倒される。

「そ、そりゃそうだな、確かに」

うーん、こいつとも話が続かないなあ……、などと不安になるトオルだった。

「あらアツシユ先輩！」

「よう瑠華！　今回はライバルだな」

「負けませんよ！　私たち」

「お手柔らかにな」

アツシユはちらりと青を見た。

「あ、弟の青です。この辺のガキです。さ、頭下げて」

無理矢理、青の頭に手を当て下ろした。

「やあ、頼もしいんじゃないの？　こりゃやられたかな？」

「どうだか、足手まといにならないければいいんですけどね」

「さ、偵察はもういいだろうアツシユ。僕たちこれから青を交えてミーティングするから」

「はいはい。じゃ、お互い頑張ろうね！」

そう言って手を振りながら、その場を後にするアツシユを見送って、莉空は自分の首の辺りに手を持って行く。

「油断も隙もありゃしないな、ほら」

莉空はいつの間にか、制服の襟に着けられていた5ミリほどの超小型発信器を、みんなに摘んで見せた。

勿論、さっきアツシユが着けたものである。

「おお、敵もやりますね莉空先輩」

梨子とトオルが声をあげて関心する。

「まああまり時間も無くなってきたから、みんなで自己紹介しようじゃないか。僕は学園で顔は合わせた事があっても、お互いの事は良く知らないからね、瑠華は青にマイクをセットしてくれ、その

間に自己紹介するよ。まず僕はリーダー^{リック}の工藤莉空四学年、今回六学年生が参加していないのは、卒業試験の任務に就いているからで、その手助けに、五学年生がヘルプに就いている。で、僕ら四学年がリーダーとなる。僕の特殊能力は幻影術、記憶を操作する能力を使える。言葉では説明しにくいから、使う機会があれば分かってもらえるんじゃないかな、みんなの特殊技能もそうだね、だから任務中自分の能力を使えると思ったら言ってくれ。でもまあ今回は如何に早く追跡して、捕獲と言うことが一番に問われるので、特殊能力的な事より体力チームワークを試されると思うんだ。で、それはさっきも言ったように”如何に早く捕獲”に繋がる。勿論、これはそれぞれの評価にも繋がるので、みんなで力を合わせて頑張ろう。僕からは以上だ。じゃ、次は瑠華

「私？ そうねー、念術で物体を止めること……、それを少しは使えるかな？」

青の腕に機械を取り付けながら、上の空で返事をする瑠華の、意外に消極的な返答と一緒に活動したことの無い、梨子とトオルは拍子抜けした。

しかし、それに気付いた莉空はクスリと笑った。

「えらく控えめだな。崩れ行くビルディングの崩壊を、止めることができるって言えば？」

「ええええー……そうなんですか？」

「そうねえ……例えば、今みんなの動作を止めるとするじゃない？ その隙に、動かないトオルを何発も殴ることができたりするわけよ」

トオルが思わず瑠華から一步下がった。

「怯えすぎだトオル、ははは。それに瑠華はメカに強いから頼りになるよ、じゃ次、梨子」

「えーと、私は今年二学年に進級する梨子です。特技は水を操ること。雨を降らせたり洪水を起こしたりできる能力と、今回このチームに入ったのはきつと*3・サイコメトリーの能力の二つを持って

いるからだと思います」

「すげえなあ梨子も、じゃ俺、ナイガトオル。梨子やシオと同じ今年二学年に進級組みで、特技は植物を自由に操ることができるかな」

「じゃ、次はシオ」

「オレの能力はテレポート」

「噂には聞くけど、テレポートの能力を持った奴は少ないんだよね、今まで同じクラスには独りも居なかったよ」

トオルが言った。

「そうだね、テレポーターは非常に少ない。しかもシオ程の能力を持った奴はそうそういないと思うよ」

「ねえねえ、それってどんな能力なのさ？」

青の素朴な質問を、バカにしたようにトオルが呻いた。

「こいつ、だから3年間も受験に落ちてんじゃないの？ 本当に瑠華先輩の弟なんですか？」

「うん。バカでごめんね」

瑠華はにっこりと笑った。

「テレポートとは瞬間移動のことだよ。彼が念じた地点へ一瞬に移動できるんだ。そして、シオの凄いところは、彼は自分だけでなく彼と手を繋いでいるとか、タッチしている者、物体は総て移動できる……だったよねシオ」

莉空がシオを見ると彼は軽く頷いた。

「へえすごいなあ！」

青が感嘆の声をあげる。

「じゃあさ、じゃあさあー……」

「宇宙船のワープとは別物だ」

シオは嫌さず返事した。

「んー？ 今、オレの心を読んだか？」

「ふん。単純バカの考えそうなことだ」

シオは冷たい目をして突き放した。

「何だとー！ーっ」

腕をぶんぶん振りかざす青を、瑠華が後ろから羽交い締めにした。
「放しやがれ瑠華！」

「じゃ、青。自己紹介してくれるかな？」

「いーっす！ オレは重形青十三歳、特技はエア―ボード、それから……」

「性格はアホでーす。もういいわ青、時間無いから」

「こら！ 最後まで言わせろよ」

「まーまー、ごめんね青本当だ。そろそろ集合らしいよ、みんな、木教官が出てきたから行くよ」

莉空が荷物を持つと、みんなの顔付きが変わり、各自荷物を手にして急いで莉空の後に続いた。

青は彼等の中に入ると、見るからに優秀そうな数十人の学生達に圧倒された。

彼等はそこに立っているだけで、子供とは言え戦闘態勢のオーラが漲みなぎっていた。

青は一人だけ私服で原色の緑の服を着ていたし、一人だけ妙に脱戦闘モードオーラを発していて、当然の如く浮きまくっている。

おまけにひとつ大きな欠伸をして、後ろから瑠華に頭を小突かれた。
「あんたねえ、みんな真剣なのよ。遊びじゃないんだからね。」

「わかってるって……」

そう言いながら、鼻の穴に指を持って行こうとしたところを、パシッと瑠華に払われた。

「ー！たく！ 分かってないじゃない！」

「痛ってえなあ！ 何すんだよー！ーっ」

「あんた今、鼻を穿ほじろうとしたでしょ！」

「……しねえよ……」と言って、頬をポリポリと搔いた。

相変わらず総てを見透かす我が姉が、青は少しばかり恐ろしかった。

「我ながら本気で心配になってきたわ……、あんたを連れて行くの

が凶と出るか吉と出るか……」

「はははははは、姉ちゃん大丈夫だよ。任せときな」

につこり笑う青の顔を見て、度胸だけはいい弟がどこまでチームに付いて来れるのか、見てみたいものだと思った。

広場では木教官を前に各チームごと、順番に7班が勢揃いしていた。

「さあ、準備はいいかい？」

「はい」

みんなが一斉に返事をした。

木が時計を見て30秒ほど経っただろうか、手を振り上げた。

「開始！」

その声を合図に、各チームはそれぞれ広場を後にした。

5・探索開始

洞窟案内人の青は当然ながらチームの先頭を走っていた。

彼を筆頭に瑠華、トオル、梨子、シオ、そしてリーダーの莉空と続いている。

時には1メートル幅まで狭まる洞窟の道には、所々商売根性丸出しの出店が並び、住居と商店が入り交じり混沌としていた。

その中を縫うように、6人のエアボードは先を急いでいた。

「青、言い忘れたけど出店の商品を壊したり、人にぶつかったり怪我を負わずと減点だから注意してよ」

瑠華がゴーグル内蔵のスピーカーで話しかけてきた。

「言われなくてもあたりめえのことじゃんか！ 商品や人にぶつかるとして事はこつちの命にも関わるからな、おまえだって知ってんだろ！」

かつて瑠華も三年前までは、この洞窟が遊び場だった。

何度も青とエアボードで、スピードを競い合ったか数知れない。

しかし、三年前の幼い弟は成長して背も高く体力も増したようで、特殊訓練を受けてきたこのチームを、引っ張って行くのに十分なスピードを保っている。

しかも洞窟に慣れているせいで、下手に余裕があるからあちこちよそ見をしている。

自信満々なのは伊達ではない。

「青、少しスピードを落としてくれ」

後方から莉空が話しかけてきた。

「なんで？ 早く追いつきたいんじゃないのか？」

「勿論、ある程度は奥深く入って行く必要はあるが、教官達がここに潜んでいるかは分からないんだ、もしかしたらこの辺りかも知れないし、先端のトラップ岬を指摘してるのかも知れない。だから闇雲に先に進むんじゃないくて、探索しながらになるんだよ。しかも僕

らは狭い通路を6人が連なって、かなりのスピードで進むわけだから人に接触する可能性が高くなる。安全を考えて少しスピードを落としてくれ」

「ちえっ、面白くねえなあ」

「今回は進級試験がかかっているから、教官たちもそう簡単に捕まってはくれないだろうからね。どこにどんな仕掛けがあるか分からないし、こちらもしっかりしないとね」

ひとつ通りを挟んだ左側の道を、ほぼ同スピードで走っているアツシユのチームの姿が見えた。どうやら彼等も同じように、物や人への接触を警戒し、スピードを落としているのは、用心していることだろう。

洞窟には所々空洞が開いていて陽が射す場所があり、だいたいはそういう所は広場になっていて人々が集っていた。

比較的上の階にはマーケットや食堂といった普通の商店が多いが、下の層海に近づくにつれ怪しげな闇商売が横行していた。

最も海に近い最下層には、湿気と暗闇の不気味さが漂い、誰も近寄らないし、未だ説明されていない穴倉も多い。

「じゃあさ、どうすんのさ？ 取りあえずこの広い道を真っ直ぐ行くといいんだな？」

「そうだね、次に広場とか枝分かれした道とかがあったら止まってくれ」

「分かった。それはね、およそ三分後に付くよ、メロロ広場だ」

「流石だね青」

莉空は微笑んだ。

青も得意そうに笑顔を作ったが、直ぐにトオルにちゃちゃを入れられる。

「当たり前だ、毎日ここで遊んでるんだろっ？」

「まあなーっ」と、嫌味たらしく、どでかい声で喋ったものだから、誰もが耳を劈つんざかれた。

「こらー青！ 超高感度マイクってこと忘れたかーっ？」

瑠華の反撃を予想した青以外は、スピーカーを耳から遠ざけていたので被害は無かったが、青はその轟音をもろに鼓膜に受けて、頭を抱えて涙目になった。

やがて青の言うとおりほぼ3分ジャストにメロロ広場に着いた。そこはぽっかり開いた上空に青い空が見えていて、光を落として直径20メートル程の円形の広場を照らしていた。

そこから縦横無尽に5本の枝分かれした道と、いくつかの売店が、甘い菓子の匂いや、カレーの匂いを漂わせて胃袋を刺激した。

「梨子、ここで探知できるかな？」

「莉空先輩、任せてください」

そう言つと、梨子は手袋を抜いて地面にそつと左手を置いた。

そして、目を瞑ると暫くして勝ち誇つたように顔を上げた。

「レイ先生はこつち、エリ先生はこの左の道を、陽先生の波動は感じられないので此処まで来る間に、既に何処か枝分かれした道に入つたと思います」

「陽先生らしいな、最初僕らが血眼になって入ると思ってるから、さつさと他の小道に入るなんて、一番厄介そうだから陽先生はターゲットから外して、そうだな……青はどつちを追いかける方が良いと思う？」

「それならこの道を行つたと言う、レイ先生の方がいいと思うすつぱりと明言する青に、莉空が尋ねた。

「その理由は？」

「枝分かれの道が少ないから、一々立ち止まる回数とか考えると断然こつちだと思ふんだ」

「でも、私の記憶によると道は狭くて薄暗いから、どうしてもスピードダウンは免れないんじゃない？」

瑠華が言つ。

「確かに道は狭いよ。でも次のダイン広場に行くまでの、枝分かれの数はこつちが5本、向こうは10本、こつちの道は人が少なくて接触する機会も半減、まあ、その先生が真つ直ぐトラップ岬に行く

と想定してだけ……」

なるほどね。……と、以外にも冷静に判断している青に莉空は関心した。

「うん。いいだろう。じゃこの道を行くでしょう。いいねみんな」

「はい」

そうする内に後から来た5班のメンバーは、そのままエリ教官が通ったと思われる道に入って行った。

「どうしてあいつらは立ち止まらずに、真っ直ぐ向かえるんだ？」

青が瑠華に訪ねた。

「あつちのチームには透視ができる、早手草はやてくさうって子がいるのよ。彼は千里眼を持っていて人物の残像を追うことができるの」

「えー！ すごい！ じゃ、無敵じゃん」

「まあねえ、だからあのチームのことは、今回は捨てていいと思うのよね、まず一番でしょうから」

「だから私たちは2番か、3番を取れたら儲けものかな」

「瑠華先輩ったら消極的なんだから、一番狙いますよ私は！」

「そうだ、そうだ！」

不協和音を奏でるチームメイトより利害が勝る青は、微笑みながら拳を振り上げ激しく同意した。

「どうでもいいけど、そろそろ出発しませんか莉空先輩？ 5班は行っちゃいましたよ」

腹黒い弟の笑顔を瑠華は呆れて見ていると、もう絶対に月光石は貰ったと言うように、挑戦的な青の目と合った。

まあ、それほど洞窟に関しては、とても自信があるには違いないが、ちよつとばかりその傲慢の鼻を、へし折ってみたい衝動に駆られる瑠華だった。

「そうだね、そろそろ行こうとしようか」

鼻歌まじりで青はゴーグルを掛け直すと、エアードを一気に加速した。

彼等が次の大広場ダイニング広場の滝に、着いた頃には午後7時を回っていた。

陽が陰り始めて、そろそろ洞窟道に落ちてくる明かりは、期待できなくなっていた。ダイニング広場では偶然5班のみんな、他に力ガリ・リエナをリーダーとした3班と一緒にあった。

ここの広場は地下5層になっていて、一番下の5層目は既に満潮で海に浸かっている。円形に陥没した中央に橋を通して、板のフロアが円形に設えてあり、直径50メートル程の広場には、簡素な椅子とテーブルが、幾つも乱雑に置いてあって、学生達はそこに座ってそれぞれお喋りをしたり、ミーティングをしたりして寛いでいた。偶然、シオの横に座った青は、リュックから取り出したリンゴを囓る、自分を見つめるシオの視線に気が付いた。

「おまえも食べる?」

そう言いながら、再び自分のバッグの中から、リンゴを取り出すとシオの前に差し出した。

「いらない」

「遠慮せずに食べなよ、ほら」

「しつこい」

真っ直ぐなアイスブルーの瞳は、冷淡に青を見ていた。

その時、荷物を持って移動してきた瑠華が、青の横に座った。

「任務中に私たちは、そういった物を食べないのよ」

「じゃ、何食べるのさ」

瑠華は自分のバッグから、小さなタブレットケースを取り出して、その中のガムのような粒を食べて見せた。

「これはね、胃の中で100倍くらいに増える栄養食なの、勿論、これだけではなく携帯食も少しは常備してるけどね」

と言って、チョコバーのようなラミネートに包まれたクッキーを見せてくれた。

「だから軽装で済むのよ。シオに無理強いするんじゃないの」

「だってさ、こいつが欲しそうに見てるからさ」

「違う。よくもまあ、重いのにそんなもの背負ってるかと、呆れて見てたんだ」

「だからそんなにリュックがパンパンなのね、一体幾つ入れてんのよ」

「10個」

「ええええ」

「だってオレ林檎好きだもん」

青は笑って林檎を一口嚙った。

「サルかおまえは」

そう冷たく言い放つシオ。

「何だとー！ーっ」

「とにかく！ そんな重い物とつと早く食べることにね」

瑠華がため息を付きながら、ふたりの間に割って入った。

確かに青が彼等をじっと見ていると、食べ物らしき物を食べている形跡もなく、寝袋は非常にコンパクトに袋に収められていて、開くと魔法のように、あつと言う間に寝心地良さそうに膨らんでいる。そして腕の時計のような機械は、あらゆる計器が詰め込まれているようで、ホログラムの立体映像ゲームをしてる者や、映像をパソコン化して使っている者もいる。

なんて高度に進んでいる技術だろうか、青は改めて驚いた。

ここ地上の学校生活と、何もかもがかけ離れているようだ。

「青、セザール先生が心配していたよ。あんたは授業に出ないで遊んでばかりいるそうね、このままじゃ、受験が受けられなくなるって……」

隣にいるシオに聞かれるのを気遣うように、小声で瑠華が話かけてきた。

青の顔色が少しばかり硬直した。

「青はもう受験受けるつもりはないのかも知れないって……、本当

なの？」

「……うん、もう止めた……」

「どうして？」

「だってさー、瑠華と違ってオレは何の能力も無いしさ、無理じゃねーか？」

「でも……」

「もちろんさあ、体力では絶対誰にも負けない自身はあるよ。でもさ……、姉ちゃんたちの学園に入るのほそれだけじゃだめなんだ……、いつまでたってもおれは能力無いし……、認めるよ。おれには何の才能も無くて、瑠華には完敗だって……」

顔は笑ってはいたが、その瞳が揺らいでいたのを瑠華は見逃さなかった。

幼い弟は未だ何の能力も持たぬことで、胸を痛めていることは明らかで、しかもその事実に絶望しかけている。

しかし、瑠華は諦めて無かった。

自分たちの一族が、念術に長けて知っていることを知っていたからである。

ただ、青に関しては為す術が無いことを実感してはいたが、焦ってどうにかなる問題では無い。

今の青に慰めの言葉は余計に傷つけそうで、掛ける言葉が見つからなかった。

「元々さあ、オレは瑠華ほど特殊部隊に入ろうなんて夢は無かったんだよ。瑠華が行くって言うから、オレも行きたいなと思ったくらいで……、そうだろ？ いつでも瑠華はオレのライバルだったから」

青はにっこりと笑った。

かけっこやエアボード、何でも同じ事をしたがる幼い弟は、振り返るといつも後ろにいた。

でも、それがいつしか自分を通り超して、彼自信の夢になりつつあったのを瑠華は知っている。

「待ってるから青……、私は学園であんたを待ってるから……」

青には諦めないで希望を持って欲しかった。

寝袋の中へ横になった青は瑠華に背を向けた。

「もう寝るよ。明日は結構ハードだからな」

そう言って、寝袋に頭まですっぽり入った青を、複雑な思いを抱えて横目で見ていたら、ふと何の感情も写さぬシオと目が合った。

どこまでも遠く、冷え込んだ北の氷壁を思わせる、凍てついた空気を纏う瞳……。

相変わらず眉ひとつ動かさない、その表情からは何も伺うことはできない。

澄んだ瞳は、吸い込まれそうなアイス・ブルー……。

「ほんと、あなたって綺麗な顔をしてるわよね」

「言ってる……」

シオはそう言い捨てて、ホログラムの書物に再び目をやった。

6・闇の超能力者

翌朝、青が何かに揺り起こされて目を覚まし、寝袋から顔を出す
と、すつきり爽やかな顔をしたシオが、ブーツで寝袋を蹴っていた。

「おい！ 何しやがる、てめーっ」

一気に目が覚めた青は激怒した。

「さっさと起きやがれ、クソザル」

綺麗な顔には似つかわしくない、罵言が飛び出す。

「何だとー！」

「こらっ！」

起き上がるうとした、青の腹を踏んだのは瑠華だった。

「喧嘩を吹っ掛ける間があったら、さっさと起きなさい！ 他のチ

ームはそろそろ出発よ！」

「痛つてて……、何も腹を踏むことないだろうよ……姉ちゃん……」

お腹を押さえて蹲うつすくまる青だった。

「あんたはガイドでしょうが！ そのあんたが一番遅いなんて、ふ
ざけないでよ。朝食はこれよ」

そう言つて、昨日の錠剤を3つ、青の口に無理矢理放り込んだ。

「さっさと顔洗ったら出発だからね」

青が渋々起き上がり、顔を洗いに行っている間、梨子はレイ先生の
行方を、地面に手を翳して探査していた。

西方面に続く道を行ったらしい、しかし、エリ先生を追っていると
思われる5班のメンバーは、北に向かうべく地図を確認しながらエ
アボードの用意をしている。

どうやら、3班のキエナ班が7班と同じレイ先生狙いで、同じ道に
入ろうとしていた。

「ここは青に期待しようじゃないか。同じ道を二班が同時に追おう
としてるんだ、近道を知ってる方の勝ちだよ」

「そうですね先輩。5班の後を追っても勝ち目は無いし……、陽先

生は以前捜査線に浮かんで来ませんしね……」

トオルが言った。

「あの先生は絶対捕まらない所にいますよきつと、捕獲だなんて言うておいて、こんな訓練のとき一度も捕まった事が無いって聞きますよ？ 意地悪なんだから」

梨子が不平を言う。

「そうだね、陽先生は念力の能力を持つてるけど、何故だか危険や追っ手を察知するのが得意なんだ、だから隠れるとほぼ100パーセント、捕まえるのは無理だろうね」

「嫌がらせだわ」

梨子が怒る。

「青わかった？ そう言うわけだから、より早く前に進む理由があるのよ。こらっ、聞いてんの？」

戻ってきた青に説明をする瑠華の前で、大あくびをしたものだから、朝一番で頭を殴られる。

「痛ってなあ……もう。聞いてるよ。とっておきの道があるよ。きつと誰も知らないし地図にも乗って無い」

「危険なんじゃないでしょうね」

「うっん、全然。」

そう言つて、青はにつこり笑った。

「ぎゃ~~~~~」

「梨子、さっきからうるさいぞ！」

薄暗く湿った洞窟道でほぼ一時間、梨子は叫び放しだった。

原因は壁に散らばる甲を照らせた羽虫で縦横無尽に這い回り、でこぼこした足元の岩の割れ目には、とぐろを巻いた黒光りする無数の蛇が、頭を擡げて起き上がるとする。どう考えても女の子には想像を絶する光景で、瑠華は蛇や羽虫を初めて見たわけでは無いが、

余りのグロテスクさと、もしも、叫んでいた時に口の中へ虫が入ってくるかも知れないと、思うことの方がずっと恐怖であったので、この地獄にも黙って耐えていた。

「あんた……、態とこの道選んだでしょ」

「瑠華だつて知ってんだろ、忘れたのかあ？ こっちが近道なんだよ。言つたとおり安全だし」

「何が安全だよ！ それにしても俺でも気持ち悪いや」
トオルが言つた。

「安全だよ。ここの蛇やゴキブリは毒を持ってないし」

青が壁に少し手をやると、ゴキブリが2、3匹後方に飛び、直ぐ後ろの瑠華が機敏に頭を避けたので、トオルのゴーグルに当たつた。

「ぎえっ……」

悲鳴を上げるトオル。

「ちえっ」

「甘い青、その手には乗らないから」

「いったい何時ここを抜けられるのよ！」

梨子が怒っている。

「そうだな、後10分くらいかな」

「じゃ、そこでひとまず休憩しよう。着いたら止まってくれ青」

「了解！」

予想以上にさっきのコースが効いたのか、梨子は”流賀の滝”に着いた途端、仰向けに横たわつた。

トオルとて水を飲んで額の汗をぬぐっていたが、平気な顔をした莉空、瑠華、シオは次の作戦を練っていた。

ここで暫く休憩しても、相手チームよりほぼ半分に短縮できた時間のお陰で、ゆっくり状況を把握することが出来る。2班6班が誰を追っているかは分からないが、真っ直ぐここまでたどり着こうとしているのなら、間違いなく彼等が一番先に着いたと言うことは確実

だった。

それに、この広場から夜に到着予定の剣の間までは、狭い通路ではあったが一本道で奥へと続いている。

ここは上層部からの川が洞窟を通って海まで流れ落ちていて、上空は木々に覆われてはいたがその隙間から、地下2層のこの広場まで、明るい光が滝の流れを照らしていたし、恐らく隣の広い地下道よりも随分明るく、ささやかな微風とミストが充満してるのでとても涼しかった。

「この世の地獄だったわ……」

「流石に梨子も、蛇やゴキブリは苦手か」

トオルがクスリと笑う。

「何だ？ 訓練生にしては意外とだらしのないなあ……」

青は林檎を嚙りながら笑った。

「おまえみたいな原始サルには言われたくないね」

「あんなにいつぱいの羽虫は、始めて見たからちよつと驚いただけよ！」

「おまえら、ほんとに能力者かあ？」

疑いの目で二人を見た。

「あなたに言われたく無いわよ！」

「そうだ！ そうだ！ 無能力者め！」

「何だと……！」

「青！」

瑠華に首根っこを捕まれる。

「あんたは体力も、知能の未使用領域も、あり余ってるでしょから、そこで水くらい汲んで来て頂戴」

そう言つて、水が入っていたらしい自分と莉空のボトルを、不平たらたらの青に寄越した。

「シオも入れて来て貰ったら？」

「いい。自分で行くよ」

広場から数十メートル先の、幅4メートル高さ10メートルの滝

は、朽ちそうな鉄柵で円形に周りを囲まれており、近づいてボトルに水を汲めそうだった。

そこまでは小さな橋が伸びていて、シオはすくつと立ち上がると、橋に向かって歩いて行く、その後を青は追いながら橋に差し掛かった所で、シオに後ろから話しかけた。

「気になってんだけどよう、その腰に付けてるの銃だよな、学生が銃撃っていいのか？」

瑠華は”フン”と鼻で笑ったが、何も言わずスタスタ歩いて行く。「こらっあ、無視かよ！」

シオは諦めのため息をついた。

銃の説明をするまで、青が開放してくれそうに無かったからだ。

「訓練の時だけ渡されるのさ、殺傷レベルまでは上げないようになっている」

「何？ 殺傷レベルって……」

「人を殺す……」

話すのを途中で止めて、いきなり立ち止まったシオの背中に、青は思いつきりぶつかってしまった。

「痛ってーじゃないか！」

黙ったまま動かないシオの肩越しに前を見ると、流れの近く10メートル前方に人影が見えた。

それは背の高い男で、明らかにシオを見定めていた。

「見つけた」

皮のロングコートを着た、緑の髪の男がそこに立っていた。

その奥にはもう1人短い金髪の、背中に大砲ほどの大きい銃を持った大男がいる。

「探したよ、リグラス・シオ」

緑の髪の男は、腕組みをしたままシオに笑いかけた。

「何だ？ おまえの知り合いか？」

背後から青が尋ねた。

「……………」

目の前の男を見据えたまま、シオは黙って立っていた。

「俺たちと一緒に来て貰おう」

「誰だおまえ……」

その時、初めてシオが口を開いて静かに言った。

「やがてこの国を支配する方の、部下とでも言っておこう。彼の右腕……」

男が平然とこちらに一足歩み出たので、シオが後ずさりし、それに釣られて青も同じように後ろに下がった。

丁度その時、いきなり天井からシオの目の前に、三人目の男が逆さまに降りてきて、その指がシオの眉間に当たる寸前、彼が素早く避けたので、真後ろにいた青の眉間に直接当たってしまった。

一瞬で意識を失った、青のバランスを崩した身体は、滝が川となって地下へと流れて行く激流へ落ちてしまった。

鉄の欄干に落ちたボトルが、甲高い音を立てる。

その音で、みんなが振り向いた時はもう遅かった。

「青……っ！」

瑠華の叫ぶ声が洞窟の木霊した。

しかし、青の体は最初こそ浮き上がって見えていたものの、あつと言う間に波に浚われ、水に揉まれながら地下へと飲み込まれて行った。

そして金髪の男は水路の前でどでかい銃をこちらに向けて威嚇している。

莉空はすかさず、腕の緊急用レッドランプを押して木に救援を送ったが、この奥深い洞窟の中で、救助隊がここまでやって来れる時間を考えると、それまで自分たちの力で何とかするしか無いと判断し、莉空はそこにいるみんなに銃のレベルを、身体が動かなくなる8にするよう指図した。

「ちっ、ミスっちまった！」

天井から逆さに降りて来た男が言った。

「あーあ、仲間が独り犠牲になったぞ……、もっと増えるがそれで

もいいのか？ リグラス・シオ？」

腕組みをしたまま、緑の髪の方が笑った。

そして、名前を呼ばれた事で、シオの目が陰しくなる。

「……オレを捕まえられないことくらい、分かってるんだろう？」

「そうだなあ。今となつちゃ、お前の捕獲は無理だろう。しかし…

…」

そう言い終わらないうちに、男は腰から銃を取り出すと、シオに向けてレーザービームを乱射した。

しかし、シオには通用しない。

男が銃を手にする時には、既に他の場所に移動していた。

「だから言つたろう？ 敵を察知したからには、オレはもう誰にも捕まらないって」

流れ落ちる滝を背にした鉄柵の前で、眉間に皺を寄せてはいたが、シオは堂々と立っていた。

彼らの目的がシオを連れ去る事なのは明白で、三人の男たちは滝の方ににじり寄っている。天井から降りてきた男はナイフ使いらしく、シオをめがけて素早く投げて来たが、それも虚しく、空を突いて水の中へ消えて行った。

「トオル、今のうちにワイヤーを使って、青を助けに行ってくれ！

僕たちが援護するから」

「分かった。行ってくる」

トオルは腕のスイッチを押して、ワイヤーの先端を岩壁に打ち込むと、そのまま激流に飛び込んだ。

男たちは低学年の子供、所謂雑魚には興味無いのか、それとも激流に飛び込んで助かる見込みが無いと踏んだのか、トオルを追う素振りもなく、目の前の”獲物”シオは勿論のこと、莉空、瑠華、梨子を、いたぶり射止めるのを楽しんでるのかのように、口の端を歪めて笑っていた。

「レベル8なんて、なめてくれるなクソガキども、俺たちに勝てるとても？」

「そんなのやってみないとわからないですよ。ただ、あなた方の命まで奪うつもりはないですけどね、僕らまだ子供ですから……。犯罪者の身柄は警察に引き渡すまでです」

臆すること無く、莉空が答えた。

「クソガキが……」

ロングコートの男は、莉空と話をしている振りをして、一瞬でシオの目の前に現れた。

しかし、そんな事など既に予測していたシオは、腕で額を守りつつ男が現れた瞬間、足で男の腹を蹴飛ばした。

よるめいた男は他の二人に支えられて、辛うじて体制を保った。

「聞いてたのか？ 言ったる？」

シオは見下したように、男たちを見据えて立っていた。

「まったく、度胸のいいガキだぜ……。しかし、気に入ったよ。俺はどうしてもお前を連れて帰りたくなかった」

男は後ろで支えていた仲間の手を、忌々しそうに振り払った。

「どうやら彼がリーダー格らしい。」

「シオ、君は先に学園に帰って、学長に報告するんだ」

「でも……」

「狙われてるのは君だ、早く行け！」

真剣な莉空の声にシオは黙って頷くと、薄情な程一瞬にしてこの場を去った。

「あゝいいなあ」

梨子が感心する。

「クソ、あのガキ逃げやがった！」

「だから慎重にしろと言ったんだ、このバカが！」

「チクシヨ……」

腹立ち紛れに金髪の男の銃は容赦なく莉空ら三人を撃ちまくり、外れたビームが洞窟の壁を崩して轟音を起てる。場慣れた犯罪者集団は素早く、そして、幻影術か瞬間移動術か、それらを使つての姿くらましで、一瞬にして他に移動する。

瑠華の能力も消えては現れるテレポーターの前では使えない。

下手に物体を止めても彼が移動中だった場合、いきなり現れてビームを乱射されたらみんなが危ない。

莉空たちは隠れ場所のない洞窟内で、防御で精一杯だった。

「莉空先輩、ここは私に任せてください」

梨子はそう言うて滝に手を翳し、『天と地の聖霊よ、神の許しに寄って私に力を与えてくださいませ！』と唱えた。

すると、滝の水は命でも宿ったかのように、くねくねと曲がったかと思うと、梨子の振りかざす手の方向に左右に揺れ始めた。

そしてその手の先に力を溜め込むと、彼等に向けて振り翳したら、物凄い勢いで轟音と共に、水が大砲の如く放出された。

それは洞窟内を満たすほどの水量で、下手したらこちらも水に飲み込まれてしまうかと思えたが、彼等の隙を見て瑠華と梨子が、通路の先へ入ったのを確認した莉空は、持っていた小型爆弾で外壁を崩して通路を閉鎖した。

「これ以上ここで戦闘をしていたら、洞窟全体に影響が出るからね。ここは湿気を帯びて岩盤が脆く、崩れやすそうだ」

「ええ、でも青とトオルが……」

「うん。トオルのワイヤーは壁から外れていた、おそらくここへ戻ってくるのが困難と判断して故意に外したと思うんだ、位置は確認出来るから下に降りられる道を探してみよう。この落石で暫くは敵の侵入は防げそうだ。そのうち誰か教官が助けに来てくれる事を願うけどね」

「そうね、ふたりが心配だから急いで探しましょう。地下100メートル位落ちたみたいだから、彼等もあの水路を使ってまで、二人を追いかけないでしょう。第一、彼等の目的はシオのようだし」

シオが狙われる理由としてあげられるのは、周りの者も一緒に移動できる、そのテレポート能力だったが、こんな地下まで降りて来るとは……。

きつと誰もが想像していなかっただろう。

シオが居ない今、男たちはこの壁を抜けてここへ来るだろうか……、しかし、少しでも早くふたりを救出することに専念しなければならぬ。

莉空は手分けして、下に降りる道が無いか、取りあえず付近の散策をするよう、瑠華と梨子に指示をした。

7・海底の秘宝

トオルは息を止めて30秒ほど曲がりくねった激流を下ったろうか、そろそろ息が苦しくなってきた頃に、ようやく足元が明るくなってきたと思ったら、30メートル程の上空から一気に青い海の底へと落ちた。

「うわぁー」

思わず声が漏れたのも、あつと言つ間だった。

落ちた海の中は洞窟内とは思えぬ程の明るさで、海底の白い砂の上に横たわったままの、意識を失った青を見つけるのは、以外に容易なことだった。

トオルは直ぐに青の腕を掴んで、浮上しようとしたその時、辺りには一面眩いばかりの黄金や赤青黄色と、取り取りの宝石や黄金の山が海底に沈んでいた。

『何だこれー！ すごい宝の山だ……こんな所に……、ああ、でも今は青の救出が先だ』

見たことも無い黄金の山に驚いたトオルだったが、思い出したように青の腕を握る指に力を込めた。

重い鉛のような青の体重を感じながら、必死の思いで砂浜まで引き上げたトオルは、青の心臓マッサージをしようと、急いで砂の上に膝を着いたとき、ごぼごぼと水を吐いて青が意識を取り戻した。

「ゲホツゲホツ、オエッ……」

「気がついたか、良かった」

海に沈んだ時に、既に意識を失っていたから、水を飲んでないのが幸いだつたなど、トオルは少しばかり安心した。

「……ここは？」

さつき落ちてきたと思われる長い滝が見える高い天井から、青い海へと青は視線を移した。

あまりに広い空間で二人の声が反響している。

「覚えてるか？ おまえいきなり現れた男に眉間の……、多分”印章”か”山根”あたりにあるらしい記憶のツボを押されたんだろう」「いんどう？ やま……や……何それ」

「山根！ まあ、オレも詳しく無いけど、莉空先輩は幻術使いだから専門なんだが、山根とは眉間にあるツボの事で、そこを押すと一時的に意識を無くしたりできるらしいよ、おまえはそれを押されたか、幻術に掛かったか……」

「げんじゅつつて？」

「あのなあ……、何にも知らないんだな」

「一瞬にして幻を見せること、例えば、こうやって身体は砂浜にのんびり座っているのに、頭の中は相手が見せる映像の中にはまって抜けられないんだ。莉空先輩がおまえに海で溺れてる場面を見せようとしたら、おまえは延々と溺れてるシーンで藻掻き苦しむ……」「すっげーっ」

「しかも、莉空先輩の凄い所は術で竜を呼び出したり、霊と話をしたりできることさ」

「竜？ あの伝説の竜？」

「実際おれは見たことないけど、一緒に戦闘に行って、見たことがある奴がそう言ってた」

「すっげえ！ おれも見えてえ」

「ま、とにかくおまえ大丈夫か？ 歩けるなら出口を探そう、滝に登って戻るのは無理だからな」

「どうして？」

「どうして？ って、この滝は落差100メートル程あったよ、しかも途中はくねくね曲がって、息付くことも出来なかった。戻るのは到底無理だ。そうか、お前は既に意識が無かったから、落ちて来るとき苦しくもなかったんだな……」

「おまえオレを助けにここまで来たのか？」

「あたりまえだろ、何驚いてるんだよ。見損なわないでくれ」

真顔でトオルは毅然と言った。

「おまえ本当は良い奴だったんだなあ」

うっかり青は涙ぐむ。

「無能な奴は放つとけないだろ」

「前言撤回！ このやる！」

青は拳を振り上げる。

「とにかく！ 立ちあがりな、行くぞ。」

渋々言う通りに立ち上がった青は、腰に着いた白い砂を手で払った。

しかし、ここは洞窟の底なのに、どうしてこんなに明るいのだろうと、ふと海を見た青は何やら海底の底から、黄金や宝石らしき物からの光輝く屈折するプリズムを発見した。

「まさか……」

そう言つと、青はいきなり海に飛び込み海底へと潜って行つた。

「おいおい、野生児だな彼奴は……」

呆れてトオルが見つめていたら、暫くして王冠を頭に被って蔓延の笑みを称えた青が海上に浮かんで来た。

「すっげーぞ！ 宝の山だ！」

「持つては行けないぞ」

「なんでさー、これ売れば一生楽に暮らしていけるぞ」

「そんな、どこかの狸オヤジみたいなことを言つて……」

全身じゃらじらと宝石を身に纏い、嬉しそうに砂浜を歩いてくる青を、冷めた目でトオルは見ていた。

確かにこういう年代物の王冠や、幾つもの大きな宝石を連ねたネックレス、黄金のブレスレットの数々は、ひとつひとつが大きいが故、まるで玩具のようにしか見えない。

「すっげー、すっげー、すっげー！ ぞ！ お前も取つてきなよ！」

「バカかおまえ、仮にも俺たちは将来特殊戦闘部隊に入る身だぞ、そんな事できるか！」

「そっか？」

「いいから、早くそれを捨てて行くぞ！」

その時、莉空から連絡が入った。

『……二人とも大丈夫か？ 時々、声が聞き取りにくいんだけど……』

「はい。二人は大丈夫です。 海に落ちたんでその衝撃で、少し回線が悪くなってるのかも知れません。それで、元来た滝を戻るのは厳しいので、出口をこれから探す所です」

『こつちも探してるから、頑張ってくれ』

「了解！」

さつきから宝石に見とれている、青の胸ぐらをトオルは掴んだ。

「ほら、行くぞ！ そんなもの捨てる！」

「やだ！ 絶対やだ！」

「持ってたって、どうせ全部没収されるんだ、好きにしる」

高い天井を見上げながら、トオルは脱出口を探して見るが、巨大な空洞には白い砂浜と岩窟が広がるばかりで、どこにも出口は見つからない。

「おまえも探せよ」

「これすっげーっ、8センチはあるよ。ダイヤかな？ それとも飛鉱石の一種かな……」

トオルの話なんか全然耳に入っていない青は、歩きながら宝石を頭上に翳して、まだ白く透明に輝く石を眺めている。

「おまえなあ……上にながったら絶対殴ってやる」

「この黄金は傷ひとつ付いてないや……」

「聞けよ！」

完全に宝石に目を奪われている青に、全くトオルの声は届いて無かった。

白く歩きにくい砂浜を、てくてくと30分くらい歩いただろうか……、トオルと青は一向に出口を見つけることが出来なかった。

所々、岩が迫り出してはいたが、難なく通り抜けることは出来る。

ここはそんなに広くて長かった。

流石に青も、地下がこんな風になっているとは知らなかった。

「先輩たちが何も言って来ないと言うことは、上からの入り口も見あたらないんだな」

トオルは困惑していた。

「いつそ海に出るか？」

飄々とした顔で青が言う。

「海だつて？」

「そうさ、この海は外に繋がってる。ほら、白い砂に光が反射してここまで明るいだろう」

「だから海底が明るいんだ……じゃあ泳いで出るか？」

「簡単に言っね」

意外に慎重な顔をして青が言った。

「何だよ」

「ただね、出口までおよそ100メートルくらいはあると思うよ。おまえ泳げるか？」

「100メートル？ 息継ぎ無しで？」

「うん。しかも、今日は低気圧があるから、きっと外海は荒れてると思うし、実際もつと長く感じるかもな」

トオルはタラタラと眉間に汗を感じた。

「簡単に言っじゃないか、おまえは行けるのかよ」

「うん。行ける」

当然の如く平然と返答をする。

「ま……まで、もう少し出口を探してみよう……」

「根性出さないのか？」

笑ってる青のマジ顔を見て、トオルはぐくりと唾を呑んだ。

「でも、まー、外に出られたとしても、ここは多分200メートルはあるような断崖合壁だし、波も強いだろうし、ろくな事は無いだろうなあ……」

「そ、そうだろ？ もう少し探そうじゃないか……」

完全トオルは怯んでしまった。

荒れる海原を100メートル息継ぎ無し、そして200メートルをもの絶壁を登れる自信がない。青は出来ると言うのだろうか、平然とした顔をしている。

しかし、中から上に登れる道は無いものだろうか、海の反射で洞窟内は明るいが、穴の奥までは光が届かず良く見えない。こうなれば岩場を掻き分け、ひとつひとつ奥に入って確認するしか無かった。

「流石のおまえもこの場所は知らなかったか……」

「だなあ、こんな黄金が眠ってるなんて」

「そっちかよ！ だから無駄だって！ 木先生に見つかり次第、即没収だって！」

「いやいや、ゼー……ってえ、渡さない！」

『トオル、出口はありそうか？』

「あ、莉空先輩！ それがさっぱり！ こそもどこだか分かんないし、海がすぐ側なのは分かるけど……。そちらは大丈夫ですか？

例の男たちは？」

『まだ足止めでできているけど、それも時間の問題かな……。それよりおまえ達が心配なんだよ、こちらからもさっぱり入り口が見つからなくて、爆破して穴を開けようかと話してるんだけど、下手に爆破して全体が崩れてしまったら大変だからね、今岩盤の薄い所を探してるから少し待っててくれ。それと青、黄金は没収だぞそんな物置いて行け』

「げっ、マイクが筒抜けなの忘れてた！」

「まったくおまえって間抜けだな」

呆れたトオルは、青が頭に乗せている王冠を手にとると、海に投げ戻した。

「あ~~~~っ！ 何すんだよ！ てめえ~~~~っ」

「元あった場所に戻しただけだ」

「元々、元あった場所はここじゃないだろう！ だからオレの物だ！」

「どーいう理屈だよ！」

顔を付き合わせて揉めている二人の間を、何か小さな物がもの凄
い速さで通り抜けて行った。

その”何か”が、ぶつかつた50メートル先の岩盤が激しく崩れ落
ちた。

「ひゃゝゝゝ、何だ、何だ?!」

「バカ、銃だよ」

そして地面へ俯せになるよう、青を突き飛ばしたトオルは、腰か
ら銃を取り出して、いつの間にか現れた、標的である盗賊らしき二
人組に照準を合わせた。

「止めのナギ、その銃が殺傷能力が無いことくらい知ってたんだ。お
前ら学園の訓練生か？」

「そうだ、おまえらは何者だ！」

果敢にもトオルが言う。

「何者と聞かれりや、海賊とでも言おうか」

そう言つて、背が低くずんぐりとした盗賊は、ガハガハと大声で
笑つた。

対照的にその後にいる男は痩せて背が高く、鼠色のテンガロンハッ
トに同じ色のベストを着、手には銃を持ってニヤニヤ笑っている。

青とトオルは上で出会つた何者かと同じ仲間だろうかと倦^{あぐ}ねていた。

「お前ら、どうやってここへ入ってきたんだ」

ずんぐりとした男が不振そうな顔して尋ねた。

「川に落ちたんだよ、そしたら真つ逆さまにここまで来たつてわけ」
男たちは顔を見合わせて、何やら目配せしている。ここに居るのは、
どうやら彼ら二人だけのようだ。

「お前、その宝石を戻しやがれ、それは俺たちのものだ」

「わかつたよおっちゃん、戻すからその銃を仕舞つてくれよ」

青は妙に腹の座つた冷静な声して応答した。

「さあ、さつさとそこへ置きやがれ！」

背の低い男が再び銃を振り翳したので、青は身に着けた宝石をひ

とつずつ、渋々時間を掛けて足元に落としてゆく。

「おまえさ、何の能力も無いのかよ？」

青はトオルにヒソヒソと小声で話した。

「植物を操れるけど……」

「植物だつて！？ 笑わせるなよ、使えねえ奴だ」

「てめつ、バカにしやがったな、くそつ」

「小僧！　こそこそ言つて無いでさつさと宝石を出しな！　ポケツトの中も残らず出すんだ！」

「おっちゃん、オレはここオリン岬の孤児なんだよ。ひとりで生きて行かなきゃなんねえんだ、ひとつくらい分けてくれてくれないかー？」

「その孤児が、何で上の奴らと一緒になんだよ」

「ここの案内をしてるんだ、オレだつて生活かかってんだよー、おっちゃん達と一緒にだよ。何ならオレも一味に入れて貰えないか？」

「青ー！　つ、てめえ、おまえひとりだけ命乞いか！！！」

とんでもない展開に、トオルが叫んだ。

「ガハガハガハ、チビどもが仲間割れか。でもな、顔を見られちゃここから生きて帰れると思うな」

「ひえー！　！　！　トオル！　てめえ早くやつつけちまいな！」

ゴツツ、トオルは青の頭を殴った。

「痛つてー！　！　！　」

「変わり身の早い奴め！　さつきはバカにしたくせに」

「生き抜く知恵だよ！　でもさ、どうやら海に飛び込むしか無さそうだぜトオル」

青が小声でそう言った途端、トオルの顔が引き攣った。

もし途中で息が切れたら死んでしまふ、窒息の危機にトオルは吐きそうだった。

「だからおまえ先行け！　途中でへばつたらオレが引つ張つてつてやるよ！　だから銃をかせ！」

青は海に入るべきか、判断をし兼ねているトオルから、素早く銃

を奪うと、賺さずトオルを海に突き飛ばし、彼を標的に銃を向けた海賊目掛けて、青はレーザー銃を連射した。

不意を付かれた海賊は、今度は青に銃を向け撃ってきた。

岩陰を見つけていた青は、全速力でその裏に隠れる。

「青———！」

海の中からトオルが叫んだ！

「早く行けトオル！」

岩をも砕かんとするように、容赦なく海賊の銃が乱射される。

それを見かねたトオルが、海賊の方に手を翳し、指先をくねらせたら、砂の中から何かの植物がニョロニョロと生えてきた。

そして、瞬く間に大きく育ったかと思うと、啞然としてる男たちの身体に巻きついて、身動きを取れなくしてしまった。

彼らは指まで幹に巻きつかれて、持ちきれなくなった銃が手から落ち、悲鳴をあげた。

「うわぁ！ 何だこれ、く、苦しい！」

身動き取れなくなった男たちは、苦しさに悶えている。

「すげえ……トオル……」

バカみたいに笑顔で喜んでいる青を、トオルは叱った。

「何ぼけつと突っ立ってんだよ！ 早く来い！」

盗賊がもがき苦しんでいる隙に、青もトオルの後に続いて海に飛び込んだ。

既に意を決したトオルは大きく息を吸い込むと、光に導かれるまま外海を目指した。

8・青、絶対絶命！

「訓練の停止、撤退命令は出しているんだろう？ 木君」

ここは第二ターミナルの学園都市、眼下に立ち並ぶ高層ビル群を眺めながら、学園の学長室にて早瀬剛が、オリン岬から連絡してきた木に訪ねた。

窓の外は積乱雲が入り乱れる青空が広がっている。

ここ空に浮かぶ国立特殊能力学園は、下界から完全隔離の上空にあつて、眼下の少し遠方に四大大陸の一つ、広大なサウスランドの先端、そのオリン岬が見えていた。

『はい。現在、洞窟に待機中だった陽、スリン、イルモア教官は、それぞれ近くにいるチームの保護にあたっています。合流次第、近くの竪穴から地上に出る予定です。ただ、問題の7班は現在、更に洞窟の奥へ追いやられてまして、到着した、特殊部隊が救出に向かっています。そして二人の少年が地下から、岸壁の方へと脱出しているようなので、救護班が飛行艇でそちらに向かいました』

「頼んだよ木君。学生の安全を第一に考えて救出してくれたまえ」

…あ、それから……」

『はい？』

「三日前に学会のセミナーに向かった筈の、学園の情報管理センターの室長が、今朝メガ・シティの報道局ビル前の広場で、遺体となつて発見された。頭には記憶を操作するコードが埋め込まれた後が幾つもあった、それだけでもかなりの致命傷だったろうに、犯人は残忍にも首の骨まで折っていた。そして、問題なのはどうやら彼が記憶していた情報を盗まれたらしいという事だ……」

『まさか……』

「勿論、外部に出て連絡が付かなくなった職員がいると、コンピューターは危険を察知して、あらゆるパスワードやセキュリティコー

ドを、変更する仕組みになっているので、侵入者の心配は無いが、残念ながら彼の持つている記憶だけは盗まれたと考えていいだろう」

『それが今回の、シオの拉致事件と関係が……？』

「恐らく」

『……例の』

「それは私と、君しか知らないことだ……。誰も知っている筈は無い。まして、データーベースには載せていないからな」

早瀬はきっぱりと告げた。

『それでは、テレポートの能力を欲しがったのことですかね』

「奴のテレポートの能力は特化してるから……。それを狙ってるとしても不思議ではないだろう」

『確かに、そうですね』

「とにかく、生徒の安全を至急確保してくれ、頼んだぞ」

『了解しました』

そう言つて、早瀬はデスクのホログラム映像を切った。

学長室のふかふかのソファに深く腰掛け、シートに頭を乗せて天井の重厚な装飾を見るとも無しに見ていたシオは、その話を一部始終聞いていた。

しかし、その視線は揺らがない。

「さて、シオ。犯人はお前を狙っていたと聞いたが、男は何か言つてたか？」

「別に何も……」

相変わらず天井を向いたまま、ぶっきらぼうに言う。

「でも、君だけを狙っていたんだろう？」

「……そうだな……。そんな感じだった」

「確かに世間にトランスポーターは余り居ないが、かと言って特別珍しい分けでも無い……。特殊能力者揃いの生徒が、教官引き連れられて訓練してる最中に、狙つて来ると言うことは、かなり無理が

あるにも関わらず、それでもをやって来たと言うのは、そうまでして、どうしても君を連れ去りたい目的がある場合だと思う……と、なると……」

学長はじつとシオを見ていた。

「うん。分かつてる。バレたかも……」

ゆつくりと、漸く顔を上げたシオは学長の目を見た。

「奇しくも今朝、学園の情報室勤務の局長の遺体が見つかった。どうやら彼の脳に記憶されていた情報が抜き取られたらしいんだ……。思い当たるとすればその件が関係していると言える事だ。しかし、例の能力については触れて無いはずだから、単にお前のテレポートの能力が欲しかっただけかも知れんのう……」

「……」

しばしの沈黙があった。

「……調査は続行しているが、取りあえずここに居れば外界のような危険は無いだろうが、まあ、今回のような事もあるので十分注意して行動取ること、それと当分は外出禁止だ。では、部屋に帰って休んでなさい」

それには素直に従って、シオはソファから立ち上がると学長室を後にした。

そして、学生寮へと続く長いオートウォーク（動く歩道）の上で、手摺に持たれながら『ほんとうにそうだろうか……？』と思索していた。

ここに来て役5年、恐らく他人で自分の秘密を知っている者は、学長と木先生くらいだろう。

彼らから自分の秘密が漏れる筈が無いことは、絶対の確信があったが……。

首に掛けていたゴーグルを外そうと手にした時、スピーカーから雑音交じりの、トオルの必死な声が聞こえて来た。

『青が落ちた！……戻ってください！』

『……そんな、……お願……し……、このままだと……、殺られてしまっ！』

『……ガー……』

シオはじつと手の中の、ゴーグルを見つめていた……。

海の底は真っ白い砂で覆われていた。

時折、青や赤色、取り取りの魚が寄って来ては、遠くに泳いで去って行った。

外海へ近づくほど岩幅は広くなり明るさは増す、しかし、波のうねりは強く、一生懸命に手を動かし漕いでも、トオルの意思とは裏腹に、思ったように前へ進まなかった。

一方、青がまだまだ平気そうに、先へずんずん進んで行くのが見て取れた。

目の前には深い海が広がるばかりで先は見えず、少しばかり息が苦しくなってきたトオルは、身も心も恐怖に包まれ始めた。

『マジかよ……、やっベー……』

海の中なのに冷や汗を感じ、心臓が激しく高鳴り始める。

パニックに陥りそうだった。

——と、その時、ぐいっとな襟を掴まれた。

顔を上げると霞んだ視界に青がぼんやりと見え、信じられない事に何故か笑ってるようにも見える口元に、トオルは勇気と気力を与えられた。

学園で体術は二年も修行してるのに、そこらのガキに負けるなんて、驚きと同時に悔しさと少しばかりの尊敬を持ち、最後の力を振

り絞ると腕を前へと伸ばして波を掻いた。

「ゴホゴホゲボツ……」

トオルは海上に顔を出した途端、咽て堰をした。

「大丈夫かおまえ？　ここに掴まれ……」

青は隆起した岩にトオルの手を伸ばしてやった。

外海の絶壁は波に浸食されて岩が滑りやすく、それでも二人は何とか海上から頭だけ出して、岩にしがみついた。

「死ぬかと思った……」

「情けねえなあこれしき、それよかよう……」

青は突然動きと表情を止めて、何やら考え込んでいる。

「どうした？」

「お前マイクの声が聞こえないか？　さっきから姉ちゃん達は何やら騒がしいんだ」

トオルはゴーグルの位置を確認し着け直した。

『……後ろから来る……よ。銃……レベル10……ろ！！！』

「莉空先輩の声だ。……レベル10って……殺傷レベルだ。きつと彼奴らに突破されたんだな……。くそっ……助けに行きたいがこれじゃ」

その時、遠くを見つめていた青は急に顔を顰めた。

「おいおい、おれらは助けに行くとか言ってる場合じゃないぞ、ほら後ろを見てみな」

青の真顔に、只ならぬ気配を感じてトオルは後ろを振り向いた。

「え？　な、何だあれは……」

「海賊船だ」

髑髏マークの帆を張った、大きな帆船が数百メートル沖に浮かんでいた。

まだ遠かったが、多数のクルーの姿が見える。

「おい、こっちに向かって来てないか？」

「多分な、きつとあの黄金の山を回収に来たんだろ。それが俺たちの抹殺、へっへっへっ」

「笑ってる場合か！」

「だってさ、おまえがあの船に根を生やして巻きつけて、やつつけちゃえばいいじゃんか、タコのようにさ」

「あ、そつか……て、ちよつと遠すぎるしな」

「ちつ、使えない奴」

「何だと！」

その時、いきなり大きな爆音が空気を震わせ轟いたかと思うと、頭上の絶壁に巨大な穴を開けて、幾くつもの大きな岩が無数に飛び散った。

「わわわ、海に飛び込め！」

更に”ドカン！ ドカン！”と容赦なく爆音が続く。

もう、絶対絶命だと思われたその時、爆音に限れて空から飛行艇が急速に接近してきた。

「来てくれたー！」

救助艇は海賊船めがけてビーム砲を連打しながら、トオルたちを大砲から守るように横付けして宙で止まった。

「助かった、救助艇だ！」

「やつと来たか！」

「君たち！ 早く乗るんだ！」

救助隊が海の中へ階段を伸ばし、二人に手を差し伸べてくれるが、海賊船からの砲撃が激しく救助艇が揺れる。

「もう少し手を伸ばすんだ！」

「へばってるから、こいつを先に！」

青が海の中から、トオルを先に突き上げた。

トオルが救助艇に乗り込んで、次に青に手が差し伸べられた時、更に大きな爆音がして、救助艇は大きく揺らぐと室内に煙が充満した。「隊長！ 側壁のバリアがやられました！ 早く上昇しないとこのままではやられます！」

「分かった。君、早く手を伸ばして！」

青が必死の思いで救助の手を握りしめた時、既に飛行艇は上昇し

ていたが、砲撃を容赦無く浴びていて、左右前後の揺れは収まらず、青が室内に乗り込んだと思った直後、機体が再び大きく揺れた。

ぐらつと揺れた飛行艇の、まだ閉め切つて無かつた左舷のドアから、青は真つ逆さまに海へと振り落とされた。

「青――――っ、青が落ちた！ 戻つてくれ！」

「戻るのももう無理だ、機体を持たない！」

トオルは落ちて行く青に向かって叫んだが、あつと言つ間の出来事でどうしようも無い事はみんな分かっていた。

気休めにいくつか浮き輪を投げたトオルだったが、飛行艇は速度を増して上昇しており、波間に揉まれてあつと言つ間に青の姿は見えなくなった。

9・テレポーター再び

徐々に小さく遠くなつて行く飛行艇を見送りながら、もう戻つて来る気配が無いのを知つた青は、この砲撃でこれ以上救助艇がここに待機するのが難しい事もわかつていた。

しかし、どうしたものかと途方にくれた。

「やつべーーーーっ、流石におれも、ちと焦るなあ」

岸壁は高すぎて登れないし、かと言って元来た洞窟に戻るのは、海賊と鉢合せしそうだし……、壁に沿つて潜りながら移動して、どこかに入る穴を見つけようかと、岩にしがみついたまま青の頭はぐるぐると思案していた。

しかし、今度は青目掛けて砲撃が始まり、悠長にしていられなくなつた。

その時、さつき青がトオルの襟を引っ張つたように、今度は自分の身体が海の中から引っ張り上げられるを感じた。

「うおおおお？　なんだー？」

恐る恐る見上げると、海面それすれの位置で静止した、エアードに乗つて立つているシオがそこに居た。

相変わらずの無表情で……。

「ええええええ、な、なんでおまえが……？」

「行くぞ」

顔色ひとつ変えず言う。

「え？　どこへ」

「取り合えず神殿の前までお前を連れて行く」

「おまえは？」

「オレは帰還命令が出ているから、学園に帰る」

「バカかてめえ、みんなを助けられないのか？」

「うん」

平然とした顔で言うか？

青は頭にきた。

「何だとーっ、みんな戦ってるんだ！ おまえが行かないんならオレが行く！ 中へ連れて行きやがれ！」

シオは呆れたような冷たい目をして、青を黙って見下ろしていた。
「ふん」

その”ふん”に嫌な予感が脳裏をよぎったかと思う瞬間、深く考える間も無く青はその場を連れ去られた。

「ほら、さっきの場所だ」

いきなり真っ暗、いきなりの地面、ずぶ濡れの服で洞窟内に戻された青は、地面に落とされドスンと尻餅を着いた。

「いいいいいいーきなり、ためーっ……って、……なんか気分悪い……」

四つん這いになっている。

「移動は慣れてないと、そうなるんだよ。ど素人」

シオは腕を組んで、青を鷹揚に見下ろしていた。

「これがテレポートってやつか？」

「そうだ」

「すんげえ！ すげえ面白！ ……でも気分悪……」

「ど素人、オレは帰るぞ」

「何言っただてめえ」

「みんなを助けないのかよ？」

「言っただろ、オレには帰還命令が出ていると」

静かに言った。

「仲間を見捨てる気か！」

「どうやらオレが狙われているらしい……。それにトオルは帰還したし、7班にはスカイ・ポリスが救助に行ったよ。お前が行っても足手まといじゃないのか？」

「おまえが行くんだよ！」

青は当然の如く、シオを指した。

「お前はウルトラ馬鹿か？　今までの話しの流れで、どうしてもオレが助けに行くと思うんだ？」

「てか、てか！　思い出したぞ！！　さっきおまえが避けたせいで、オレは眉間に一発くらって意識を失ったんだぞ！　だから海まで落ちて海賊に会って、殺されそうになったんだ！」

「だから？」

「だから”――”だと？」

あまりの冷酷振りに、青は激怒した。

「以外と運動神経鈍いんだなお前、だから受験に落ちるんだよ」

痛いところを、思いつき綺麗な真顔で、シオに突かれた青は一瞬たじろぐ。

「お、おまえ！　鬼のような奴だな！」

「吠えてろ。じゃな」

「ま、待て！」

青はシオの上着の裾を握り閉めた。

「うつせえなつ、離せ！」

「オレをこんな危ない所にひとり置いて行くのかよ」

「てめーがここへ連れて行けって、言っただろうが！」

パシッとシオが青の手を払った。

「……でもここはどこだよ？　みんなは？　てめーどこに連れて来やがった！」

「ここがオレ達が元居た場所だと言っただろう？」

岩の塊がごろごろする辺りを見回すと、確かに曲がりくねった鉄の橋や滝、そこから続く急な川、そして何より崩れ落ちた土砂の中に、半分埋もれたリュックから、大切なマルが覗いていたのを見つ

けて、青はそれを掘り起こした。

「マル！ 会いたかった！」

縫いぐるみに涙を流して頬ずりする青を見て、シオは頭を小突いた。

「おまえ！ そんな物見つけて泣くんじゃねえよ！」

青はリユックとマルの土埃を、綺麗に払いながら背中に背負った。

「さあ、みんなを助けに行こう」

「自分で足手まといに行きやがれ！」

「おめえなあ、可愛い顔して何てこと言いやがるんだ！」

「だーれが、可愛い顔だつて……？」

「おめーだよ！ 中身は悪魔だな！」

「てつめーっっっ」

二人は顔を付き合わせて、くだらない言い争いをしていた。

その一瞬を突かれた。

「見つけたぞ、小僧」

瞬間に移動してきた、さっき青の眉間を突いた能力者によって、

シオはあつと言う間に眉間を突かれた。

「シオ！」

突然シオは意識を失いその場に崩れ落ちた。

青はトオルから貰った銃を腰から取り出し、男を間近で撃つたつもりだったが、目の前からあつと言う間に消えたと思った瞬間、男は後方に姿を現した。

「さあ、そいつを渡して貰おうか」

「おいシオ！ 起きろって！」

「簡単には目覚めないぜ、さっさと渡しな、そしたらお前の命は助けてやるよ」

男は笑いながら一步一步、ゆっくりと歩いて来る。

「シオてめえ！ 肝心な時に気を失いやがって！ 起きろ！」

青は眉間に触れられないようゴーグルを掛け直すと、腕を掴んで

も人形のようにピクともしないシオを抱えた。

「近寄るな、これ以上近寄ると撃つぞ！」

「そんな子供だましの銃で、何ができると思うんだ？」

”ハハハハハハハハ”と男の笑い声が洞窟内で響き渡った。

とにかく逃げようと、青は銃を男に向けて連射しながら、必死でエアボードに乗ると加速を付けた。

「手を煩わすな小僧」

青は元来た道を戻っていた、随分奥に来たものだけど取り合えず戻るしかない、でもシオを抱えていつまで体力が保つか恐怖さえ感じる。

とにかく人の多い所に出るまで時間を稼ぐしか無い。

きつと直ぐに、瑠華が学園の誰かが見つけてくれるだろう、それを信じて走るだけだ。青は再び加速した。

幸いこの道は勝手知ったる庭のようなものだし、どこで加速してどこで減速するか、曲がりくねる道の勾配は身体で覚えているし、岩は少しでも触れたり銃を乱射すると、羽虫が飛び交い、後方の視界を塞ぐ事も知っていた。

おまけに薄暗いのも幸いしていて、後ろから銃を標的をロックし難いのは、以前からこの辺りで、玩具の銃で仲間と遊んでいたことから知り得た知恵だ。

青は男に先回りされても、何時でも銃が撃てるよう右手に持ち、左手で背中に乗せたシオを振り落とさないようしっかり支えて、全速力で狭い洞窟を走った。

イアホンは陸達が戦っているだろうノイズが、さっきから途切れながら僅かに聞こえていた。

「誰かー、誰かいねえのかよ！」

青はマイクに叫んだ。

『青？ 青なのね？』

雑音の後、いきなり瑠華から連絡が入った。

その後ろで爆音が轟いている。

『青！ やつと通じた！』

「姉ちゃんか？」

『あんた大丈夫だった？ 銃声が聞こえたけど？』

「そうなんだ、あの滝を降りたところにすげえ財宝があつてさ、そしたら海賊がやってきて逃げだしたんだけど、海へ出たら海賊船に砲撃されるし、ここへ戻ってきたらテレポーターと出くわすし、今は追われてる真つ最中！」

『海賊？ 海賊ですって？ みんな仲間なの？』

「わかんねーよ！ それよかおれたちやばいよ！ 早く助けに来てくれよ！」

『こつちもさっきの男の仲間をやつつけるのに苦戦してるのよ！

岩盤が脆くて下手に銃を撃つと、岩が崩れてきて危険なの、テレポーターはそっちに行つたのね、ここの仲間と一緒に逃げないって事は、そいつは自分しか移動できないんじゃないかしら？』

「どういう意味だ？」

『シオの場合は手を触れた物、人、総てを転送できるけど、そこまでの能力は稀まれなのよ。だから男はシオを狙ってるんだと思うの、万が一シオが奴に捕まつたとしても、奴の能力では一緒に転送は無理だと思うから、いきなり消えることは無いと思うし、シオの命を狙ってる分けでは無いと思う。でも、気を付けてね、私たちも直ぐに後を追うから』

「そうか、分かつた」

『シオを頼んだわよ！』

「オレが頼みたいよ！ とにかく、来た道に戻ってるから早く追つて来てくれ！」

『わかつた。だからあんたも頑……』

そこで通信はいきなり切れた。

向こうも心配だが、こつちも命がけだ。

しかし、華奢に見えてもシオは男だ、意識の無い身体は石のように重くのしかかる。男はエア・シューズで追いかけて来ているが、

トランスポーターでもあるのでいつどこに現れるか分からない。例えば銃で壁を崩しても簡単にすり抜けて来るだろう。さっきから男が乱射したレーザーが堅い岩をくり抜く音がする。

青も時折、後ろを目掛けて銃を撃ったが、岩盤の碎ける音が微かにしただけだった。

いったいどうしたらいいのか、まったく勝算が見つからない、後ろの様子をチラリと見た瞬間、青の頬に鋭い痛みが走った。

「痛ってー」

男の銃が頬を掠めたのだ。

「さつさとそいつを渡しやがれ、そしたらお前の命だけは助けてやると言っただろう……」

後ろから声が聞こえた。

落ち着け、自分！

青は賢明に考えた。

もう少し戻れば上層に伸びた小さな脇道と、迷路のようになつた行き止まりの道が伸びる三叉路がある。

ここに詳しくなければ知り得ない道だ。

そこまで行つて、岩一面にへばり付いている羽虫を目覚めさせ洞窟の壁を崩すと、どっちに向かったか解らなくなるだろう、暫くの間稼ぎが出来るかも知れない。

体力では誰にも負けない青だったが、シオの体重が押し掛かる今、息は切れ切れで、額から大粒の汗が頬を伝うのがわかる。

急カーブを曲がり、肩からシオが滑り落ちそうになった。

もう限界を超えそうな青は、三叉路が近づくとポケットから閃光銃を取り出した。

暗い洞窟で遊ぶ青達の遊び道具だったが、今日は役に立ちそうだった。

それを壁の羽虫目掛けて撃った。

すると、眩しい閃光と爆風に驚いた羽虫が辺り一面一斉に舞い上がった。

それを連打し終わる頃には、前が見えないくらい黒く大きな塊と
なつて通路を塞ぎ、次に銃を持ち替えて、レーザーガンを連射して
壁を打ち崩した。

天井は轟音と共に崩れ落ちてきて、砂煙と羽虫の塊で三叉路周辺
は闇に包まれた。

10・眠り続ける”悪魔”

普段は誰も通らぬ道ではあったが、狭く急勾配なので、エアードの速度が必然的に減速する。

これから一気に地上まで出ようか、それとも奴らの仲間が地上にいて待ち伏せとかあるだろうか？

この道は郊外の広い森に通じており、少し進むと巨大なビル街に出て何より人が沢山いる、明らかに電波状況の改善や救助の確率も増えそうだ。

このままほぼ一方通行の洞窟内を戻る方が危険ではないだろうか……。

青は色々と考えた末、一旦地上に登る事にしたが、何しろひと休みしないと体力に限界が来ている。

真上に通じる縦穴の前で、少し休憩を取ることにした。

身を隠せそうな岩陰を見つけて、相変わらず意識の戻らないシオをそつと凭せ掛ける。その横に腰掛けた青は、リュックの中から水の入ったボトルを取り出し、喉の渴きを癒す為に口に含むと、硬水は胃の中に優しく流れて行った。

「……なんてこった……、偉そうな口ききやがってこれか……？」
隣で眠っているシオを見つめて悪態をついた。

でも、近くで見ると本当に綺麗な顔をしている。

長い睫や鼻筋の通った白い肌、それを半分覆い隠す長いプラチナ色の髪の毛……。

「やっべー、マジ可愛い顔してるな、こいつ」

しかし、今までの自分に対して、暴言の数々を思い出した。

「いかん、いかん！ 危ねー！ こいつ目を開けたら悪魔だからな」
青はシオの顔を頭から追い払うかのように、頭を振った。

そして再びバッグの中を漁って林檎を取り出し、それを齧りながら上に通じる縦穴に掛けられた鉄の階段を見上げて、ここは一気に

シオを抱えて登るしかないと思案した。

その時、イアホンから声が聞こえた。

『青、大丈夫？』

『姉ちゃん！』

『今どこなの？』

「あの三叉路まで戻って、迷路とは別の方の森に出る道に向かってるけど、今縦穴に登る階段の前にいるんだ。姉ちゃんは今どこにいるんだ？」

『今ね青が落ちた滝まで来てるの、あなた達はそのまま地上に出た方が良くわね。そしたら木先生が護送艇で向かえに来てくれると思う』

「うん、わかった。でもさあ、いつたい何時になったらこいつ目が覚めるんだ？」

『ああ、シオね』

「全然目が覚めないんだよ、担いでるんだけど重くてさあ……」

『さっきのテレポーターはどうやら呪術も使えるらしいわね、あんたも掛かったでしょう？一瞬にして意識を失わせる事ができるという術よ。それは同じ呪術能力を持つ莉空先輩か木先生じゃないと解けないわ』

「でも、さっきはオレ気がついたぞ？」

『海に落ちたからでしょ、皮膚、呼吸困難などの体的変化を細胞単位で感じて、それで覚醒できんだと思うわ』

「まあよくわかんないけど、じゃあ、こいつは当分何があっても、目が覚めないって事なんだな」

『そう言うこと。気を着けて、さっきまで戦闘態勢にあった二人のうちの1人を逃してしまったの、きつとあなた達を追ってると思うから気をつけるのよ』

「いつたい何人いるんだ？ 海では海賊に狙われて、洞窟ではこいつらに追われて、オレは幼気な一般市民だと言うのにあんまりじゃないか？」

『喋る間があつたら逃げなさい!』

そして瑠華からの連絡はいきなりプツリと切れた。

「お、おーい!? なんだよ、いきなり切りやがって! おまえら無責任過ぎやしねえか?」

滝まで来るといふ瑠華の言葉に、青は少しばかり元氣を取り戻したが、それでもここに留まる事の危険性が、少なくなった分けじや無い。

青はリュックに詰め込んであつた、幾つもの林檎を泣く泣く捨てて、中にエア―ボードを仕舞うと、着ていた上着を脱いで、背負つたシオが落ちないように、ウエストのあたりできつく結んだ。

そして、洞窟が曲がりくねって先が全く見えない上空は、ある意味、身を隠すのに好都合とも言えて、青は意を決するようにつぎつぎ鉄の梯子に手を掛けた。

「なんて一日だ。ちくしょう……、頑張れオレ!」

氣分を奮い立たすように呟いて、止め処なく長い階段を登り始めた。

ここは避難経路と空気穴の役目を果たし、こういった縦穴洞窟内の所々に数多く点在する。

人が独りか二人くらいすれすれに通れる程の狭い縦穴は、ごつごつした岩肌が剥き出していて、少し触れるとパラパラと小石が下に落ちて行つた。

穴蔵の道は左右前後、縦横無尽に掘られていて、もしも下から銃を撃たれても素早く隠れれば何とかかなりそうなカーブが続く。

しかもシオが狙いなら、そう簡単に撃つてこない事も考えられた。最初から殺す目的だつたら眉間を狙つて、意識を無くすような面倒なことはない筈だ。

青はそう思うと幾分氣分が楽になつたが、取り合えず死に物狂いで鉛のように重いシオを、地上まで運び上げなくてはならない。

イヤホンからは途切れ途切れに瑠華たちの戦闘の爆音や、悲鳴とも取れぬ声が漏れてきていた。

不穩は募るが、向こうには助けが行ったと聞いたし、まして能力を持つ訓練生でもあるし、それに独りで戦っているわけでも無いので、瑠華の心配よりも自分の置かれている状況の方が深刻に思えた。今までだって盗賊や犯罪者に、ここで会ったことは何度もあるが、恐ろしい目にあってもそれは恐喝や、洞窟に深く入り込み過ぎたことで、知らず知らずに彼等のアジト近くまで近づいてしまった事などへの、警告、或いは脅かしを受けた程度で、子供ゆえ大幅に見過ごされてきたが、先ほどのように財宝の在処までは、辿り着いたことは無かった。

今現在、身の危険に晒されるのは確かに当然のことだった。

でも、こんな危険な無法地帯で、訓練を考える学園の方もどうかしてると思ったが、もしかしたら、それ以上に彼等の能力は、大人を相手に出来るほど凄い物なのかも知れない。

年齢に関係なく能力次第の世界では、戦闘能力がプラスされれば、確かにどんな凶悪犯も手が出せないだろう。

改めて同年代が恐ろしい敵と同等に戦っている事実を、賞賛しなければならぬ事への、嫉妬と羨望の複雑な思いに駆られる青だった。

瑠華の動いている物体を止めることができる能力は、子供の頃から間近で見えて知っていたが、シオのレポート能力やトオルの植物を操る能力、又は梨子の追跡能力など、通常ではあり得ない驚異の身体能力を持つ、学園の生徒の凄さを改めて感じたと同時に、自分は試験に落ちて当然だと思い知らされた。

そんな彼等から託された、使命でもある今自分にできることと言ったら、シオを守ることだ。

それだけに集中しようと、きつく錆びた梯子を握りしめた時、耳元で風圧を感じたと思ったら、青の上空2メートル程の所に、下から打って来たレーザー銃が当たって、岩が飛び散った。

「うわぁ、下から撃ってきやがった!」

「観念しやがれ、逃げられやしないぞ小僧!」

さつきとは別の男が薄暗い底から、這い上がってくるのが見えた。手に持った銃で二人を狙ってくる。

「なんでだろう、もう見つかってしまったのか……、ちくしょう……」

再び上空に当たったレーザーが岩を崩して、パラパラと音をたてて青の頭に落ちてくる。

青は反対に自分からレーザーを、足元の敵に向けて闇雲に撃った。それが側面に当たって壁を崩した。

「もっと落ちろ！」

そして、言葉に連動したように、意外にも壁がごっそり崩れた。

「わあ……、てめえ！」

下の方から、喚き声が聞こえる。

しかし、男はそれでも銃を上空に乱射して来る。

足元の岩が崩れる。

”このままだと、本当にまずい！”

何時かは銃に当たりそうだが、今は必死で上に登るしかない。

例え銃に当たったとしても……。

青は再び銃を下に向けて、側面を撃ちまくった。

「崩れる！ もっと崩れて道をふさげー！」

言葉通りに壁は崩れ落ちるが、その中を下から突き上げてきたレーザーが、握っていた青の銃に当たって弾き飛ばされ、銃は下に落ちて行った。

「ざまあ、みやがれ！ てめー！ ふざけんなよ！ 小僧！ もう何も出来ないだろう」

「まずい！」

亀裂が入った岩の壁を見やりながら、青は死に物狂いで階段を駆け上がった。

「落ちろ、落ちろ！ 岩が崩れて穴を塞げばいい！」

すると、次の瞬間、剥き出しだった大きな岩が動いたかと思うと、大きな音を立てて下に落ちて行った。

「うわあああああああ」

下で悲鳴にも似た声があがった。

どうやら、今の落石で穴が塞がったようで、途中に大きな岩の固まりが見える。

「マジか？ すっげえ、オレの能力！ …… って、亀裂入って落ちそうだったんだよな。まあ、これではらく時間稼ぎできるかな」

青は土埃舞う洞窟内を見下ろしていたが、男の反応が無い事に少しばかり安心して、更に上層階を目指した。

11・秘められた能力

鬱蒼とした木立に覆われた森の、中心部にある通気口の蓋を開けて、青は渾身の力を振り絞り、やつの思いで地上に出てきた。

まずはテレポーターの気配が無いか、草むらに潜んで辺りを見回したが、今の所どこにも人の気配は無かった。

上着の結び目を解いてシオを草むらの上に寝かすと、青もその側に仰向けに横たわる。

爆発しそうに激しく鼓動する心臓とは対照的に、穏やかな小鳥のさえずりが聞こえてくる上空を見つめた。

木々の隙間から青く澄んだ空が見え、青はこのまま眠ってしまいたいと思える程に、身体は疲労困憊しきっていた。

瑠華が着けてくれた、腕の装置が発動していなかったのも、二、三回叩いてみたら、6個の青いランプの点滅が復活した。

どうやら海に落ちたり、洞窟で暴れた拍子に接触が悪くなっていたのは、自分のアームバンドのせいだった。

シオの腕にも、まだ装着されている。

横たわったままピクリとも動かない美麗な少年は、青の気も知らないで意識を手放してスヤスヤと眠り続けている……。

しかし……。

こいつは戦闘態勢中、みんなをここに残したまま、本気で再び学園に戻るつもりだったのだろうか……？

でも、一度は帰還していたと思われる学園から、ここへ自分を助けに来てくれたのも事実で……。

いまいち優しいのか非情なのか、図りかねる性格をしている……、そう思いながら、傍らで目を閉じたままの”眠る悪魔”を、青はじつと見ていた。

ここから何処かに避難したと思われる、トオルを含め生命確認と位置表示は、手首に装着されている機械で確認できる。

これを装着している限り、仲間の安全がほぼ分かるのだ。

「とにかく、みんな無事なんだな……良かった……。しかし、いったいどうしたらこんなにも何時までも眠れるんだ？ 起きやがれ！」

青は一向に目を覚ましそうにない、シオの眉間にデコピンを数発繰り返したが、全く目覚める兆候は見あたらなかった。

「起きろよ……オレ泣きそうだ……、身体がもう動かねえ……」

遥か高く遠い空を見上げながら、つい弱気になって呟いた……。

『青君、応答できるか？ 木だ』

「木先生……？」

イヤホンに、いきなり声が聞こえてきた。

アームバンドを見ると、緊急ラインの赤いランプが点滅している。『そうだ。大変だったねシオのことは聞いたよ。今君と一緒にいるんだよね？』

「うん。でも目覚めないんだこいつ」

『それは大丈夫だ。眠らされてるだけのようだからね、それより今まで上空で待機していたんだけど、洞窟を抜けたことでやっと君の正しい位置装置が発動したよ。今から森を抜けて来られるかな？』

森から出て来ないと救助艇への乗り込みが不可能なんだ。そこは木々が高くて森が深過ぎる。南南東に向かってくれないか？ アーム

バンドに方位が出てるはずだからそれを見ればいい。君もシオを抱えて大変だろうから、こっちからも向かえに行くよ」

「うん。頼んだよ先生、本当はもう一步も歩けないくらいだ……」
木はクスリと笑った。

『承知した』

相変わらず大の字で上を向いたまま、木の言葉に安堵して大きく息を吸う。

”もう少しだ” そう思って心が緩んだのもつかの間、青は、どこか遠くで大きな爆音を聞いた。

身を起こして耳を澄ますと、この静かな森のどこかでもう一度爆発音がした。

地下ではないと思うのは、大きな樹が倒れるバリバリという音を聞いたからである。

「近づいてくる……」

青はリュックからエアードを取り出し、リュックを捨ててマールをポケットに突っ込み、汚れてぼろぼろの上着で再びシオを背中に結わえた。

そして最後の力を振り絞って、エアードに乘ろうとした時、いきなり目の前に立ち塞がったのは、宝の砂浜で見た海賊の二人組だった。

爆音の距離から言って、まだ遠いと踏んでいた青は、敵が余りに速く現れたので驚きつつも、彼等の他にもしかしてまだ敵がいるのだろうかと思案した。

銃を振りかざしながら、ニヤニヤ笑って立っている。

「待ちな坊主……」

「何だよ、オレは宝石はすべて返したぞ」

「顔を見られちゃ、素直にお前を帰すわけにはいかねえんだよ」

「今まで宝石は見たこと無かったけど、洞窟の奥で会ってもみんな返してくれたぞ」

「今回は別だ。お前はお宝を見ちまった……」

「今までだつて誰にも言わなかったろ？」

「俺たちの顔も見られたし、お前がこいつらの仲間だと知れば、帰す分けにはいかねえんだよ」

ずしりとシオの重さが肩に掛かる。

どう言い訳しても、逃れる術は無さそうに思われた。

額から汗がどつと噴出すのを感じる。

絶対絶命……と青が思った時、どこから飛んできたミサイルが、海賊と青の頭上を越して前方に落ちて爆発した。

その爆風で辺りの木々は吹っ飛び、青も盗賊も宙を舞った。

「痛てててて……」

青も勿論、背中にいたシオも盗賊も、折れて粉々になった木に覆われた。

地面には大きな穴が開いて、もくもくと粉塵が立ち上っている。

「今度は何だ？」青は煙の向こうから、こちらにやって来る人影を見て嫌な予感がした。

「盗賊め、邪魔をしやがりやがつて」

煙の中から出てきたのは、長いロングコートを着たテレポーターだった。

ミサイルランチャーを抱えているので、先ほどの爆音の主はどうやらこいつだと、青は目星を付けた。

「おめえこそ誰だ！ グリズリー海賊団の縄張りでこんなことしやがつて、只じゃおかねえぞ」

爆風に吹き飛んだ海賊が、落ち木を払いながら立ち上がつて言う。俯せに落ちた青は、懇親の力を振り絞って上半身を起こした。

全身が痛みで軋んでいた……。

「俺は”閻王様”の使いだ」

「ふざけんな、”閻王様”だつて？」

海賊は見下したように、テレポーターを見て大笑いしたが、男はそんなことは見越していたかのような、鼻にも掛けない態度で鷹揚に言う。

「恐らく！ 笑っているのも今のうちだ。雑魚に用は無い。今逃げたら命だけは助けてやるぞ虫けらども」

「何だと……!?」

海賊はテレポーター目掛けて銃を連射したが、瞬時に移動するテレポーターには擦りもしない。

鉛の玉が無闇に森に消えて行くばかりだった。

「な、何だこいつは！」

「テレポーターだよおっさん！ 普通に戦って敵う相手ではないよ」
驚愕の表情をして、目の前で消えては現れる男を見つめる海賊に、青は説明をした。

「どけ」

腰を抜かす海賊にランチャーを向けて、道を開けさせたテレポーターは、青の前に立ちはだかった。

「万事休すとはこのことだ。渡せそいつを」

そう言って、後ろのシオへと手を伸ばして来た男の手を、青は払い退けた。

「来るな！」

必死の思いで振った手が、思わぬ風圧と威力を伴い、テレポーターを後方へ退けた。

それは、風に飛ばされたような感じだったが意外と強烈で、青は思わず自分の手の平をマジと見た。

「なんだ？ 今のは……」

「……」

怯んで後ろに下がったままの男も、青の反撃に少しばかり驚いている。

テレポーターの際に乗じた海賊が、男目掛けて再び銃を乱射した。今度は二人の男が乱射するので、テレポーターも足止めされているようだ。

青はこの隙に逃げるが勝ちだと思い、とにかく早くこの場を離れようと、エアードに乗った。

ここまで必死に耐えてきて、こんな所でシオを奪われたくは無い。
第一、すぐ側まで助けが来ている筈だ。

とにかく、木先生の所までシオを送り届けたい。

「絶対逃げ切つてやる！」

そう思ったのもつかの間、後ろから飛んできたミサイルは、再び頭上を通り越し、前方の森に落ちて、大小無数の大木が裂け散った。エアボードのスピードが出ている為に、上空前方から無尽に落ちてくる木っ端微塵の木片を、避けようと手で払ったつもりが、それは跳ね返って勢いよく他の木に突き刺さった。

「おおおーっ、なんだ？」

すげえ威力だ。

もしやと思い、青は手を伸ばして、頭上を覆う枝を折るイメージをした。

するとどうだろう！ 枝はあっさり折れて落ちてきた。

「マジかあ？ 面白しれーっ」

青の顔に笑顔が戻った。

こうなったら、手当たり次第に木を折って道を塞いでやる。

青が手を伸ばして木を切り倒すイメージをすると、あつと言つ間に切れ目が入り大きな大木が横倒しになった。

「すっげえええええ」

指を横にすつと流すだけでスパツと真つ二つになり、後方に倒れるイメージをするだけで、思うように道を塞いで、背後に感じるテレポーターの進路の邪魔をした。

「オレどうなったんだ？」

じつと手を見ても、汚れているだけで何の変化も見あたらな

い。しかし、その能力に啞然としてる時、目の前にいきなりテレポーターが現れた。

青が移動するのと同じスピードで、前方へ背を向け移動している。
なんて奴だ！

次の瞬間、銃口が青の眉間に触った。

「お遊びは終わりだ、覚悟しな」

青は自分を防御するような仕草で、顔を覆うように腕をクロスしたと見せかけた。

そして……。

「失せろ！」

青が両手を左右に思いっきり振った時、目の前の男はその言葉通り横に吹っ飛び、大木にぶつかり気を失ったかのように、ずるずると下に落ちて行った。

それを尻目に移動した青は、簡単に人を吹き飛ばしたりしたこと、少しばかりの恐怖とショックで自分が怖くなってきた。

死んだのかなあいつ……。

でもシオを守らないといけなかったんだし……。

複雑な思いを抱えながら前方を見ると、数人の人影が見えて来た。あの制服は特殊部隊の制服で、木先生だと確信すると青は涙が出そうだった。

——しかし、その時である。

ミサイルが青を掠めた。

それは青の目の前、数メートルの所へ落ちて爆発し、その凄まじい爆風に青とシオの身体は上空に吹き飛ばされ、結んであつた上着が破けて、シオが青の肩から滑り落ちて行く……。

その時、やっとの思いでシオの手を掴んだ青は、その指先が青の手をきつく握り返したのを感じて、彼の顔を見た。

上空20メートルで、事の次第を理解したのだろうか、口は真一文字に結んではいたが、シオは瞳を丸くしている。

そして、次の瞬間！

青とシオは更に高い、2000フィート上空にいた。

12・アイスブルーの狂気

「わあああああああああー」

青の叫び声は、天空において風にかき消されて行く。

「早くボードに乗れ！」

立場は一気に逆転し、シオはいつの間にか自分のエアードに乗っており、腕一本で青を捕まえていた。

前後上下の無い浮遊感、青の身体と心を恐怖で竦ませたが、シオに支えられてやつとの思いでボードに蹴り上がる事ができた。

「おまえ、エアード持っていたのか？」

「オレたちのエアードはコンパクトに終えて、ポケットに入るんだ。移動する前に掴んで空中で広げた」

あの爆風に身体が舞い上がった一瞬で、全てを理解したんだろうか？

だとしたら凄すぎる……、今もかなり冷静な顔して、落ちないような青の腕をしっかりと掴んだままだ。

「……で、でも、あり得ない！なぜ地上じゃいけなかったんだよ！なんでここなんだ？し、下に街が、海が見えるぞ！」

「どこに敵がいるかわからないからな」

「だ、だ、だけど……よう……」

黙ったまま長い髪を風に靡かせながら、平然としているシオは、汚れきつてよれよれの青を見ていた。

「……おまえ何でそんなに、小汚いんだ？」

「てつめー、殺されたいか！」

拳をシオの目の前に翳そうとしてバランスが崩れ、落ちそうになった青の胸倉をシオが掴んだ。

「ひいひいひい、……あ、危ね……」

「暴れるな、落ちるぞ」

こんなに風が吹いているのに、青の額から嫌な汗が流れた。風がヒューヒューと音を立てて、耳元を掠めてゆく。

足元を見ると気を失いそうで、青はじつとシオの瞳を見ていた。アイス・ブルーの、引き込まれそうに綺麗な瞳の色を……。

ここで落下する恐怖より、シオの目に宿る狂気を感じるこの方が、まだマシなように思われた。

まあ、どっちもどちだが……。

そんなことを青が思っていると、いきなり、シオは顔を顰めた。

「……い、痛って……」

「おまえ、何だよ。いきなり」

「なんでオレの体中、こんなに痛いんだ？ どこもここも痛って……」

眉間に皺を寄せながら、シオはそう叫んで前に俯いた。

「そりゃ……話せば長い話しになるんだが……って、ここから降ろしやがれ……！ オレは高所恐怖症だ！」

「……」

恐い顔して、急にシオが黙った。

長いプラチナブロードがサラサラ風に揺れている。

何だよ、どうしたんだ？

この酷く恐怖にも似た沈黙に……、青は心臓がざわめいた。

シオはさらに下を向いたかと思うと、暫くしてゆっくりと起き上がり、そして真っ赤な手の平を青の前に翳した。

ぎょえ……

青の顔から血の気が失せる……。

「どうやら撃たれたようだが……」

恐る恐る下を向いた青は、シオの右太ももの制服が破けて、その皮膚から血が滲み出ているのを見ると、気分が悪くなってきた。

「……う、う……撃たれてたのか？ おまえ……」

あらら、いつの間に……、気がつかなかったよ……。

「……どういう事だよ？」

アイスブルーの瞳は、容赦なく冷たい光を宿して青を見ていた。2000メートル上空で、しかもこの状況、どう返事したものが青は考えていた。

こいつなら、気に入らない答えひとつでここから突き落としかねない。

青は身震いした。

「おまえ、綺麗な顔してるよな」

自分でも思ってもいない答えが口を突いて出た。

な、何言ってるんだオレは……！！

青は思考回路が停止しそうだった。

「殴りたいか？ おまえ」

目を細めてシオが言った。

「ちょー！と待て！ 思い出せよ！ おまえいきなりあのテレポーターに洞窟で眉間突かれやがって！ オレがどんな思いでおま……」

……

「思い出した……」

「だろ？ だろ？ あれからおまえを守るために、オレがどんなに苦労したか……、思い出したろ？」

「ああ、おまえオレのこと”鬼”だとか、”悪魔”だとか言ってたよな……」

「そっちかよ！　そこ思い出すか？　この状況において！」

「眉間も痛いぞ」

シオが額に手を充てて、青を睨んだ。

「何かしただろ……」

「な、何をさ……」

青は冷や汗が出るのを感じた。

「まさかとは思うが”デコピン”とか……」

「……」

こ、こいつ鋭すぎる……、青は2000メートル上空で泣きそうだった。

「バカの考えそうなことだ……」

「それより、早く下に降りようぜ、木先生が心配するぞ。目前でいきなり消えたんだから」

「木先生は知ってるさ、オレが逃げたことくらい。それより吹き飛ばされた時に見た。テレポーターの仕業かこれは……」

「そつだ、全部あいつらだよ」

シオは指に着いた、自分の血を舐めた……

目が笑って無いので、青は背筋が凍る思いだった。

こいつはいったい、何を考えているのだろう……。明らかに、目が戦闘態勢だぞ……。

「行くぞ！」

「え？」

次の瞬間、青はそこからシオによって連れ去られた。

13. 空中の攻防

「ええええええええええええええええ」

気がついたらコンクリートに顔をぶつけて、前のめりに跪きながら青は叫んでいた。

疲れきった身体と高所からの生還、主にそれは恐怖を伴っていたが……、それにより息絶え絶えの青は、頭の痛さと移動のせいで、吐きそうだった。

「あいつ絶対わざとだ……、なんでコンクリに俯せになるんだよ」
目の端にぼんやりと複数の黒いっばい服を着た人々や、幾つもの飛行艇を確認し、それがスカイ・ポリス特殊部隊の制服だと思うと、安心して随分気は楽になったが、もう身体は疲労で動けなくなっていた。

額を地面に着けたまま、青は近づいて来る数人の足音を聞いていた。

「お帰り青」

弾んだ声に顔を上げると、瑠華と梨子が側に駆け寄って来るのが見えた。

二人の制服や顔も汚れてはいたが、その満面の笑顔に勇気付けられて、つい青は顔が綻んだ。

「姉ちゃん！無事だったか？」

「私たちは大丈夫よ。あれからスカイ・ポリスが救助に来てくれたの。あんたこそよく頑張ったわね」

労いの言葉に思わず涙ぐむ青だった。

「オレ死ぬかと思ったんだぞ！」

テレポーターも海賊も、そして上空のシオも、死にそうなほど怖

かった……、とは口にできなかったが……。

「うんうん。怪我は無いのね？」

「大丈夫だ、でもトオルはどうなった？ 無事か？ 迎えに来てくれた救護艇も、砲撃を受けて煙が出てたけど……」

「救護艇はかなりの損傷はあったみたいだけど、安心して、何とか神殿まで辿りついたわ、トオルも無事で、そこで他のみんなと待機中よ」

「そっか、よかった……」

「あんたの無線は途切れて話が出来なかったから、トオルが私たちに連絡して来たの、凄くあんたを心配してた」

「トオルったら、訓練生の自分が救護艇へ先に乗った事を嘆いていたのよ、あいつは大丈夫だろうかってオロオロしてたよ」

梨子が可笑しそうに笑った。

「うん……」

遠ざかる救護艇から、必死になって叫ぶトオルの声が蘇った青は、悪い奴じゃなかったなと思えて、胸が熱くなりそして嬉しかった。

「まあ、話しは後で聞いてあげるから、そこでじっとしてなさい。

今テレポーターの仲間とスカイ・ポリスが戦闘中だから行って来るわ」

そう言つと、瑠華と梨子はまだ戦闘が続いているらしい、森に向けて走って行った。

森では爆音が轟いていた。

あちらこちらで粉塵が舞い上がっている。

そして、シオがどこに行つたか探して見ると、彼は遙か上空でエアーボードに乗ったまま、空中を瞬時に移動しまくって、緑の髪のテレポーターと格闘していた。

青はゴーグルを目に翳すと、望遠で二人の様子を見た。

地上のスカイ・ポリスも、この高さでは流石にテレポーター相手

に齒が立たないのか、じつと上空を見ていた。

ここからは遠過ぎてきつと銃も届かないだろう……、それが敵の罠なのだろうか……。

それにしても、まだ自分と同じ13歳だと言うのに、大の能力者と互角に戦っている。

男はシオを殺す気は無いが、どうやらあの形の銃は麻酔銃だろう、眠らせて連れ帰るつもりらしいが、狙いを定めても移動の速度が速すぎて照準が合わせずらそうだった。

……と言うか、あいつキレてないか？

青が見ていると、素早い動作で瞬時に移動して、男の近くに現れたかと思うと、ぼこぼこパンチを入れるが、男も黙ってはいない。並みの男では無い証拠に、シオが銃を撃つても、目に見えぬバリアのようなものであつさりレーザーを跳ね返して笑っている。

「そんな子供騙しの銃で、俺がやられるわけが無いだろう」

「ちっ」

シオは悪態を吐いた。

そして一瞬消えたかと思ったら、瞬く間にとび蹴りしながら現れて、男のわき腹を思いつきり蹴り上げた。

流石の男もふらりと蹠踉めいた。

「……やるじゃないか、小僧。俺様がこんなに翻弄されるのは久しぶりだ……」

シオのレーザー銃が、男を捕らえている。

「そんな物、俺に向けても役に立たない事は知っているだろう？ 捕まえる事もできないと言う事実もな……」

「どうかな？ では何故逃げないんだ」

「おや、それは愚問と言うものだリグラス・シオ。俺と一緒に来い、俺たちはお前が求めている答えを持っている」

男はニヤリと笑った。

「何のことだ……？」

困惑したのはシオの方だった。

その隙を見逃さなかった男は、一瞬にしてシオの背後に回り込み、身体を押さえつけて麻酔を打とうとしたその時、身を翻したシオが男の腕を押さえつけた事によって、それはギリギリで阻止された。二人は向き合う形になり、麻酔銃は力の均衡で、二人の間に保たれていた。

地上ではミサイルやロケットと言った、砲撃の準備は整っていたが、その使用を躊躇っているのは、シオに当たる事を案じていたのかも知れないと青は思った。

瞬時に移動するテレポーターの一進一退の攻防は、悔しい事に誰も手が出せず、見守るしかなかったのだ……。

「観念しろ」

麻酔銃の針がシオの耳元10センチの所で阻止されている。

耐久力となると、流石にシオは力の差を感じ始めていた。

”地上に引き摺り降ろそう、スカイ・ポリスのいるど真ん中へ”
と思った時、男はさっきからシオに向ける不可解な話を続けた。

「お前は真実を知りたいだろう？ 俺たちと一緒に来れば教えてやる……」

シオの目が見開かれた。

「……何を、言ってるんだ？」

「……」

本気で尋ねているらしいシオの顔を見て、今度は男が驚く番だった。

「……リグラス、お前は……」

そう言っ、男が言い淀み腕の力が緩んだ瞬間、男は地上に降ろされた。

そして、あっという間に、数十人のスカイ・ポリスによって周囲

をぐるりと囲われ、標的を捕らえた銃口が二人に向けられた。

地上に降りた瞬間、シオは青の時と同様、しかし、もっと力を込めて地面に激突させたので、男は頭から血を流しながら、逃げる気力も無くうつ伏せになり呻いていた。

そして、男の背中に乗って抑え付けたまま、先生から貰っておいた手錠を、男の右腕に素早く嵌めると、無理やり男を立ち上げさせて、木の前に突き出した。

「良くやったシオ」

硬い表情のまま頷くシオに、木は探るような視線で見返した。

「リグラス、お前はもしかして覚えて無いのか……？」

男はしつこく尋ねた。

「だから、何の事だと言ってるだろう」

二人の噛み合わない会話の真意を悟った木は、終止符を打つべくシオを遠ざけようとした。

「もういいシオ、後はスカイ・ポリスに任せておけ」

不可解な顔をした男が、今度は木を向いて言った。

「お前からいつに……、あの力はどうなったんだ……」

「黙れ」

その時、木が男の腹に*4気砲弾を食らわした。

男は間近の攻撃に咽て、身体を折って咳き込んだ。

「……まあ、いい……、まあ、いいだろうリグラス」

それから男は”くくく”と、奇妙な笑いを零した。

この期に及んでも、余裕すら感じられるのはどうしてだろう……、

そして、男がさっきから言ってる意味不明な言葉の数々……、シオは訝しんだが、それらを打ち払うように告げた。

「人の心配するより自分の心配をしろ、この手錠は10桁のシリアルナンバーが解らないと外すことが出来ない。テレポーターの能力を完全に封じる電磁波でブロックされていて、移動は絶対に不可能だ。もし、そのままテレポートすると手首だけ置いて行くことになるからな気をつけるんだな」

シオは子供には見えない、残虐な表情を浮かべて男を見ていた。

「……油断してしまったようだな、まさかお前が……」

男は言い淀んだが、それでもまだ目の奥に怪しげな光を揺らめかせて微笑んでいた。

「歩け！」

木に背中を突かれた。

「まあ、待て！ 急ぐ事もなからう？」

手錠に繋がれた手を上に振り上げ、観念したように木を見て時間を請い、今度はシオの方に向き直った。

「リグラス・シオ、お前は新時代の幕開けにふさわしいメンバーとなるだろう」

「新時代だって？」

シオは鼻で笑った。

「お前の探し物は闇王様の手の中にある」

「だから、何のことだ……」

顔を顰めて問う。

男は黙ってシオを見ていた。

「まあ、今はいいだろう……」

こいつは何を言ってるんだ……？

シオは自分を見つめる男の粘着質な視線を、振り払うように目を逸らした。

「そうさ、超人でないと戦えない世界、そしてその世界を支配する力の結集は最早誰にも止められ無いだろう……。光は何時までもお前達の頭上で輝くとは思わない方がいいぞ」

「どういう意味だ」

木が問う。

「ふふふふ、ははははははは。これから闇王様の時代が来るのだ！」

男は狂ったように空に向いて、大笑いをしながら叫んだ。

そして、木が握り絞めていた手錠が、いきなり軽くなったと思った

瞬間、男は木とシオの前から突然姿を消した。

そして、ボトツと言う鈍い音がして、木とシオが足元を見ると、彼の繋がれていた右手首がそこに落ちていた。

「闇王様が待つてるぞ、リグラス・シオ」

声がする頭上をシオが見上げると、その頬に空からポタリと赤い血が一滴落ちてきた。

男は空中に浮いたまま、血塗れの手首を押さえていた。

先鋭な刃物でスパツと切り取られたような傷口の先は無く、関を切ったように血が溢れ出ていたが、それをかまう風も無く不気味に微笑んでいた。

「また向かえに来ようぞ……」

そう言つて、男は一瞬で姿を消した。

そこにいた皆がどよめいて、さっきまで男が宙に浮んでいた、青い空を呆然と見上げていた。

地上では手錠に繋がれ、護送艇に送り込まれようとしている海賊たちが、テレポーターたちとは仲間でないかと抗議していた。

瑠華と梨子がこちらに歩いて来るのが見えたが、シオのことが気がかりだった青は、悔しそうな表情をしたシオの横顔を見ながら、

何時の間にか意識を失った……。

14・人間と名乗る猫

青はエアボードで森の中を猛スピードで走っていた。

空を掴むように差し出した手を握りしめた。

すると、木がバサバサ面白いように切れて、少し指を翳したただけ、あるいはイメージしただけで真つ二つに折れた巨大な木は、ズシンと大きな音をたてて地面に倒れ、コンクリートに大きなひび割れを作った……。

”おもしれっ……っ”思わずニヤついて、顔を綻ばせたと思ったら、ふと目が覚めた……。

あれ？ 何だ？

夢か……？

ここは、どこだ？

とても静かだった。

いつものように子供の声もしなければ、神殿の朝に鳴る鐘の音もしない。

しかし、明るい窓からは頬を撫でる穏やかな風が、そよそよと心地良く吹いてきていた。

ゆっくりと目を開けた青は、見たことも無いような精巧な飾りが施こされた高い天井と、その下の窓とベッドの数、そして広い室内に面喰らったが、でもどうやらこのベッドを利用しているのは青

だけのようだった。

まるで人の気配が無い。

いったいここは何処だろう……。

「気が付きましたか？」

タイミング良く白い白衣を着た若いドクターらしき女性と、看護婦がやって来て青に微笑みかけた。

「あの……ここはいつたいどこですか？」

「ここはSADS、特別能力学園と言った方が、分かりやすいですか？」

ドクターはにっこりと微笑んだ。

「ええええええ、おれあの浮島に来てるのか？」

「浮島ねえ……、ま確かにこの学園都市は浮いてるけど、通称第二ターミナルと言われてるの。第一は国家特殊警察部隊と国家戦略機構があるわ、説明しなくても知ってるかな？」

「すげえ」

青は自分がもうここに来れないと思っていたので、理由はともかくいたく感動した。

「ここは第二の医療室ですよ。君は今回学園の訓練に巻き込まれた負傷者だと聞いてます。それと、色々と事情を聞かなくてならないようなので、通常は地上の病院で治療をするのですが、今回は特別にここでの治療となったみたいですよ。あ、心配しないでね、この治療は下と比べても、最も優秀ですから……」

ドクターは不思議そうに周りを見回す、青の心を読み取って言葉を続けた。

「患者がいらないのはその証拠です。すぐに良くなるので、ベッドはいつもがら隙なのよ」

言われたせいでは無いが、青は心なしに身体がとても軽く感じた。戦闘中の死にそうに疲れきった身体を思い起こすと、疲労感が全く

無くなっていることにまず驚いた。

「じゃ、そろそろ診察させて貰えるかな？」

ドクターは再びにつこり微笑むと、四角く薄いプラスチックボードを取り出して、青の身体の上で全身くまなくかざした。

それはどうやら内臓や筋肉の状態を映す、スケルトンスコープのようだった。

地上の、青の住んでいる周辺の病院ではまず見ることができないだろう、確かにここの医療はかなり進んでいそうだと青は思った。

「うん。大丈夫よ。どこも心配無いわ」

「じゃあさ！　ここを探検してもいいかな？」

「勿論いいわよ。でもねあなたの目が覚めたら学長に連絡することになってるの。きつと、直ぐにお呼びがかかると思うわ。それから学長に直々頼んでみたらどうかしら？」

「うん。わかった。でもさ……ひとつだけお願い聞いて貰っていいかな？」

「何？」

「お腹がぺこぺこなんだけど、何か食べ物もらえないかな……」

「あら、ごめんなさい。うっかりしてたわ。直ぐにここへ持つてくるから。じゃ、少し待つてね。着替えのお洋服はその横のチェストに入ってるわ」

そう言つて、ドクターと看護婦はどこかに行つてしまったが、青が興味津々で辺りを見回しているうち、程なく食事が運ばれてきた。ベッドの上でパンとスープという、とりわけ平凡な食事を終えたが、浮島の食事はどんなだろうと、期待していた分かなりがっかりした青だったが、それは三日間も眠ったままの胃に負担が掛からないよう配慮した病人食だと言う説明と、自分がそんなにも眠っていたのだと言う事実を教えられて驚愕した。

「急に沢山の食事を取ると、胃に負担になるから軽めにしたの」

「おれ何で三日間も眠ってたんだ？」

「切り傷、打撲は沢山あったけど、これと言つて深い傷だったわけ

じゃないし、体内に毒を取り込んだ様子も無かったのよね……他に原因と言えば単なる疲労かしら……」

「疲れてはいたけど、三日も寝るかなあ……」
自分が信じられなかった。

「まあ、酷い目に遭って精神的にも、疲労困憊したんじゃないのかな？」

「みんなは無事なんだよね？」

「大丈夫よ。みんな元気で授業に出てるわ」

「シオは？ 足に深い傷をしてたようだけど……」

血のりの着いた手を思い出すと、上空二千メートルの恐怖に青は身震いした。

とりわけ切れそうに怖い、アイスブルーの瞳……。

「シオくん？ ここへは来なかったわよ？」

「えーっつ、結構深い傷だったのに」

「そうなの？ でもまあ、彼はここに来たこと無いんじゃないかしら、怪我をしたって何度か聞くけど、ここへ来てくれないのよね。我慢してるのかしらね。ああ、見えても強いからシオくんは」

「ふーん、そうなんだ……」

天空ではキレてたよなあ……痛い痛いって叫んでたのに……、不思議な奴だと青はぼんやり考えていた。

いつの間にか、再びベッドで眠り込んだらしい。

何か声が聞こえたような気がして目を開けたが、辺りを見回しても誰もいなかった。

「夢か……」

「夢じゃないよ。ここだ、ここ」

男の子の声がベッドの左側から聞こえたが、どこにいるのだろうか姿は見えない。

「どこだよ？」

「ここだつて、言ってるだろうが！」

どう考えても、声はベッドの下から聞こえてくる。

青は身体を半分起こすと、ベッドの下を覗いた。

そこには一匹のキジ猫が、前足揃えて行儀良くちょこんと座っていた。

「あ、猫だ」

キジ猫は緑の大きな目でじつと青を見ていた。

「ここにも猫がいるんだ！ 可愛いや……」
手を差し出して触ろうとした瞬間……。

「当たり前だ！」

「……」

——ね、猫が喋った——っ？

「ええええ！ 猫が、猫が喋った——っ！」

真ん丸い緑の瞳が、真っ直ぐ青を捉えている。

「ええええ？」

「浮島は科学が進んでいて凄いと聞いていたが、言葉を喋る猫がいるなんて聞いてないぞ！」

初めての相手に何度こういうリアクションを取られたか分からない

いき猫は、うんざりするように青を見続けた。

「僕の名前は、シャーロット・V・バーディー」

「猫なのに名前は鳥か？」

あんなに驚いたのに、突っ込むところは見逃さない青だった。

「うるさい！ 僕の半分は人間だ！」

「……」

青は目を丸くして、バーディーを見たあと吹き出した。

「あはははは、どこが人間だってんだよ！ 猫まんまじゃないかよ！」

青の言葉に傷付いたのか、いきなりバーディーは大きな瞳を潤ませた。

「だから一介の人間は嫌いだ！」

泣きそうな顔をしている、猫なのに……と、青は心の中で突っ込んだ。

「わ、悪かったよバーディー。泣くなよ」

「泣いてなんかいない！」

口元を真一文字に結んで、どう見ても大粒の涙を零しながら、バーディーは泣いてないと言った。

「泣いてるじゃないか」

「泣いてない！」

今度は嗚咽おえつとともに大泣きし始めた。

「わ、悪かったってば！ おれが悪かった！ だから泣きやんでくれよ」

「お前は僕を侮辱した」

「気位の高い猫だな」

「半分人間だ！」

「わかったって！ もう泣くなよ。それよかおまえ、おれに用事があって此処へ来たんじゃないのか？」

「そつだ。学長がお前を呼んでくるよう、僕をここへ寄越したんだ」
「早く言えよ」

青はベッドから飛び起きると、揃えられていたブーツを履いた。

「今日、僕は休日で、屋上で昼寝していた所を呼ばれたんだ。だから着替える間も無くやって来たと言っのに、お前はおれを侮辱したな」

” 青は猫が着替える？” なんて変わったことを言うのだろうかと思っただが、それ以上突っ込んでまた泣かれたらたまらないので、口に出すことは止めて靴を履き終わるとベッドから立ち上がった。

「さあ、案内してくれバーディー・バーディー」

「僕の名前を繰り返すな」

「いやー、面白いなーおまえ。バーディ・バーディー」

「こらっ！」

二人は長い透明のチューブのような廊下に出て、動く歩道に乗り移った。

ここはターミナル0メートルから100メートル上空にあつて、島が一望できる場所でもある。天に聳え立つ幾つもの鋭角の塔や巨大な建物は、だてに”学園都市”と言われてないことがわかる。

道路らしき道を車が走っているのや、エアボードで移動する生徒らしき人々が見て取れた。近くの広場ではみんな楽しそうに笑い合い、ふざけあっている。

そう、ここはまるでひとつの都市なのだ。

「バーディー・バーディー、すげえなあここ」

「あたりまえだ。ここの創立には僕のパパも関わってるんだからな」
「猫が関わってんのか？」

「アホか！ 僕の父親は人間だ！」

毅然と言い放つも、バーディーが悲しそうな顔をして外の景色を見ていたので、不可解だらけの人間発言に、後で瑠華に説明してもらった方がいいと判断した青は、それ以上突っ込むことは止めたのだった。

重厚な扉の前に立った青は、バーディーに言われた通り名前を告げた。

すると何かを照合するような微かな音がして扉が開いた。

「すつげえ」

「本来ならデータに登録している者は自動で扉が開くんだけどね、君は外部の者だから今あらゆるデータをあそこで取られたんだよ」中にはまだ小部屋があり、秘書の女性がにっこり笑って二人を迎え入れた。

「ごくろうさま。バーディー」

「こんにちは、アリシア」

「中へどうぞ、学長がお待ちかねですよ」

扉が自動で開き、窓を背にして机に座っている人物がすぐ目に入った。

恰幅が良いがっしりとした体格で、ちらほらと白髪が交じる黒髪で、背広を着て大きな椅子に座っている。

バーディーに促されて一歩前に進んだ所で、その側に木教官が立っているのに気がついた。

「あ……」

「やあ、青くん。体調は良くなったかい？」

木はリラックスさせるよう青に話しかけた。

教官としては無く、スカイ・ポリス本部の真新しい特殊部隊の制服を、始めて間近に見た青は、今まで木を恨んできた恨みを差し引いてもかなり格好いいと思った。

「はい」

「そうか、良かった」

木はそう言って微笑んだ。

「木教官から聞いたよ、青くん。今回君はかなり活躍してくれたんだってね」

いきなり学長に話しかけられて、その体格の良い人間的な器量と正比例する太い低音の声域に、この学園を取り仕切る相応しさを感じた。

「一般市民の君を巻き込んだことは、とても遺憾だと思ってるよ。しかし、我々は本当に君に感謝しているんだ。今、木君に聞いたんだが、君はこの学園を三度受験したんだって？」

「……はい」

「今年も受けるのかね？」

「いや。もう諦めたよ。今回自分がみんなと一緒に戦って、どんなに無力なのか思い知ったんだ。もう受験はしないよ」

悔しいけど認めたくない事実であった。

「おや？ 私は木君から君が念力を使って、木をなぎ倒したと報告されたんだがね？ それに体力も気力も十分だと……」

「え？ ……おれが？ ……」

そんな長い夢を見ていたような気がする……。

あれは夢じゃなかったのか？

「なんだ覚えてないのか？」

木は苦笑いして青の顔を覗き込んだ。

「えーと、上空二千メートルでおしっこチビリそうになった事や、海底のお宝の事は覚えてるんだけど……あー……っ、それよか、おれのお宝は？」

青は急に思い出して、全身のポケットというポケットをまさぐった。

「ないー……っ」

「悪いけど、あれは没収な。無線でも散々こねていたようだけど」
木はニヤリと笑った。

” 聞いていたのか！” 青はがっくし肩を落とした。

「そういう事は覚えていて、自分の使った能力については覚えてないのかい？」

「……うん。なんかさあ、手をこうして翳して”枝よ折れる！”って言ったら、バキバキ折れた気がするけど、あれは夢で見たんであって……」

「夢だって？」

木は声を立てて笑った。

「あれが夢だと思ってたのか？ 三日間も眠ると忘れてしまうものなのかな？」

まだ笑っている木を見て、青は試験会場で渋い顔して立っていた木のイメージがかなり崩れた。

容赦ないほど厳しい人だと思ってたのに、目の前の木は大笑いしている。

「お前、大物だな」

バーディーが横で呆れて言った。

「うるせつ、猫に言われたくねえや」

「僕は人間だ！」

「まあまあ二人とも、学長の前だぞ静かにしなさい」

苦笑いの木に窘められる。

「話しは戻るが、もう君はこの学園に来ることが嫌になったのかね？」

「そりああ来たいさ！……でも、もう諦めたんだ」

「そうか、残念だのう、今年の編入生に推薦しようかと思ったのに……」

学長の言葉に、青とバーディーが硬直した。

「す、推薦だつてよ青……」

バーディーはさぞかし感激してるだろうと思い青の顔を見上げると、案の定まだ驚いたままの青は微動だしないで学長を見ていた。

「良かったな青、頑張った甲斐があった」

木が青の肩を叩いた。

「どうした？ 念願叶って呆然としたか？」

「あのさ……、す、すいせんって何だ？」　「へんによう」　「って？」

「おまえな……っ！」　「へ・ん・に・ゆ・う」　「！」

バーディーが叫んだ。

「お前は、かの有名な才色兼備な重形瑠華の弟だと聞いてるぞ！
血は繋がってないのか？」

「バーディー・バーディー殴りたいか！　正真正銘、あいつはおれの姉ちゃんだ！」

「なのに弟はこんなバカか……」
「てめえ！」

青は拳をバーディー・バーディーの目の前に突き出す。

「まあまあ、落ち着きたまえ。推薦ってのはね青君。実技を免れてそのまま入学を許可されるってことだよ。君は確か十三歳だったよね？　一応は二学年に編入するが、成績次第では放課後居残りで補習授業を受けることもある。ここでは世間並みに学力も重視するから馬鹿にしてはいけないよ、成績が万が一、一学年レベルに達しないと判断されたら、新入生と肩を並べて勉強することになる。しかしね、年二回の編入テストを受ければ、どんどん飛び級できて上級クラスに上がることができる。その例がバーディーだ。彼は三年前にこの学園に入学したが、あつと言う間に大学院まで進級して、今は開発研究部所属だ。相応しい者にはどんどん進級してもらうよ」
学長に褒めてもらって、バーディーは鼻高々に微笑んで青を見た。
「おまえ、すげえんだなあ……」

さっきまで犬猿の仲だった青に尊敬の眼差しを向けられ、バーディーは素直に嬉しかった。

「おまえも解らない事があつたら、何でも僕に聞け！」

「お、おおおれかあ？　おれ本当にここの生徒になれるのか？」
青は涙目で木を見た。

「そつだよ。君を推薦したのは僕だからね、だてに君の試験官を3年も続けてないよ。今までだって君の身体能力の高さは十分把握し

てただけだね、君のお姉さんの持つ力を知っていたから、血筋としてその能力が絶対開眼すると信じて待っていたんだよ。今回君は命の危機にさらされた極限の緊張状態で、その能力が開眼されたんだと思う。何も特別なことではなく、それはありがちな話なんだけど、でも、学園としては何時までも開眼しない生徒を、先を見越して時間と労力、そして費用をかけて受け入れるほど甘くはないそれに、ここの学生は戦闘の最前線で戦う事になるから、どうしても体力だけでは勝負にならない。世の中には色々な凶悪犯がいるって事を、今回君も身をもって体験しただろう？」

「うん。マジ恐かったよ」

「そうだね。あれが君らが将来対決する本当の敵だ。特殊能力を使うから逮捕、連行はとても困難なものになる。だから君らも特殊戦闘部隊に入りたいと思うのなら、日々能力、肉体ともに訓練し、より一層強くなる必要があるが、やはり中には志半ばで自分の能力に限界を感じて、学園を去って行く者もいることは事実だ。その他、ここはあまり知られてはないが生物兵器に対する研究室もあって、学部は違うがそちらに進む者もいる。能力次第で未来への選択は様々なだと思っいていい。わかったかな？」

「うー」と、なんとなく」

青は苦笑いした。

「まあ、そう言うことだ。君を我が学園に快く迎える事にした。一ヶ月後には入学式があるが、君は編入生として扱うから特別なことは何も無いんだが、ここの生徒は一学年から校舎や寮の建物が変わるで、入寮式があるんだよ。その時にまた会おう」

「はい」

青の満面の笑顔を見て、学長は椅子に深く腰掛け微笑んだ。

この日を境に青の運命は果てしなく変わり行くのだった。

「どう思われます？ 学長」

青とバーディーが去った学長室で、微笑みながら木が訪ねた。

「なかなか大物振りを発揮しおるな、ここに来て何も臆する事なく突っ立っておった」

「姉の瑠華と違って、四年間放置された分伸び伸びと育ち過ぎたくらいはありますが、彼は本気で今年の受験を取りやめるつもりじゃなかったですよ」

「四年目にして漸く開眼しおったか……」

「彼が育つとかなりの率先力になると思います」

「先が楽しみだ……。それより例の男の件はどうなった？」

「はい。テレポーターには逃げられましたが、後の二人は拘束して自白術を施してますが、余程、強力な術を掛けられてるとみて間違いないです。なかなか口を割りません」

「近頃、不穏な空気が漂っておるから気をつけるんだ」

「はい」

「まあ、どっちにしろ賑やかになりそうだな」

「そうですね」

二人は用心深く微笑むのだった。

「良かったな青」

「ありがとうバーディー・バーディー、夢みてえだ」

二人は学長室からエレベーターに乗って、夕闇迫る学園都市を見下ろしながら下降していた。

「今回、君がかなり活躍したのは聞いたよ。シオを守ったんだってね」

「……かな？ あいつはそうは思っていないかも知れないなあ」

あの時の、上空で怒っていたシオの顔が浮んで、僅か数日前の出

来事なのに、懐かしさを覚えて微笑んだ。

「そんな奴じゃないよ、シオは……」

バーディーも青を見上げて微笑んだ。

「あ、ほらシオだよ！」

バーディーが射した指の先を見ると、十五メートル程の中庭を挟んだ真向かいのエレベーターに乗った、シオとオルがガラス越しにこちらを向いて上昇して来るのが見えた。

バーディーが立ち上がって彼らに手を振ると、バーディーと傍らにいる青に気が付いて、二人は一瞬驚いたような顔をしたが、トオルは二本指を額に当てて微笑み、シオは相変わらず無表情だったが、丁度、お互いのエレベーターが同じ高さになった時、青を見ながら口角を少しだけ上げた。

上下するエレベーターの中で、絡み合った視線は否応なしに離れたが、再び彼らに会うことができると思うと、ヴェルミヨン色の夕日を頬に浴びながら、青の心は夢と希望に弾むのだった……。

― プロローグ・秘められた能力・編 ―

E N D

16・飛行艇に乗って

――学園の怪人編――（前書き）

――学園の怪人編――

「じつちゃん！　じゃあ行つて来るよ！」

青は神殿の執務室で、橘神官と禰宜^{ねぎ}、そしてセザール先生を前にして挨拶をした。

国立特殊能力学園から、二週間前に正式な入学許可証が送られて来て、それまで半信半疑だった青に明確な希望の光が灯ったのだった。

今日は学園に旅立つ日に相応しい晴天で、輪郭をプラチナ色に輝かせた入道雲が、もくもくと沸いては青い大気に消えて行く。

そんな輝かしい朝だった。

青の横に並んで立っていた瑠華は、執務室の窓からそんな空を眺めながら遠い過去を思い出していた。

『……そう言えば、私たちがここに来た日も、目が覚めるような青い空だったっけ……』青はまだ幼くてあの頃の記憶は全く無さそうだが、それが良かったのか悪かったのか、今の瑠華にはまだ判断のしようが無かった……。

「頑張つて学業に励むのじゃぞ」

「まかせとけて、じつちゃん！　おれ偉くなってじつちゃんや禰宜、セザール先生を守つてやるから！」

その言葉に普段はとても厳しい禰宜とセザール先生は涙ぐんだ。手を焼かされた子ほど可愛いものだ……。

「瑠華もわざわざ青の迎えにここまでご苦労じゃったのう、お前も元氣そうで何よりじゃ」

「神官さま、今まで本当にありがとうございました。これからは二人して精進して参ります」

「何を言うのじゃ、これまでもこれからモウシはお前らの後見人じやからの、何かあったら何時でもここに戻つて来るがよい」

「じつちゃん、おれはちよくちよく帰って来るからな、瑠華は恩知らずだからちつとも顔見せなかったけどな……」

「何を言ってるんです、毎月ちゃんと連絡を入れて来てましたよ、あなたの様子を伺う為にね」

セザールが瑠華を庇って言った。

「え？」

先に学園に上がった瑠華は、何となく青と顔を合わしづらかったのだ、何時までも経っても青は受験に受からず、能力も一向に開眼しない……、半ば自棄になりつつある弟に、面と向かって掛ける言葉が見つからなかったのだ……、だからそつとセザールに連絡を乞うていた。

隣で背筋を伸ばして真っ直ぐ立っている姉を青はチラリと見た。

しかし、何時もとは違うおちゃらけ無しの無表情で、あまりにも淡々として立っているの、なんだか今日は拍子抜けするのだった。

「さあもうお行きなさい。飛行艇に乗り遅れますよ」

セザールは時計を見た。

午前八時半を少し回った所だ。

三人に見送られながら、瑠華と青は深々とお辞儀をして執務室を後にした。

「お前らさあ、いいのにこんな所まで見送りに来なくても」

みんなには学校で一通り挨拶をして別れたものの、空港までセイと誠、竜二までもが見送りに来てくれた。

何時もならエア・ボードで走る距離だったが、今日は瑠華が迎えに来ていたし、空港の中までエア・ボードでは入りづらかった事もあって、みんなでメトロに揺られてやって来た。

しかし、メトロの中でも元氣良く振舞ってはいたが、それでもいつもと比べてみんなの口数は少なく、空港に着いてもどこことなく表情は沈んでいた。

巨大空港の一角、ガラス張りの天井を飛行機が縦横無尽に飛んで行くのが見えた。

ここからはシリウス流星群にある惑星まで、飛び立つ長距離の飛行艇が出ているせいもあって、大勢の人でこった返していた。

空港内には幾つものレストランや売店が数多くあって、迷子になりそうになる。

アナウンスは浮島にある”学園都市”第二ターミナル行きの、登場案内をし始めた。

「青、もう行かなきゃ……」

瑠華が静かに言っと、青は頷いた。

「みんな元気だな」

「青も、頑張れよな！ あんなへなちよこ軍団に負けんなよ」

竜二がニヤリと笑った。

「おう！ 任せとけっ！」

「たまには帰って来いよ」

セイは微笑んで言ったが、その横で誠が泣き出したので、微妙に表情が崩れて泣き顔になった。

「何だよ誠……、セイまでさ……」

そう言う青も又、涙を浮かべている。

「寂しいよう青……」

セイが本音を漏らすと、青も誠も、竜二までもが泣き出した。

「あんたたち！ いい加減にしなさいよ！ 男の子でしょうが、今生の別れでもないのよ、メソメソ泣かないの！」

瑠華はそう言って、俯いたみんなの頭を小突いて回った。

「痛てーよ姉ちゃん！」

「それに、忘れてないでしょうね？ これからが大変なのよ、入学しても厳しい授業に付いて行けずに辞めて行く子だっているんだから、あんただって何時ここへ戻ってくるかも分かんないのに」

「縁起でもないこと言っなよ」

「事実を言っただけだよ、だから寂しいだなんて言って、ここでビー

ビー泣いてる場合じゃ無いってこと！」

「相変わらず瑠華は厳しいなあ……」

竜二が苦笑いした。

「でもさ、俺らも分かっていたさ、何れ青は学園に行くだろうって……」

みんなが頷いた。

「なんでさ？」

驚いた顔して青が尋ねた。

「何となくさ……、そんな予感……って言うのかな」

そのとき初めて竜二とセイ、誠と一緒に微笑んだ。

青が涙を溜めた顔で微笑み返した時、最終搭乗案内のアナウンスが流れた。

「じゃあ、行くよ青。みんなも元気でね」

「うん、瑠華姉ちゃんも！ 憧れの制服姿見せてくれてありがとう」

「どう言う意味よ竜二」

「だって、滅多にNSAPの征服って見られないんだぜ、しかも女性徒の制服なんてさあ、写真撮っていい？」

「……たく！ あんたは、エロおやじか！ 行くよ青！ あんた

がバカなのはこいつらのせいだってやっと分かったわ」

「そりゃないよ瑠華姉ちゃん！

「じゃあね、小僧たち」

瑠華は三人に手を振ると、何時まで経ってもそこを動こうとしない、青の首根っこを掴んでゲートを潜った。

チューブの中の歩道に乗ると、さっき通って来たゲートはあつと言う間に小さくなって、三人の姿は見えなくなった。

瑠華がチラリと青の顔を見ると、こらえ切れずに大粒の涙をぼろぼろ零している。

確かに気が付くといつもセイや誠は側にいたし、竜二さえ幼少の頃からの同窓生で、兄弟のように喧嘩したり笑いあったりして仲良く育って来た。

彼らが別れを悲しむのが分からないでもない瑠華だったので、先立って飛行艇に入ると席を探して窓際を譲る。

「青、隣には誰もいないみたいだからリュックは席に置いたらいいわ」

「うん……」

まだセイたちを探しているのだろうか、向かい合わせの席で、青は外を見ながら虚ろな返事をした。

この飛行機は高速船では無いが、ほんの三十分ほどの飛行時間で第二ターミナルに着く。そして、現実でありながらも非現実な場所に足を踏み入れる事になることを、嫌でも青は自覚するだろうと思うと、怖いようなわくわくするような不思議な高揚感に胸躍らせる瑠華だった……。

「いい加減にしなさいよ青、あんたそんなに泣き虫だったわけ？」

声こそ出さないが、一生懸命こらえても溢れ出る涙が止まらない青を、半ば呆れながらも瑠華は持っていたハンカチを渡した。

「うるせえ……」

「そろそろスイッチ切り替えなさい。直ぐに学園都市に到着するわよ、そしたら目が覚めるほど驚くようなことが沢山あるんだから、泣いてなんかいられないわよ。第一、今日はルームメイトとの初顔合わせでしょう？ そんな泣き顔で会うつもり？」

青は瑠華に渡されたハンカチでごしごし顔を拭いた。

「誰と一緒に知ってる？」

「知らない……」

瑠華は青が目を合わせないことを尻目に、さぞや驚くだろう青の顔が浮んで、密かにほくそ笑んだ。

「誰か知ってるのか？」

「知らないわよ」

それは嘘だったが、ここでは思い切り惚けた瑠華だった。

「十三歳から本校に校舎を移すことは聞いているでしょう？ 高等部までの六年間は全員同じ寮、そして同じ校舎を使うのよ。部屋もほ

ば同じ面子で六年間過ごす事になるだろうから、ルームメイトとは仲良くしないと、きつい学園生活を送る事になるわよ」

良く見ると、周りには学園の真新しい制服に身を包んだ、新入生と見られる生徒が何人かいて、一様に緊張した面持ち、或いは期待に胸を膨らませているかのように、高揚した顔で両親と思しき人と話をしていた。

青は私服だったが、身の回りの物は瑠華が揃えて既に寮の部屋に置いてある為、今日は夕刻のディナーを兼ねた入寮式と、ルームメイトとの顔合わせだけだったので、一旦部屋に戻って着替えても十分な時間はあった。

飛行艇が静かに浮き上がり、徐々に速度を増すにつれ、神殿があったオリン岬はあつと言う間に、模型のように小さくなって行った。「今日は正式な部屋の移動日だから、賑やかだと思うわよ」

「え？　だって六年間一緒じゃないのか？」

「初等科を卒業した子は今まで学んでいた校舎や寮を出て、新しくこちらに移ってくるのね。私が今年移動したのは三年生と四年生の変わり目、つまり三年に一度はルームメイトの見直しがあるのよ。

勿論、上手く機能している部屋はそのままだけど、中には不協和音奏でる部屋も当然あるわけ、そんな人たちの為の見直しとも言っているかしら……。新入生は今まで初等科から一緒だったみんなも、より専門的にバランスよく部屋を配置されるのよ。そして上級生になるほど寮の部屋は上層階に移るから、この時期は毎年大移動で大変なのよ。単に下級生が上の階になるのが癪なだけの風習みたいなものだけだね」

「何？　機能って？」

「私たちは隊を組んで戦闘、移動するでしょう？　何よりもチームワークを重視するわけ。その訓練と言うか、将来の為に今の内から仲間意識を強めることが目的なのよ」

青は分かったような分からないような、どうでも良さそうな顔をしていた。

「まあ、今からそんなこと言っても無理よね。とにかく、一生懸命勉強することね、あなたは既にみんなから数年遅れを取ってるんだから」

「うん。任せとけて姉ちゃん！ おれ直ぐに追いついてみせるさ」
そう言つて窓の外を見る、さっきまでの泣き顔にもう涙は無く、決然とした微笑さえ浮かべて、漏れてくる太陽の光に目を細める青を見て、瑠華はもうどんな心配もしていなかった。

17・青のともだち（前書き）

― 学園の怪人編 ―

17・青のともだち

飛行艇はあまりに振動も音も無く、静かにステーションに着いたので、巨大なターミナルビルが目の前に迫って来なかったら、操縦ミスでビルに激突するのではないかと思える程に、到着ゲート前で滑らかに停止した。

そして、飛行艇の扉が開いて外に出てみると、高い天井には無数の立体広告が空中で揺れていて、ぼうつとそれを見上げていた青が、目の前の職員らしき制服を着た女性に気がついた時には、彼女とぶつかってしまった——と、思ったのに、一瞬にして彼女は消えた。

「な、なんだ——？」

『……失礼いたしました。お怪我はありませんか？』

唐突に目の前に再び現れた彼女は満面の笑みをして、アナウンサーのように滑らかな声で話しかけてきた。

「立体映像よ。ターミナルに設置されている案内人なの。返事してあげないと行ってくれないわよ」

驚いて目をくりくりしている青を見ながら、瑠華がクスリと笑ってそう言った。

『行き先がお分かりにならないのでしたら、ご案内いたします』

まるで本物のような動きや、その皮膚感覚に目を丸くしてる青を見て、“彼女”は再び話を続ける。

『どちらに向かわれているのでしょうか？』

「だ、大丈夫です……」

『そうですか。分かりました。それでは良いご滞在を』

微笑みながら彼女はそう言って去って行った。

勿論、足音さえ響かせずに……。

「すっげえ！ おもしろいなあ」

瑠華はいつまでも彼女の後姿を見送る青をせっついた。

「人間そつくりだったよ、何でも喋れるのか？」

「そうねえ知能指数は一般常識人並かしら、でも、必要なこと以外はプログラムされてないと思うわ、ここではあくまでも案内人としてゐるから、空港の施設には詳しいと思うわ。それ以外は彼女たちには実体が無いから何もできないしね」

「そつか、ロボットのようにはいかないか」

「あら、それがロボットもゐるのよね」

「えーっ、見たい！ 地上ではあまり見かけなかったぞ」

「そのうち見ることができると思うわ、学園にも居るしね。ここがどんな所か忘れてやしないでしょうね。あらゆる研究施設の頂点が集まつてるのよ、日々開発研究は進んでいるの、技術に関しては先端行かないと犯罪に対処できなくなるのよ」

程なく瑠華と青は建物内にあるショッピングセンターに出てきた。通路を挟んで無数の店が犇つぎいており、飲食店や衣料品、学園都市らしく当然文具店や書籍を扱う店など、それぞれ人々で溢れ返っていた。

明らかに青より幼いが学園の制服を着た生徒も無数にゐる。年長組は単なる買出しだろうか、着崩した制服のネクタイを緩めて、菓子を頬張りながらウィンドウを覗きこんで何やら楽しそうに話をしていた。

「姉ちゃん、おれ腹減った、ここで何か食べようぜ」

「そうね、昼食は出ないからここで食べて行こうか」

店内は見たところ学生で賑わっており、青が先立ってカフェに入ろうとした時、後ろから聞いたことのある声がした。

「おまえ！ 無視かよ！」

その声に振り向くと、カフェのウィンドウに凭れて一人の少年が立っていた。

学園の制服を着ていたが、短めの茶色い髪の色した少年の記憶が青

には無かった。

少年は青を見て言ったにも関わらず、知らない顔なので青は無視して再び店内に身を翻した。

「こらっ」

仕方なく青は振り向いた。

「しつこいなあ何だよ、誰だ、てめえは……」

「呆れた奴だなあ、折角ここまで迎えに来てやったのに」

「だから誰だよ、てめえは」

「青、彼はバーディーよ。シャーロット・V・バーディー。会ったことあるでしょう？」

「えええ！ 何だとお？ おれの知ってるバーディー・バーディーは猫だったぞ」

どう見ても目の前の少年は人間で、青と年格好は似ているが、この前の猫とは似ても似つかない……。

少年は大げさにため息をついて頭を振った。

「だから言っただろう。僕は半分人間で半分猫だって……」

「人間じゃないか！ ほんとうにあの時の猫かあ？」

そう言いながら、青はバーディー・バーディーの頬を掴んだり、髪の毛を触ったりして感触を確かめている。

「マジか？」

「瑠華……このバカどうにかしてくれる？」

耳を引っ張られながら、バーディー・バーディーは瑠華に助けを求めた。

「ああ、この前会ったって言ったのは猫の時だったのね、じゃあ驚くのも無理ないか……。この子ったら、さっきから立体映像のお姉さん見ては驚き、興奮してるんだもの、田舎物でごめんねバーディー」

瑠華は気の毒そうな顔をバーディーに向けた。

「すげえなこいつ、猫になったり人間になったり、自由にできるのかあ？」

「そうだよ。主に街に出るときは人間になるよ。じゃないと、やはりお前みたいに驚く奴が多いからね、それに、猫だと都合悪いだろう……」

「いいなあ、おまえ面白れえ！」

嬉しそうな顔して、青はまだバーディー・バーディーの頬を摘んでいる。

「瑠華の頼みだから、こいつの案内役を受けたんだからね」

しつこい青の手を鬱陶しそうに払って言う。

「うん。悪いバーディー、あなたの好きなレモネードおごるからさ、店で一休みしましょう」

瑠華はそう言ってカフェに先立って入って行った。

窓際の席に座ると、店内からは空を飛ぶ飛行艇が行き交う姿を見ることができた。

そして、ビルの間を縫うように進む無数の楕円形モビルカーが、前後の距離を上手に取って走っていた。

きっと全てが制御されているのだろう、統率の取れた制御都市だ。「私は炭酸入りアップルジュースとバーディーはレモネードね、青は？」

テーブルに浮かび上がったホログラムの立体メニューを見て、青は難しい顔をしていた。

「なんかよう、変なものばっかだぞ、」惑星一号の涙粒入りミックスジュースとか、」大地から取れた炭酸石入りオレンジジュースとか……なんだよこれ」

「そっか慣れないうちは分かりにくいわよね、単純にメニューに書いてある通りなんだけどね。」大地から取れた炭酸石入りオレンジジュース」は単に炭酸入りオレンジジュースと違っていいの、青はそれ好きでしょ」

「うん……」

「じゃあ、炭酸入りアップルジュースとレモネードに、炭酸石入りオレンジジュース、それと」ハムとマッシュルームのポテト・ケー

キ”を三人前ください」

「誰に言ってたんだ？」

「これよ」

テーブルの隅にある小さな青いランプを指差した。

それは高感度マイクで、横のボタンを押すと声を拾ってくれるので、普通に喋るとオーダーが完了する。

『かしこまりました。少々お待ちくださいませ』

ランプが消えて注文が終了した。

「バーディーありがとうね。わざわざここまで来てくれて」

「僕はいいんだ。君みたいに忙しく無いからね、瑠華はもう部屋は移動したのか？」

バーディーが尋ねた。

「勿論よ、今朝早く移動したけど、青を迎えに行かなくちゃいけなかったんで、まだ荷解きできてないの。青の制服や教科書とか必要なものは買い揃えてあるけど、バーディーが何か気が付いた物があれば買い足してあげてくれる？ 男の子の物は良く分からなくて……。それに私はこれからまだ新入生を迎えに行かなくてはいけないの」

「大変だなあ瑠華は……」

バーディー・バーディーが関心している所に食べ物とドリンクが運ばれてきた。

「瑠華それよかさあ、おれたち金あるのか？」

「何よいきなり」

瑠華は噴出した。

「だってさ、国立学校と言えども無料ではないって聞くぞ、それに制服だとか寮の費用だとか……」

「あんたさあ、心配するのが遅すぎない？ 呑気にも程があるわ。あのさあ、私たちが孤児だとしても何にも親からの遺産が無かったわけじゃないのよ。両親が残してくれていた遺産は、神官さまが私たちの後見人としてしっかり管理して下さってるの、だから私はこ

うしてここで学ぶことができての、まあ、確かに国立学校だから費用は微々たる物で、殆どが無料なんだけど。あんたは何も心配すること無いのよ」

「じゃあさ、おれの小遣いは？」

青は安心したのか目を輝かせて瑠華を見た。

「そうね、もうあなたとのIDは登録できてると思うけど、ここでは誰も現金なんて持ち歩いて無いの、買い物は機械に手を翳すだけであなた本人と認識されるから、月末に請求引き落とし通知がくるのよ。でもあんたの場合、私が見える上限設定してあるからよく考えて使うのね」

「ちっ、抜け目の無いクソ女だ……」

「じゃないと使いたい放題使うでしょボケ」

「なんだと、クソブス！」

「バズーカ級のウルトラ・バカ」

食べながらの悪口の応酬にバーディーは苦笑いする。

「瑠華、完全にキャラ変わってる……」

「みんなさあ、私にどんなイメージ持ってるわけ？ 時々、言われるけどさあ……」

「黙ってれば超お嬢様……」

そこで瑠華と青は急に意気投合したかのように、顔を見合わせてガガガガハと大笑いした。

「あり得ないわよ」

「うん。あり得ない、あり得ない！ 瑠華がお嬢さんなんて」

「悔しいけど、それは認めるわ。だってねえ青……」

「……だよな、姉ちゃん、笑える」

瑠華の自他共に認める幼い頃からのお転婆振りを思い出して、二人は苦笑いを隠せなかったが、バーディーには彼らが仲が良いのか悪いのか、顔を見合わせて笑っている二人を見て判断しかねたが、しかしそれは兄弟がいないバーディーにとって、少しばかり羨ましかったりするのだった……。

慌しく食事を終えた瑠華と別れて、青とバーディーは取り合えず学園の寮に向かう事にした。

足りない物にしても、見てみないことには瑠華が何を買ひ揃えていたか、わからないからだ。

ターミナルを出て、モービルカー乗り場にやって来たふたりは、程なく横付けされた銀色の車に乗り込んだ。

ゆったりとして向かい合わせのシートは横三列で、ふたりの他は誰も居ず、向かい合わせで席に着くと程なくアナウンスが聞こえてきた。

『行き先をどうぞ』

「セントラル学園前、B2棟ラウンジ5へ」
バーディーが告げる。

『かしこまりました。凡そ10分の乗車です。』

土地が狭い理由もあって、ここ学園都市では建物は超高層だ。どのビルも優に百階は越えているだろう。勿論、学園も例外ではなく、幾つかのビルの中に教室が犇っていた。

そして、寮もしっかり……、見晴らしが良いのでどうしても上級生の特権で、高学年になるほど上の階になるのだ。

青はモービル・カーが上空をゆっくり進むので、少しばかりの恐怖を交えながらも、その絶景とも言える景色を堪能できた。

「何かさあ……、すげえよここ……、地上とは世界が違うよ」

すっかり見入ったまま、浮島の光景に圧倒されて言葉が詰ってしまふ青だった。

「都会と言うか……、次元が違うと言うかさあ……」

「僕は君の住んでた地上に憧れるな……、海は透明で青いんだよな」

「ああ。それはもう息を呑むくらい綺麗さ。おまえ泳いだこと無いのか？」

「……うん。僕はここで生まれて、ここから一度も出たことないよ

……。知ってるのは無機質なビル群と、他人行儀なホログラムの案内人ばかりさ……」

少しばかり自虐的にそう言って、窓の外に目を移したバーディーの横顔が、悲しそうに曇ったのを青は見ていた。

「じゃさ、今度の休暇におれと一緒に岬に帰ろうぜ、そしたら洞窟も案内してやるし、海で一緒に泳ごう」

「……本当？」

青に向きなおしてバーディーは瞳を輝かせた。

「うん。おれが友達連れて行くと、じっちゃんも喜ぶしさ」

「ともだち……」

バーディーが怪訝そうに青を見た。

「なんだよ？ おれと友達嫌なのか？」

「僕、青の友達か……？」

驚いて見開かれた瞳はじつと青を見ていた。

「あつたりまえじゃん！ 何言ってるんだよ」

青はいつもの屈託ない笑顔で笑ったが、バーディーが半泣き顔で、今にも涙を零しそうなを見て焦った。

「な、なんだよ！ そんなにおれと友達になるのが嫌なのか？」

「……ちがう。……しょうがないなあ、じゃあ友達になってやるよ青……」

バーディーは零れ落ちる涙を拭いながら、一生懸命笑顔を作って笑った。

「てめえ、どつちなんだよ！ 嬉しいのか、嫌なのかはつきりしろ！」

そう言って、バーディーの頭を小突く青だったが、今度の休暇にはバーディーを連れて帰ると決心を固めていた。

そうこうする内に、モービル・カーは寮の入り口に到着した。

本来なら部屋の近くまで乗り付けることができるが、今日は入り

口で入寮の書類手続きをしなければならぬからである。

どこもここも吹き抜けの天井は高く広々としていて、学生寮と言えども一流企業のラウンジのように、ソファもテーブルも一級品で揃えられていて、高級感と言うよりも品良く設えてあった。

どうやらこの案内人は本物の人間らしく、青を見つけると靴音を響かせながら三十台半ばのスーツを着た綺麗な女性が側にやって来た。

「入学おめでとう重形青くん。私はこの寮の寮監主任のミラ・アンダーソンです、よろしくね」

微笑んだ彼女は隅にある受付のテーブルへ案内すると、腕時計のような四角い機械が付いた物を渡した。

「前回、治療でここに来られたときに、あなたの生態サンプルを徴収してあるから、今日はもう格別することは無いのよ。バーディー、あなたが彼を案内してくれるの？」

「はい。アンダーソン先生」

「じゃあこれを……」

恐ろしくアナログな紙に印刷された、青の部屋の？や注意事項が書かれた用紙を渡された。

「彼を部屋に案内して頂戴ね。道すがら身分証の説明もしてあげてくれるかな？今日は私も本当に忙しくて、手が回らないのよ。君がいたら安心だわ、お願いね！」

「はい。わかりました」

挨拶もそこそこに、先生は玄関に到着した次の新生生に向かって歩いて行った。

受付でどっしりと座って待ってればいいのに、態々側まで駆けつけて生徒に挨拶するなんて、相変わらず先生らしいとバーディーは微笑んだ。

ふたりはエレベーターに乗り込むと、バーディーはアームバンドの説明を始めた。

「右左どっちにしてもいいんだよ。それにはあらゆる機能が詰って

るから、絶対に落とさないようにね、まあ、一度はめるとなかなか外れないようできてるけどね。水に濡れても全然大丈夫だから」

「これ何？」

「まず、君のIDが入ってる。身分証だね。それから通信機能、TV機能、授業スケジュール、とにかくいろいろ、後で説明書読んで自分好みにカスタマイズするといい、ちなみにそのバンドの色も変えることができるんだ」

「へえ……」

青が腕に嵌めて弄っている所に、扉が開いて男の子がひとり入ってきた。

大きなボストンバッグを持っているから、彼もまたどうやら移動らしかった。

黄土色の短い髪の毛の中央が、スタイリングなのか自然なのか分からないが立っていた。

彼は青の私服をチラリと見たが、別に何も言わずに壁に持たれた。そして、程なく次の階で二人の男の子が乗り込んで来る。

「あ、バーディーじゃないか」

ひとりの男の子がバーディーを見つけると、嫌な薄ら笑いを浮かべて言った。

何故かバーディーの顔色が変わる。

「猫人間のバーディーか？　そういや最近見かけないと思ったら、まだ学園にいたのか？　父親と一緒に失踪したのかと思ったぜ」

少年たちはへらへらと口の端を残忍そうに歪めて、バーディーを見下したように笑っている。

バーディーは顔を真っ赤にして、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

なんだなんだ、こいつら？

青は顔を上げて少年達の顔をマジと見た。

ひとりの少年と目が合った。

「何だよ、てめえ、ガンつけやがって……新入生か？」

金色の短髪の男の子が、横柄な態度で青に向き合った。

「だったら何だよ……、新入生で悪いか」

「青！」

彼らに絡むと面倒なことになるのを知っているバーディーが止めに入る。

「いい度胸じゃないか、ここでは先輩に逆らえないんだぜ、知らないようだから教えてやるよ」

少年は青の胸倉を掴んで、壁に押し付けた。

しかも、それだけでは無いようでじわじわと首が絞まってゆくのは、きつと念力だろうと青は思った。

「先輩、すみません。僕が悪いんです、彼に色々教えとかないといけなかったんですが、すみません」

バーディーは必死で謝ったが、少年の瞳から残忍さが消えることは無く、見せしめのように青の首はさらに絞まってゆく……。

二人組みの少年の片割れがバーディーを押さえつけたと思ったら、いきなりお腹の辺りを膝蹴りした。

「うぐっ……」

呻いてバーディーはその場に崩れ落ちた。

そんな一連の出来事を静かに見守っていた、最初に乗り込んできた少年が持たれた壁から姿勢を正した時、丁度エレベーターが指定の場所に止まりゆつくりと扉が開いた。

その時、素早く身体を捻って肘鉄を食らわした青は、少年が怯んで数歩下がった隙を見て、彼のお腹に足蹴りをした。

蹴飛ばされた彼は外で待っていた学生の群れに突っ込んで、彼らと一緒に将棋倒しでその場に崩れ落ちた。

外でエレベーターを待っていた他の生徒は、扉が開くなりいきなり人が飛んできたので、呆然とその場に凍りついたように立っていた。

青はエレベーターから降りてくると、金髪の少年の側に立って彼を見下ろしながら言った。

「誰だろうと、おれの友達を侮辱する奴は許せねえ！」
ガツンと先輩に向かって一言そう言い捨てると、その場を後にした。

18・ルームメイト（前書き）

― 学園の怪人編 ―

18・ルームメイト

セド・タイガはエレベーターの中で一連の出来事を客観的に見ていた。

元々、彼の性分は売られた喧嘩以外は興味無いからである。

しかし、新入生だろうが……私服のあいつは、凡そ学園の事には疎そうだったが、怖いもの知らずでしかも度胸があった。

久しぶりに面白いものを見たと、微笑を浮かべたのが気に入らなかったのか、殴られた少年の相棒に睨まれた。

「タイガ……何が可笑しいんだよ」

「別に……」

「てめえも、いつまでもナメてんじゃ……」

タイガに近寄ろうとしたハナリ・コウの後ろから、戻ってきた青の身体がぶつかったので、とっさに避けたタイガの真後ろのガラスに彼はしこたま頭をぶつけた。

「あ、悪い、あんちゃん！ 躓つまずいちゃったよ」

「てめえわざとだろうが！」

青はふと手を動かして上空で止め、そしてゆっくりその手を降ろして頭を搔いた。

その動作に殴られると勘違いしたコウは身構えた。

「ほら！ バーディー・バーディー案内しろよ！ どこだよ部屋は！ どっち行けばいいんだよ」

目を丸くしたままエレベーターの床にしゃがみ込んでいた、バーディーの手を取って立ちあがらすと、青は彼の背中を押して先に歩かせ、通路の人垣が二つに別れて彼らを勇者のように崇める視線の中を歩いて行った。

さっきの出来事が頭から離れないバーディーは、オートウォーク（動く歩道）から外の景色を見下ろしている黙り込んだままの神妙な顔の青を見て、先輩に足蹴りを食らわすなんて、青でもやはり気にしているのだろうかと不安になった。

「青……さっきは……」

「バーディー……、おれさあ、おしつこちびりそうだぜ……」

悪寒がしたのかぶるっと身体を震わせて、手すりを両手で握りしめた。

「あ、青……？」

拍子抜けする青の言葉に、バーディーは笑いがこみ上げてくる。

青ってばどうしようもなく、面白い奴だ。

さっきまで上級生相手に、堂々と渡り歩いたかと思えば、今はへなへなのぐだぐだ……。

そして、泣きべそを掻いている。

「おれ高い所苦手なんだよ」

思いつきりへっぴり腰で、窓際から胸が引けていた。

「あれ？ お前さっきの……なんか用かあ？」

青は五メートルほど後ろで手摺に凭れている、エレベーターで一緒だった少年に気がついて言った。

「……別に、おまえに用はねえよ」

「そっか」

そう言うなり青は手摺を押さえ、手を伸ばしてぶら下ったまましやがみ込んだ。

「ねーねー、まだかよう……まじトイレ行きてえ……」

「なんでおまえはそんなに急変するんだ！ 今のおまえはぐだぐだぞ！」

「寮も学園も高すぎる！ しかもガラス張りの窓だらけで、空を歩いているみたいでさあ、おれヤダここ」

手摺は絶対放すものと死守している。

しかも涙目で……。

「ほら、着いたよ」

バーディーはそう言いながら、青の服を掴んで一緒にオートウォークを降りた。

すると、タイガも一緒に降りたので、バーディーはさつき先生に貰った紙をポケットから取り出して確認する。

「そつか……、君……」

バーディーが言い終わらないうちに、タイガは部屋の前まで歩いて行くと、彼を認識した装置が作動して重厚な扉がゆっくり開いた。「彼と同じく、君もこの部屋のようなだよ青」

「そつか？ …… って、トイレ、トイレ！」

青はそんなことなどどうでもよく、タイガもバーディーも差し置いて、中へどこかと入って行ったかと思うと、トイレを探して駆け込んだ。

「マジトイレ行きたかったんだな……」

騒々しく青がトイレに入ると部屋は静寂に包まれ、中には誰も居ないようだった。

タイガは真っ直ぐ勉強部屋に歩いて行くと、自分の机を探して持っていたバッグの中から教科書を取り出して棚に並べ始めた。

二つずつ勉強机が背後に並んだ勉強部屋、隅に小さなキッチンを配した広いリビングと、浴室と洗面所、そしてリビングを挟んだ反対側にベッドルームが設えられていた。

四人部屋とはいえ確かに普通の寮よりかなり広く贅沢な作りだ。

そしてベッドルームは角部屋なので、恐らく青が怖がるほどに窓が広く明るい。

バーディーは寮に入ったことが無かったので、初めて見る部屋はとても物珍しかった。

他のルームメイトはまだ到着していないようだが、荷物はそれぞれ指定の場所に置かれていて、主を待っているばかりのようだ。

程なく青がトイレから出て来ると、ベッドルームを改めて見渡し、怖がると言っよりその絶景に驚いて感嘆の声をあげた。

「すつげえ！ この部屋からオリン岬が見えるぞ！」

「良かった。君が怖がるかと思ったが……、心配なさそうだな」

「あそこでおれは育ったんだ！ ここから見えるなんて思ってもなかったよ」

丁度、青のベッドは窓際にあつて、小さな岬を眺めながら眠ることができそうだった。

「今度、連れてってやつからな」

青は振り向いてバーディーを見ると微笑んだので、バーディーもその笑顔に勇気付けられ、ちよっぴり涙ぐみながらも嬉しくなつてコクリと頷いた。

そして、いつまでも窓から離れようとしない青に、机の前で荷解きをしているタイガに挨拶をするよう勧めた。

「そうだな」

あつさり青はベッドから降りて、タイガの側に歩いて行つた。

「おれ重形青、よろしくな」

タイガは顔を上げて青を見た。

「ああ」

彼は無表情でそれだけ言つて、再び作業に専念した。

青も格別気にした風も無く、自分の椅子に座ると机の上に置かれた教科書の山に目をやった。

バーディーはその上に置かれた購入リストをチェックしながら、殆ど揃つていて他に買い足す必要が無いのを確認する。

「流石、瑠華だよ。学用品も制服関連も全て揃つてるから安心していいよ」

その時、部屋の扉が開いて一人少年が入つて来た。

何故だか、後ろにはポーター三人も従えていて、それはどれくらい荷物の数だ。

「あ？ あれ……？」

青が少年を指差した。

「あ……っ、おまえは！」

薄い青灰色の髪をした少年も驚いて青を指差した。

「……てか、誰だっけおまえ……？ 顔は何となく覚えてるんだけどさ……」

青がそう言うのと、少年はがつくし肩を落とした。

「おまえなあああ！ 俺はナイガ・トオル！ 覚えとけ！ 重形青！」

「そうそう！ おまえあの時の！ 海でおれより先に救出された奴だな！」

「てめえ重形青！ あれはお前があつさり術を掛けられて海に落ちたからだろう？ 誰が助けに行っただと思ってるんだよ！」

「……うん、まあなあ……」

青はポリポリと頬を掻いた。

「お前がここにいてるってことは……もしかして……もしかして？」

「へへん！ おれ今日からこの学生になったんだ！ おまえ、おれのルームメイトなのか？」

嬉し恥ずかしそうに、青が微笑んだ。

「ええええっ、お前と一緒になのかあ？」

トオルはがつくし頂垂れて、自分の机に両手を着いた。

「坊ちやま、この荷物どこに置きましょう？」

ポーターの一人が尋ねた。

「適当にクローゼットに仕舞ってくれないかな、殆ど洋服だから……」

……

「はい。わかりました」

ポーターはそう言っ、トオルに一礼するとベッドルームへと入って行った。

「おまえ、金持ちの坊ちゃんなのかあ？」

トオルは高慢ちきな顔して、青を見ながら鼻で笑った。

仕方なくバーディーが説明する。

「ジェネレル・コーポレーションって知ってる青？ 世界銀行の創立者はトオルのお祖父さんなんだよ」

「すげえ、トオルは金持ちなんだ」

——でも、青はトオルがどれほどの金持ちなのかは理解していないとバーディーは思ったが、そんな事にあまり興味なさそうな青の前で、あえて説明をする必要も無いだろうと判断して、詳しい話をすることはやめた。

「ところで君は確か、シャーロット・V・バーディーじゃないのか？」

トオルが尋ねた。

「うん。そうだよ」

「見たことある顔だと思った。十二歳にして君はもう大学院に進学してるんだよね？ どうしてここに？」

「僕は今年十三歳になるよ、君よりひとつ年下なんだ。そう大学の武器開発部門で研究してる。瑠華が研究室に所属してる関係で、青の世話を頼まれたんだ」

「瑠華？ ああそうか……、青は瑠華の弟だったな」

その時、トオルにタイガの姿が目に入った。

「タイガ！ また一緒なんだな、よろしくな」

十三歳までは広い寝室で大部屋だった為、タイガとトオルは必然的に顔を合わせていて、知らない仲では無かった。

タイガはさつきと同じように「ああ」とだけ言った。

「ところでさあ、もうひとり居るんだろう？ ベッドは四つあるんだけど？」

青が素朴な質問をした。

「そろそろ……」

トオルがそう言いかけた時、まさに扉が開いて、外から一人の少年が入って来た。

「えええー！ー！？」

彼を見るなり、トオルと青は驚きの声をあげたので、タイガまでもが顔を上げてその人物を見た。

「おまえか!？」

トオルと青が同時に叫んだ。

「リグラス・シオ！」

そして、その声にアイス・ブルーの瞳が不快そうに二人を見返した……。

19・羽交い絞めされる青（前書き）

―― 学園の怪人編 ――

19・羽交い絞めされる青

「……なんだよ」

みんなの視線を一身に集めたシオは入り口に立ったまま、いつも通りぶつきらぼつにそう言った。

灰色のブレザーにネクタイを緩めた出で立ちで、両手をポケットに突っ込んだ彼もまた鷹揚にみんなを見返している。

この前の黒い戦闘服とは雰囲気が全く違う、ソフトで温い制服姿に緊張の欠片も見当たらず、白金に輝く長い前髪が眠そうな瞳を半分隠していた。

「おまえか？ 最後のルームメートって？」

驚きと、嬉しさが混ざったような顔して青がシオに言った。

なんてったって青にとっては、トオルもシオも始めて一緒に戦った仲間であつたから、それはもう嬉しくしょうがない。

「おまえ……、誰だっけ……？」

真面目な顔したシオに言われて、今度は青が落ち込む番だった。

「ちえっ、薄情な奴だ、おれが死ぬ思いして助けてやったのにより、忘れちまったのか？」

そう言いながら、ふて腐れる青の頬にある傷を見て”痕が残ったのか……”と、シオはぼんやり考えていた。

エレベーターで最後に見た日は、その頬にテープが張られていたが、それよりも印象に残ったのが、希望に満ち輝いていた青の目がシオには焼きついていていた。

噂で青が編入するだろうと聞いていたからかも知れないが、初めてあの度胸にあの体力、そして未知なる能力の可能性を、学園が放っておくはずがないとシオは思っていた。

何しろオリン岬の森林公園を滅茶苦茶に破壊した張本人だからだ……、あれはシオも上空で見たがロケット弾が落ちた爆風地点を差し置いても、青が真つ二つに折った大木の数は数十本にのぼり、すっかり公園の景觀が変わった程だ。

そして、学園が国立なので青本人への厳罰は、辛うじて免れることができたのだった。

「ハハハハハ、忘れられてやがんの」

トオルは笑ったがシオは笑ってなんかいなかった、寧ろ眉間に皺を寄せて険しい顔をして青を見ながら言った。

「冗談だよ、重形青……」

「だろう？ だろう？ 当然さ！ おまえがおれの名前を忘れるはず無いだろう？ 命の恩人なんだぜ」

青がそう言っても、シオの眉間は緩まない。

「ちげえよ、お前……、あの時、オレが撃たれてたのも肩を脱臼してたのも、知らなかっただろう……」

物凄い形相で、綺麗な顔を歪めて青を睨んでいる。

「撃たれたのは知ってるけどさあ……、だ、脱臼？？？ それは気が付かなかったなあ……」

「気が付けよ、てめえ……」

額がぶつかる距離で、シオが青にガンつけていた。

青は間近でシオの瞳を見ながら、本当に綺麗なブルーでこんな色見たこと無いと思っていた。

「でも、元気そうじゃん」

「あたりまえだ！ あれから何日経つてると思ってたんだ！」

「そつだよなあ……」

気のない返事をしながら、青は鼻を穿ほじっている。

「ま、よろしくな」

青はにこにこしながら、鼻に突っ込んだ指でシオの肩に手を掛けたが、思いつき振り払われた。

「汚いだろ！ てめえ、触んな！」

「機嫌悪いなあ、これからずっと一緒にいたいじゃないかー、仲良くやろうよ」

「うっせえ」

シオはそう言い残して奥のベッドルームへと向かったが、その後姿に何気なく青は呟いた。

「おまえ顔だけじゃなく、性格も女みたいなのか？」

その言葉に反応したシオは、青の目の前にいきなりテレポートしてきて、強烈な頭突きをくらわし、……そして、一瞬にして消えた。「痛ってつつつ、あのやろう……今のは反則だろう」

余程痛かったのか、青は両腕で頭を抱え込むと床に蹲ひづった。

これで全員揃ったようだ……。

青の飄々とした性格は、どうやらここでもやっていけそうだと思つたバーディーは、寂しいような羨ましいような奇妙な感覚に囚われた。

バーディーは彼らを全く知らない分けではなく、タイガとトオルは九歳で入学した年の一年間は一緒に勉強をした仲だ。

それから一気に飛び級を繰り返して、あつと言つ間に大学院まで進級してしまった為、バーディーの周りはいつも年上ばかりで、人間の姿をしていても見た目が、絶対的に幼いバーディーは友達を作ることが難しかった。

だから、今から学園生活を送ろうとしている青が眩しく映り、この季節、新入生や青のような編入生を見かけるたびに、少しばかり飛び級を後悔するのだ……。

シオは時々バーディーの所属する研究室に現れた。

そこはテレポーターに対して学園への侵入を防ぐ為、或いは捕獲方法などを日夜研究開発する部門だった。

学園ではテレポーターに関する学術的なことに秀でる教授は稀で、寧ろシオほどの能力者はスカイ・ポリスに数名いるだけで、しかも彼らテレポーターは戦闘能力に長けているので、たいがい任務に就いていて教官としてここに来るのが難しく、授業がままならないの

が現状で、シオは研究に協力することで単位を貰える仕組みになっていた。

しかし研究はテレポーターに限らず、あらゆる超能力者に対して行われており、開発と同時に能力者も切磋琢磨し合いながらその結果、いたちごっこのように新しい技術の阻止と突破を繰り返していた。

シオとバーディーは普通に話をしたが、それは技術的なことに限られていて、友達と言うほどでは無かった。

まあシオは元来人をあまり寄せ付けない性格ではあったが……。

程なくトオルの使用人がベッドルームから戻って来たが、来たときと同じ数のトランクを持っていた。

「それでは坊ちやま、クローゼットは整理いたして置きました。トランクは持つて帰りますね、狭くて収まらないようです」

「ああ、ごくろうだったな」

本人は気にしてないだろうが、いっばしの領主さまのように腕を組むと、自分より何倍も年のいった使用人に頷いてみせた。

「それでは、我々はこれで失礼します」

「うん。ありがとう」

彼らはトオルに頭を下げると、ブランド物のトランクを数個抱えて部屋を後にした。

「じゃあ青、僕もこれで帰るよ。明日の授業に必要な物は机のスケジュールボタンを押すと出てくるよ。今から夕食まで時間があるから、それまでに揃えておくといい。あ、それと今夜の夕食はちゃんと制服を着て行くだ。制服はクローゼットに入ってるからね。何かあったら連絡してきて、さっき瑠華と僕の連絡先をインプットしておいたから」

そう言つて、バーディーは腕の機械を指差した。

「ああ、ありがとうバーディー、じゃ、またな」

青は手を振ってバーディーを送った。

彼が居なくなるとすることが無くなった青は、机の椅子に腰掛け、てくるくると回りながら、四人部屋とは言え十分すぎるほど広く、設備の行き届いた快適な部屋を見渡した。

どうやら青の背中合わせで後ろの机はシオらしく、青と同様まだ片付けられて無いので教科書が高く積まれたままだった。

そして、通路を挟んだ隣の席がトオルの机、対角線にタイガの机という配置で、彼らもまだ教科書や参考書類を棚に片付けている。

急に思い立った青は、足元に置いてあったリュックの中からマルを取り出し、机の上に置いた。

「あーまた持ってきてやがった、汚いぬいぐるみを」

トオルが背後で言うが、別に気にも留めない青は、それから徐に教科書を片付け始めた。

「無視かよ」

「トオル、おまえあれから見かけなかったけど、ここに帰ってきてたのか？」

「何だよいきなり……」

それについてトオルは少なからず心が痛んでいた、何故なら、あんな戦闘態勢の中、素人の青を残して自分だけ帰還してしまったのだから……。

「あの時は悪かったよ。俺が先に護送艇に乗り込まなけりゃ、おまえはあんな危ない目に合わなくてすんだのにさ……、ほんとあの時、もう駄目かと思っただぜ……」

「それについてはおれも、あの”怒りん坊”に感謝してるんだ、奴が来てくれなかったらほんとヤバかったんだよな」

「誰が”怒りん坊”だった？」

振り向くと、寝室から上着とネクタイを取ったシオが出て来て、自分の椅子にドサッと乱暴に腰掛けた。

こいつはほんとにその繊細な見かけと、口と態度の悪さが違いすぎると青は思う。

” しかも直ぐにキレルしなあ……” と、言葉にしたら殴られそうなので心で呟く。

「でもさー、こいつ直ぐにあの能力者に眠らされちゃってさ、おれがどんなに苦勞したか知りやしないのに、怒ってばっかだ。少々ピストルで撃たれたって、脱臼したって我慢しろってんだ」

青は笑いながら再びクルクルと椅子で回っていた。

「……おまえ、まだ頭突き足りないか？」

睨みを利かせてシオが言うも、青は幼い子供のように天井を見上げながら、回転し続けていた。

「折角ポケットに入れて命がけで持ってきた、金貨や宝石も没収されるし……」

「お前、あれほど注意したのに持ち出して来てたのか？」

トオルが目を丸くして言った。

「うん。ポケットに入れておいたんだけどさあ、ここでおれが眠ってる間に服を洗ったらしく、バレて没収だとさ……。惜しいことしたなあ……。こんなだったら飲み込んでおくんだった」

「……絶対、馬鹿だコイツ……。どっちにしろ見つかるだろうに、ナメてんなここの科学技術を」

呆れ果てたトオルは青を見たが、張本人はどこ吹く風でまだ椅子をクルクル回転させて遊んでいる。

「いい加減にしろ！　そうやってぐるぐる回られるとイライラする」
シオが足で青を椅子ごと蹴ると、床を滑ってリビングまで転がって行き、それが面白かったのかまたやってくれと向こうでせがんでいる。

「あいつバカ過ぎる……」

トオルはこれからの授業のことを思うと項垂れた。

ルームメイトはチームメイトなのだ。

何事に置いてもチームワークが要求されるスカイ・ポリスでは、それが一番重要なことであるから、トオルがこのチームの行く末に不安を感じるのは至極当然のことであつた……。

「ウルトラバカめ」

そう言って、さつきから自分の名を呼ぶ青を無視して、シオは教科書の整理を始めたのだった。

学園の寮だけでもエスカレーターは常備7基稼動していた。

寮と言ってもここは立派な高層ビルディングで、マンションと言っても良いくらいいい全部屋が機能的に設えられていた。

主に学生寮となっているこの高層ビルは、全部ではなく教授も何人か住んでいて、何百人が絶えずビル内を移動している。

特に食事時のエスカレーターの混雑は、今でも年功序列で下級生は階段を使う羽目に時々なる。

上の階の上級生から先に乗り込むと、どうしても下の階の生徒はあぶれてしまい、満員になった時に各層のボタンが押されていて、決して扉は開かない構造になっていたが、空いてると判断された場合は扉が自動で開く、よって、たちが悪い上級生は中が空いていたとしても、わざと下級生を乗り込ませはしないのだ。

丁度、青を真ん中に右にトオル、左にシオと並んでいる扉の前に、上から降りて来たエレベーターの扉が開いた。

そして運悪く、昨日エレベーターの中から外へ青に吹っ飛ばされた、トロエ・ミキとその相棒ハナリ・コウが目の前に立っていた。

十二人乗りのエレベーターには、彼らの他に数人しか乗っていない。

すぐ青に気付いたふたりは、薄く残忍な笑顔を返した。

「これはこれは、昨日のチビ助じゃないか。これに乗れると思っているのかよ」

ミキが腕組みをして立っていた。

——が、しかし、青は無視してドカドカと中に入り込むと、トオルにネクタイの結び方を教わろうと、必死で俯いて格闘している。

「ねーねートオル！ 結んでくれよ」

青は首からネクタイを垂らして、トオルの前でひらひら翳している。

「おまえ、ネクタイの結び方くらい習っておけよ!」

「シオでもいいからさあ、頼むよ!」

「撃つぞ」

シオは鬱陶しそうにそう言い捨てて、青に背中を向けた。

タイガは既に鬱陶し気にそっぽ向いたままだ。

「こら、てめえ! 無視すんじゃないよ」

とうとう痺れを切らせたミキが怒鳴った。

「うつせえよ、あんちゃん! おれ今そころじゃないから」

頭ひとつ分背の高いミキに向かって、青は真顔で見上げた。

「ふざけてんのかおまえ!」

「あんちゃん誰?」

「誰だと?」

ミキの顔がより険しくなる。

「何? おまえ何かやったのか?」

トオルが不審そうに尋ねた。

「知らねえ……、あれ? もしかしたら昨日ぶつとばした奴かな」

タイガは真顔で尋ねている青が、すっかり昨日の相手の顔を忘れていたのが可笑しかった。

「えええ?! ぶつ飛ばした?」

トオルが悲鳴に近い驚き声をあげた。

「ふざけんじゃねえぞ、クソガキ!」

そう言っただけ胸倉をミキに掴まれた青だったが、別に慌てたそぶりもなく上級生を見上げて言った。

「あんちゃん、懲りてないの? またぶつとばされたい?」

「何だとてめえ!」

ミキが殴ろうと拳を振り上げた瞬間、青もまた彼の腹向けてパンチを入れようとした、その動作を察知した、タイガがミキの肩をわし掴みし、シオが青の首を腕で締め上げて、二人を一気に引き離し

た。

その防御のジャストタイミングは、タイガとシオの運動神経が抜群に良いという他ならない。

一触即発の重い空気の中、トオルとコウの二人は呆然とその場に立ち尽くしていた……。

「てめえ、殺すぞ……」

青の耳元で静かに、そして脅すように囁いたのはシオだった。

首が絞まって声が出せない青は、真っ赤な顔して手足をバタつかせている。

「先輩……、ガキ相手に本気になんないてくださいよ」

肩を押さえつけた相手を見ようと振り向いたミキに向かって、タイガが低い声で呟いた。

シオに劣らずドスは利いていたし、そして、細めた目が切れそうに怖いと覆えるのは、タイガの能力を知っての事で、この状況では上級生と言えども彼に逆らうのを躊躇ためらしてしまう。

監視カメラもある事だし、ここは大人しくした方が得策だと踏んだミキは、それでも悔しそうな顔して腕を下ろした。

「まあ、ここはお前に免じて許してやろう……」

ミキは肩を動かして、タイガの手を忌々しそうに払った。

そしてタイガはトオルを見て言う。

「さっさとそいつのネクタイを結べよ、煩くてかなわねえ」

「そうだな。——ったく、こっち向きな、食堂に着いちやうよ。身だしなみは基本だから入り口でチェック受けるんだよ」

シオは青をトオルの前に突き飛ばした。

「痛ってえなあ、おまえほんとうに乱暴だな……、だから結んでくれと、さっきからみんなに言ってるのにさあ？ 聞いて無かっただらう、なあ、なーあー」

「うるさい！」

タイガとシオは、同時に叫んだ。

20・食べ物の恨みは……自分を恨め（前書き）

― 学園の怪人編 ―

20・食べ物の恨みは……自分を恨め

校舎と寮のビルの間にある食堂は、まるで空中に浮んでいるように、両側から細長い通路で繋がっていて、おまけに天井がガラス張りだったので上からエレベーターで降りて来ると、中の様子が丸見えで学生たちがざわめく姿が見て取れた。

青たちを乗せたエレベーターは、丁度、その連絡通路を前に降りてきて扉を開けた。

高所恐怖所の為に窓際を拒んでいる青は、どうしても通路の真ん中を歩くので、シオやタイガ、そしてトオルを従える格好になっている。

「何だよてめえ、寄って来んな」

肩が当たってシオが文句を言う。

「だから言っただろう！ おれ高い所ダメなんだよ！ なんでここはどこもここもガラス張りで、外が丸見えなんだよ！」

「だからさつきから真ん中を陣取るんだな、エレベーターの中でも廊下でも」

トオルがマジ顔で言った。

「なのにな、こいついきなりおれを三千メートル上空まで連れていきやがって……おしっこちびるかと思った」

「チビったら、ボコボコだったな」

平然とシオは言う。

「血が出てる」って悲鳴あげていたのは、どこのどいつだ「シオが？」

凡そ信じられないと言うような顔をしてトオルは彼を見た。しかし、その当の本人はその日二度目の頭突きを青にした。「痛ってーーーーーっ」

再び頭を抱える青……。

「ニュアンスが違っただろうが……」

「どこがだよ！　こら、てめえ、待ちやがれ！」

スタスタと先を歩いて行くシオの後を、叫びながら追う青を見ていたトオルが言った。

「なんかこのルームメイトやばくない？」

何気なく言った一言に、タイガの目がチラリとトオルに注がれた。

「トオル、お前が言うか？」

「……え？……」

タイガは真顔でそう言っただけに進み、どう考えても意味がわからないトオルは、ルームメイトの後姿を再び見送るのだった…。

食堂の天井はガラス張りで、青が想像していた通り茜雲の隙間から、夜の帳前の星が瞬いているのが見えた。

”　うつひょ、中から見ると空中でご飯食べてるみたいだ！　怖いけど楽しいや”　青が空を見て感嘆していると、横から制服を引っ張られた。

「早く着席しろ、田舎者」

トオルにそう言われて渋々席に座る青だったが、まだ辺りをキョロキョロと見回している。

ここでは学年別に長いテーブルがずらりと並び、部屋ごとに向かい合わせで座るよう配置されていた。

正面には横に先生方がズラリと並んでテーブルに着いていて、学者肌っぽい先生から曲者の風な教授まで揃っているが、中にはスカイ・ポリスの制服に身を包んだ木や、他の実践担当の先生が数名いた。

全員が着席すると壮観で、どこに誰がいるのかさっぱりわからない。

「そう言えば、おれは編入生だけど、おまえらも寮の部屋は変わっ

「たんだよな？」

青が隣の席で澄まして座っているトオルに尋ねた。

「そつだよ。学年があがるにつれ部屋の階層も上がるんだ」

「面倒だな、毎年上に移動だなんて」

「しょうがないよ、やはり上層階は見晴らしがいいし、何より上級生が下級生に見下ろされるのは面白くないからね」

「ああ、さっきの奴らみたいなのが文句を言いそつだ」

「まあ彼らみたいなのは稀なんだけどね。ここでは能力がものを言う世界だから、本来はお互いを尊重し合うからみんな仲は良いんだよ。十歳以下の子だって物凄い能力を持つてる奴なんかいるしね、侮れないんだ。それに上級生が下級生の面倒を見るプログラムもあって、十二歳初等科の6年生になると、カリキュラムで上級生との訓練が開始されるんだよ。持ちつ持たれつ皆そついう風にして次のステップに進んでゆくんだ」

「なんだ、だからみんな知り合いなんだ」

「カリキュラムで一緒になったことがない上級生でも、校舎にあるカフェテリアやこの食堂は同じだから、少なくとも顔は知つてたりする」

「だからおまえは瑠華や莉空さんを知つてたんだな」

「——と言つか、俺を知らない奴はいない？」

トオルは眉を上げてニヤリと笑つたが、青はその意味を理解できない。

「なんで？」

真顔で聞かれて、”世界銀行の創立者の孫を知らない奴がいなくて無いかと”口に出したいほど呆れたが、所詮このバカに説明してもピンとこないだろうと思うとすつかり諦めた。

「めんどくさい、もういいから、おまえは百年死んでろ」

「なんだよーっ、さつきまで親切に教えてくれてるのかと思つたら……」

その時、丁度壇上に学長が上がつて行くのが見えたが、青は話を

終わらせるつもりはなく、真顔でトオルを見て言った。

「トオル……、おまえってさ、良い奴なんだか悪い奴なんだか、わかんねえ奴だな……」

「そっか？」

学長が壇上に立つと生徒から拍手が沸き、横で微笑みながら手を叩くトオルを見やった青は”ちえっ”と言うと、つまらなそうな顔して前を向くのであった。

「学生諸君、今日は移動日で大変だったと思う、特に一年生、新しい寮はどうかね？ 大部屋だった初等科とは違い、四人部屋になつてずっと快適さが増したと思う。君たちはこれからより専門的、より本格的な訓練が始まるが、それは今回のルームメイトとのチームワークに関わってくるんだ。現在のルームメイトは各部屋の能力、力を総合的に見て均等になるよう配慮されている。特別授業以外チームは変わることが無く、ほぼ今のメンバーで授業が進むと思うてくれたまえ。まあ、今更私が言わなくても知っていると思うので、上級生は新生生のサポートをよろしく頼むよ。厳しい訓練が続くだろうが、みんな目標を持ってここに來た勇士たちと思っている。挫ける事無く頑張ってくれたまえ。とにかく、入学、進級おめでとう」
学長がそう言つて手を挙げてながら頷くと、満場の拍手が鳴り響いた。

そして、大勢の給士係が一斉に厨房から現れたかと思つたら、テーブルに料理の皿を置き始めた。

次から次へと並んだ料理は美味しそうな丸焼きの肉だったり、揚げ物だったり、とにかく青が見たことも無いような、凄く豪勢で食欲をそそる料理に違いなかった。

「みなさん！」

青が料理に見惚れている間に、学長に代わり四十過ぎの女性が壇上から笑顔で生徒たちを見下ろしていた。

「教頭のオロンです。早くお食事をしたいのは分かりますが、配膳が終わるまでの間、少し話を聞いてくださいね。新入生の中には編

人生も何人かいますので、注意事項を言っておきます。先ほど、早瀬学長が言われた通り、ルームメイトはそのままチームメイトに直結します。能力以外の基本科目は別としても、その他は全てチームの得点となって成績に考慮されます。校内での喧嘩、能力の使用は禁止、もし、違反した者がいれば即刻罰の対象となり減点されますので、みなさん気を付けて下さい。それでは、私からの話はこれで終わりです」

言い終わるか言い終わらないかのうちに、みんなは目の前の豪華な食事を前に再びどよめいた。

「すつげえなあ！ これ、どんだけ食べてもいいのか？」

「あたり前だ」

トオルが静かに言ったが、前の席のシオとタイガはさっきから黙ったままで、フォークを取ろうともしない。

しかし、初めての料理を前にそんなこなどかまっつてられない青は、皿の底が見えなくなるまででんこ盛りに食べ物を乗せている。

「なんだ？ 食べないのか？ おまえら」

その時、再び壇上に戻ってきた教頭が言った。

「あー、すみません。言い忘れましたが、二年生の重形青、リグラス・シオ、ナイガ・トオル、セド・タイガ、そして四年生トロエ・ミキ、ハナリ・コウ、マツウラ・タカシ、マイエ・ラーティン、起立なさい」

ホール全体がどよめいた。

口笛を吹いて、煽る者もいる。

そして、四年生のテーブルでミキたち四人が、二年生のテーブルでシオやタイガが、仏頂面してダラダラと立ち上がった。

「え？ なんだ？」

食べ物の前にして一向に立ち上がろうとしない青の襟を掴んで、トオルが無理やり起立させた。

「なんだよ？」

「そんな気がしていた……」

タイガとシオが諦め顔で青を睨んだ。

「どういう事？」

青は立ったまま、まだしっかりフォークとナイフを握っている。そして、みんなの視線が何時しか映し出された、上空のビジョンに釘付けになっていた――。

そこには、今日の午後ミキを蹴飛ばした映像が、ばっちり立体映像で流されていた。

「すっげえ！ 何この映像！ 立体映像だ！」

「おまえ、喜んでる場合じゃないぞ！」

ざわつき始めた場内を見回して、タオルが諦め顔で言った。

そして、映像はさっきのエレベーターの喧嘩に移り、シオに羽交い絞めされた青が写しだされた。

「……もしかして……まずくねえか？……」

嫌な予感が頭を掠めた青は、呆然と映像を見ながら呟いた……。

「ちゃんと話は聞いていたか……流石のお前も、理解できたらう……」

……

前に立ったままのシオが、これ以上ないほど冷たい目をして青を見ていた。

「この者たちの所業により両チームの評価Gは免れません、そして今夜の食事は抜きです。即刻退場なさい」

教頭が壇上の上で高らかにそう告げると、やんややんやの野次馬喝采あたりは歓声に包まれた。

「まじかよー……っ！」

みんなが注目する中、テーブルを離れるシオとタイガに続いて、タオルも出て行こうとしたが、何時まで経ってもテーブルを離れようとしない青の首根っこを掴んで、ズルズルと引っ張って行く。

「おまえ、ナイフとフォークを離せ、みつともない！」

「まじまじまじ？ 飯食えねえの？ あんな豪勢な食事なのに……」

……

「自業自得だ」

入り口に居た寮監が気の毒そうな顔をして青を見た。

彼女は青が再びミキたちと喧嘩しないよう見張りも兼ねている。

青から取り上げたナイフとフォークを彼女に渡したトオルは、まだ青の首根っこを掴んだまま、シオとタイガが乗り込んだエレベーターに慌てて飛び乗った。

「マジかよ……まじまじ？ 食い物の恨みは恐ろしいんだぞ……」

「自分を恨め！ お陰でおれたちまで巻き添えを食ったんだぞ！」

「悪かったよ、だつてさ、あいつらがバーディー・バーディーをからかうからムカついたんだ！ 今晚の食事を一番楽しみにしてたのはおれだよ！ 二度としないと誓うから……」

あつさり自分の非を認められ、涙目で許しを乞われたらトオルとて、それ以上何も言えなくなってしまった。

シオは青に背を向け外の景色を見ていたし、タイガは腕組みして黙ったまま目を閉じている、ふたりに関して今の状態が怒ってるんだか無いのか、まだ良く彼らを知らないトオルにはわからなかった。

”まあ、普通は怒るよな” そう思ったが、この険悪な空気漂うエレベーターの中で、言葉にする勇氣はないトオルだった。

やがてエレベーターは彼らの部屋がある二十七階に着いて扉が開いた。

シオとタイガは先に部屋へと歩いて行ったが、トオルは青を連れてこの階にある広いレクリエーションルームへと歩いて来た。

ここは休憩室みたいなもので、大きなテレビジョンや幾つものソファ、端末機、そして壁には自動販売機がずらりと並んでいた。

「お前お腹空いてるんだろう？」

「うん……」

「こんな時は、ここで買うことができるんだ。メニューがあるだろう、このメニューボタンを押して、センサーに手をかざせば数秒後に暖かい食べ物が出てくる。何食べたい？」

サンドウィッチからハンバーガー、パスタ類から麺類、揚げ物、ほぼ普通の食べ物をこの機械は網羅しているようであった。

「ハンバーガーかな……」

トオルはハンバーガーのボタンを四個押して、機械に自分の手をかざした。

「いいよ、おれがおごるよ」

流石に申し訳ないと思った青は、トオルに申し出た。

「別にこれくらいどうってことないさ、おれ金持ちの坊ちゃんだし」
そう言って、トオルはニコツと笑った。

普通ならム力つくところだが、なんだか今は腹が立たなかった青である。

「ほら持つてな……」

トレイの上にバーガーを四つと、チキンやポテト、それにジュースをそれぞれ四個ずつ、食べきれないほど次から次へと載せている。
「もういつか……早く帰らないと、あいつら先に何か食べるかもな」
そう言って、最後のジュースをトレイに乗せ終える。

当然、それを持つつもりなど全く無いトオルは、ポケットに手を突っ込んだまま青の前をスタスタと歩く。

「おまえいい奴だったんだな……」

後ろからそう声を掛ける青は、目には涙を溜めて鼻水をすすっている。

「おまえ、汚いなあ！ 鼻水垂らすんじゃないぞ！」

「うん……」

そう言いつつも、ズルズル音を立てている。

まあ、両手が塞がってるからどうしようも無かったが……。

「まあなあ、しょうがないか……おまえとは腐れ縁だし」

「——と言うか、こいつには命を救われたんだし……感謝はしているんだぜ」トオルはふとそんな事を思った。

あの洞窟から海への脱出で、始めて「死」が間近にあることを知り、そして底知れない恐怖も感じた……。

なのにあのピンチをこいつは飄々《ひょうひょう》と切り抜けた。そう、なんだか生きることに関して、こいつは羨ましいくらいにとっても遅いのである。

トオルの顔に思わず笑みが零れた。

「あ……」

「何だよ……」

嫌な予感に、先に歩いていたトオルが振り向いた。

「鼻水が落ちた……」

「おまえ！ 食べるよそれ！ 落ちたやつ、おまえが食べるよ！」

誰もいない長い通路で、トオルの悲鳴に似た甲高い声が木霊した。

「私が今期、君らにバイオ科学を教えるスミエ・グラです。バイオ科学と言っても、まだ君らにはピンと来ないだろうけど、この授業では多細胞生物の細胞や組織の一部を人工的な環境下で育て、新しい生物や植物を作ったりします。あらゆる細胞の仕組みを理解してこそ、君らの能力にも貢献し、又は遺伝工学的にもとても重要である為、非常に研究が盛んな分野でもあります……」

隣の青が大あくびをしたのを見て、トオルが机の下で足を蹴る。

『痛っ』

『真面目に聞け』

声に出さずに口を動かした。

しかし、数秒後、再び青を見ると口を開けて目を閉じていた……、今度は寝ている……。

ため息を吐いて、トオルは前を向いた。

”バイオ科学”ってなんだあ？ くらいの知識しかない青は、さっぱり理解できない故に臉が重く押し掛かってくるのだ。

しかし、そんな青など無視して教壇ではまだ三十過ぎの若い先生の話が続いている。

彼は長年この研究室でバイオ科学の研究に勤しんでいる独りであり、若いにも関わらず国の代表として各国で講義を受け持つ若きエリートだ。

そんな彼の話が聞けるだけでもありがたいのに、タイガに至っては机に突っ伏して寝ているようだし、確かに青で無くても難しい内容イコール退屈の方程式が成り立ちそうな、授業のひとつと言つて過言では無さそうだった。

午前中は主に国語、数学、社会、理科といった基本一般教育がメインで、午後になってそれぞれの実地訓練に入る。勿論、その中に

は体力強化を狙った体術や武術といったものも含まれる。

トオルにとって評価をあげて主席で卒業すると言う事は、偉大な祖父そして父に認められることにもなるので執着はあるが、タイガを揺すり起こすほど勇氣は無かった。

”まあ、今年一年様子を見るしかないな……、それで、このチームがどうしようも無いと思った時には部屋を変えてもらおう……”
トオルは密かにそう思っていた。

「つまんねえー、おれどうしよう」

「何が？」

なんやかんや言いながら、次の授業が行われる教室へと、青と仲良く肩を並べて廊下を歩いているトオルであった。

「つまらな過ぎて、授業に付いていけない」

「だろうなあ……、お前は野生児だからじつとしていられないんだろうよ……。しかし、聞きな。ここに入っただけには全てにおいてチーム分けされている。お前が頑張らないとみんなに迷惑かかるんだからな、わかってんのか？」

「一般科目は別だろう？」

「そう、別だよ。だけど一般教科も頑張らないと落第するよ。俺たちはどんどん進級して、お前は落第してそのままでもいいのか？何時まで経っても卒業できないんだぞ」

「それは駄目だ！ お前は早くスカイ・ポリスに入りたいんだ」

青はふるふると頭を振って否定した。

「だろ？ だったら頑張れ。ま、俺はおまえのことなんて別にどうでもいいけど。迷惑さえ掛けられなければ」

「出た。てめえの本音が」

「当然だろう。お前のせいで授業が始まる前から評価Dだぜ。怒らないほうが不思議だろ！」

笑ってはいるが冷たい目線に、青は言い返す言葉が無かった。

「あいつらも怒ってんのかな？」

前をそれぞれ歩いて行く、シオとタイガの後ろ姿を見ながら青が呟いた。

「さあなあ、俺には分かんない。でも、いつもあんな感じだよな……、今までだってあいつらはあまり人とするまな性格だから」

確かにふたりとも朝から誰とも話していない……と言うか、誰もが気軽に話しかけられる雰囲気を持ち合わせてなさそうなのだ。

「青くんー！」

いきなり声を掛けられ振り向くと、そこには周梨子と青い髪の色をした可愛い女の子が、にこにこ微笑んで並んでこちらに来る所だった。

「やっぱり青くんだ。後姿がそうじゃないかと思ったのよね。次の授業は一緒なのね、よろしく」

「よろしくな……」

青は照れながら挨拶をした。

「この子はスガ・ノア私のルームメイトなの、よろしくね」

「こんにちは」

ノアは恥ずかしそうに挨拶をした。

「こんちわ」

青は元気よく挨拶をした。

「本当に入学したのね……、いきなりで驚いたわ」

「さっそくやってくれちゃったよねこいつ、入寮式では滅茶苦茶恥ずかしかったよ」

皮肉たっぷりにトオルが言う。

「来たばかりだもの、ここのルールを知らなくて当然よ。それにあの實力を持っていて、今まで入学出来なかったって事自体、不思議でならないわ」

「何？ あの實力って……」

「あ、そうか、トオルは先にここへ戻って来てたから見てないのね。青くんが公園の木を根こそぎ切り倒して、あの辺り一帯を崩壊した

のを……」

「うそ……」

「本当よ。木先生も驚いていたんだから……」

「そうなのか？」

トオルは驚いて確認するが、当の本人は惚けた顔で突っ立っている。

「いやゝ余りにも非現実で、疲労で目が覚めた時、おれは夢だと思っただんだよ……」

それは青の本心で、今でもそうじゃないかとふと思う。

だとしたらここに居る自分とはんだ場違いになるのだが、それについてはあまり考えてない。

なぜならここに来たからには居座ってやるつもりだったからだ。

しかし心の中にはしばし不安が訪れる、なにしろあれからあの能力を使っただけからだ……。

「じゃあ、評価Dの分頑張ってチームに貢献しろよな」

「おう！」

言うほどに自信は無かったが、元々前向きな性格ゆえ、そこは元気に返事をするのだった。

やがてみんなは渡り廊下を抜けて、防御術が行われる広い講堂へと出てきた。

そこは教室と言うより、体育館のように広く中央は開いていて、壁に沿って椅子が並べられていた。

窓は高い所にあつて、ぐるりと囲まれた楕円形の室内の壁一面は、弾力性のありそうなエアージュープのようなふわふわした素材が幾重にも張り巡らされていて、一体ここで何が始まるのだろうかとは周囲を見渡した。

――が、暫くして50過ぎの少し小太り体形の、男の教師が入ってきて徐に説明が始まった。

「やあ諸君、私が防衛術の東^{トウ}リーインだ。ここでは自らの体内に発生する因子と気を張り巡らせて、防護壁を作る訓練を教える。最初は個人の強度に差はあるかも知れないが、完全防衛壁が出来るまできっちり教えるつもりだ。これは今後、君らの活躍次第では無くてはならない物となるだろう。上級生はみんなこれをマスターして、上級試験をパスして行くんだ。馬鹿にするでないぞ。さあ、みんなお互いの手が届かないくらいに、間を空けて立ってごらん」

教科書を椅子の上に置いて、みんなは早速辺りに散らばった。

この教室というか広間には二十数人の生徒がいたが、それでも十分な広さだった。

「そして、両手を上にして手のひらの中に気を集中するんだ」

教師が手本を見せると、生徒たちが後に続いた。

「先生！」 氣” って何だ？」

「おや……、君は……重形青くんか……」

先生は青の胸にある名札を見、そして名簿を見ながら微笑んだ。

「おおすまんなあ、君は今年からの編入生だったな、簡単に説明しよう。この世には陰と陽、マイナスとプラスという対になる、あらゆる物質に存在するエネルギーがあるんだ。それら元々合間見えぬ物質を、自らの体内で因子に作り変えて完全防衛壁まで作り上げて行くのが、この授業の目的である。それは諸君らがこれから実践など、戦いの場に出て防衛の要となり、身を守る鎧となり得る。上級に上がるほど試験では完璧を求められるので、今から気を抜かぬよう頑張りたまえ、わかったかな？」

「あー…なんとなく……」

青は分かったような、分からないような苦笑いをした。

「急に言っても無理かな、初等科からの在學生はその辺り勉強しているが、編入生の君には難しいだろうね……、実践を繰り返しながら因子を作り出していく過程が理解できくと思うから、取りあえずみんなのようにやってみたまえ。君の場合は急には無理だろうから、焦らずとも良い。ゆっくり頑張りたまえ」

「はい」

青は素直に返事した。少なくともさっきのバイオ科学よりは面白そうだと思ったからだ。

「さあ諸君！ ではもう一度、手を上にして」

東先生は良く通る大きな声で指示をした。

そして彼の言う通りにできたトオルは、先生が自ら出した攻撃の“気”を身体に受けても、その場から微動だすることも、少しのダメージを受けることも無く、やり過ごすことができたのだ。

「トオルすつげえ！ これが防護壁と言うのか……」

「こんなの序の口だよ。俺たちは初等部から習ってるからね、先生も手加減してるし」

そう澄ました顔で言う。

「先生は焦らなくて良いって言ってたけどさ、俺たちすぐ実践に向かうから焦ってでも防御壁はマスターしとかないと辛い目に遭うぞ」
「どういうこと？」

「俺らは誰を相手にすると思ってんだ？ 超能力のエネルギーを^{かわ}躲すことができるのは、唯一完全防御壁なんだ。それが完全であればあるほど身を守ることが出来る。強いては仲間もね」

「そっか、わかった！ 頑張るよオレ！」

意気揚々と返事する青だったが、それから手の平に“気”を集中することに専念しても、とうとう初めての授業では何も作り出すことができなかった。

その日は、他に国語、社会、午後になって選択科目別でルームメイトとは別行動となり、武術の授業を受けて、寮に帰ろうとした所を立体映像の監視官に呼び止められた。

“彼”は空港で出会った案内係の男性版で、年も似たり寄ったり、しかし、短い金髪の髪の色をした青年で、スーツをびしっと着こなして、背が高くきりりと一部の際も無さそうに見えた。

『重形青くん、教頭室で先生が呼んでます。一人で行けますか？それとも私が案内致しましょうか？』

「あ、おれいまいち場所が分かんないんだ、案内してくれる？」

『分かりました。それでは、私に着いて来て下さい』

監視官は青がオートウオークに乗るのを確認して、同じように乗り込んだ。本当に生きているみたいに何から何まで本物っぽい。

『我々を見るのは初めてかな？』

彼にそう尋ねられて、青は自分がまじまじと彼を凝視していたのに気が付いた。

「あ、ごめんなさい。いえ、初めてではないです。空港で……」

『空港か、あそのバージョンはまだD-3NPだから、知能指数が低く道案内しかできないんだよ。そうじゃ無くて、君のいた地上にはいなかったのかい？』

「僕の育ったオリン岬はとても貧しい地区だから、ロボットとかはまったく見たことないです」

『オリン岬か、なるほど、あそこは犯罪も多い地区だ。私はX-D D7、正確にはロボットでは無いんだけどね、人工知能で僕らは動いているんだ。ほら私の頭を触ってごらん』

「え？」

青が戸惑っていると、彼は頭を低くして触るよう促した。

そつと触れて見ると、鮮明な彼の額の辺りの映像に指が通った瞬間、指が四、五センチ四方の何か硬い機械のような物に触れた。

しかも、それは空中に浮いているようだ。

『それが私の”頭脳”なんだよ、それからこの映像が送られて来ている。その”頭脳”はバッテリーの寿命が切れる百年後まで動き続けられて、私たちは肉体を持っていないから視覚で見える映像はいつまでも若いんだ』

「すっげえ！」

瞳が俄然輝きだす青を見て、監視官は嬉しそうに微笑んだ。

『勿論、いつもバージョンアップされているから、そのうち二百年

くらい生きることが出来るかも知れないよ』

そう言って、悪戯に彼は微笑んだ。

「いいなあ。面白いなあ」

ワクワクした目でＤＤＦを見ている。

『君は良い子だね』

監視官は再び微笑んだ。

「それでも無いよ。ここに来る早々、喧嘩してルームメイトに迷惑かけちゃったしさ……」

『ああ、そうでしたね。映像見ましたよ。まあ、ここは若い男の子が沢山いますからね、喧嘩なんて日常茶飯事です。私が言うのも何ですが、気をつけてくださいね、私もそういう場面に遭遇したなら、映像を記録するようプログラムされていますから』

「そうなんだ」

『君が良い子だから、教えてあげました』
相変わらず監視官は微笑んでいる。

「だから、おれは良い子なんかじゃ……」

青は今まで”良い子”なんて言われたことが無いから、微笑む監視官の前で恥ずかしくて口ごもってしまった。

『着きましたよ』

彼は教頭室のドアを開けて青を通してくれた。

『それでは青くん、また会いましょう』

「ありがとう」

青は手を振ってさよならを告げると、教頭室の中へ入って行った。

学長室ほど広く重厚では無いが、非情にシンプルでいて女性らしい教頭室に青は通された。

教頭は何かの紙面から顔を上げて、青を見るとメガネを外した。

「そこにお掛けなさい」

ベージュ色の布張りのソファは柔らかかで、そこへ座ると青はのめり

込みそうにふかふかで広がった。

教頭は書類を持ってやって来て、青の前のソファに浅く腰掛ける。
「今ね、君の編入試験の結果を学長と話していたんだけど、基本科目はまあすれ合格としても、肝心な社会科はいけないわね……。今、社会を理解しておかないと先に進んでも、全くついていけないくなると思うのよ。だから放課後、一時間ないし二時間くらい補修を受けて貰うことにしたの」

「ええええええええええ」

「あなたの為だから」

教頭は微笑んだ。

「毎日？」

「そう毎日」

きっぱりと言う。

「えええええ、マジ？」

「教授方は忙しい方ばかりだから、X・DS6に面倒見て貰うわ」

「例の人工知能の？」

「そう。彼らは実態こそ無いけど、その知能においては抜群の能力を持っているのよ。あなたが初等科までの数式をちゃんと理解できたら、その時はX・DS6から連絡がありますので、いつでも直ぐに居残りは中止します。それともお姉さまに相談しますか？ 彼女がOKならば私たちはそれでも良いですよ。瑠華さんはとても優秀ですから」

「ちっ、それだけはやめてくれよ」

「分かりました。それでは、この件はこれで、今日は疲れたでしょうから、明日の放課後から始める事にしましょう。頑張ってくださいね」

話は終わったと言うように、教頭はソファから立ち上がって自分のデスクに座り直した。

居残りと言う不名誉と、勉強という苦痛に打ちひしがれた青は肩を落として部屋を出ると、しょんぼりオートウォークに乗り込んだ。

22・不穏な東の塔（前書き）

― 学園の怪人編 ―

22・不穏な東の塔

学園での授業は青が思った以上に忙しくて、広い構内を移動するだけで休憩時間は潰れるし、カリキュラムは多彩で結構大変だ。

今日、最後の授業となるのは念力の授業で、サイコキネシス実習教室は周りを金属で壁を頑丈に覆われた、これ又ただっ広い部屋だった。

先生はクドー・陽先生で前回の洞窟の訓練でサバイバルに長けた逃走役の教官だった。

クラスには男女五人ずつ、合計十人で授業を受けることになっていて、陽先生とは初対面だった青だが、体格も良く少し長めの金髪碧眼の先生は、黙っていると一見怖そうだが笑うと爽やかな美男子であり、女性徒からの人気も高かった。

「……おまえなあ……それ冗談か？」

岩を積み重ねた広い演習場で、石を念力で動かす練習をしていた青の様子を見て、陽先生は訝しげに言った。

本人の嫌な予感の通り、青の能力は再び後退し、手のひらの石を動かす程度に戻ってしまっていたのだ……。

「マジっすよ……」

青の手のひらで小石が左右に転がる。

「それ手の平の角度を変えて転がしているだけだろう！」

先生は呆れて言った。

「いや、一センチは動いたと思うぞ？」

「真面目にやれ！」

陽先生の拳骨が青の頭に響いた。

「痛って、真面目にやってるさ！」

周りの生徒から忍び笑いが漏れた。

彼らはそこにある五十センチ程の石を、空中に上げては四方へ

自由に投げる事が出来ていたからだ……。

「木から俺は、お前が大木を倒したと聞いてるし、その現場も見てきた。あれは本当にお前の仕業だったのか？」

「いやー、気が付いたら、おれベッドの上だったんで実感ないんだよなあ……。あの時は死にそうに疲れていて、必死だったのは覚えてるけど……。だから夢だと思ってたんだ」

陽は大袈裟に溜息を吐きながら両手で顔を拭った……。

「お前は、崖から突き落とさないと能力を発揮しないタイプなんだな……。一番厄介だ」

「まさか、突き落とさないよな？」

青は陽先生をマジと見た。

「やるか！ 俺はこう見えても教師だ！」

「ちえっ、脅かしだよ」

「こらっ、クソガキ！ 何もできないくせに、てめえはふてえ野郎だな」

背の高い陽は青の頭上からどなり散らしているが、青は聞いているのかいないのか、鼻を穿りながらぼうつと突っ立っていた。

「時間割を見せて見る……」

先生は徐にそう言っ、青に腕の端末から授業内容のプログラム映像を広げさせた。

しばし、その時間割をじっと見た後に言う。

「昨日、防御術の講義を受けてるな、おまえこれもさっぱりだったろう？」

「何でわかんの？」

「能力を扱う上での基本中の基本だ」

「でも東先生は、編入生だからまだ難しいだろうって……」

「それはお愛想だ、”頑張らなければ前途多難だぞ”の裏返しだ」

何故だか、目の前の陽が嬉しそうに見えて仕方無かった。

「先生……」

「何だ？」

「凄く楽しそうなんだけどさ」

「ああ、俺はおまえの教官だからな。お前の能力をどうやったら引き出せるか思案中だ。何なら、崖から落ちてみるか？」

ニヤリと謎めいて笑う。

「てめえは！ 教師だろう！」

「気が変わった。必要とあらば何でもやる。お前を扱けると思うとやりがいがあるよ。覚悟しろ、重形青！」

「ぜーってえ、やだ！」

青の完全拒否に”ハハハハハ”と高らかに笑って、陽は他の生徒を見回りに行った。

青は実習室を出たすぐ前の通路で、X・DS6と出くわした。

彼は昨日会ったX・DD7と同じ色のジャケットとネクタイをしていたが、微妙に顔が違っていて、DD7が金髪だったのに対して、DS6は茶色い紙の色をしていた。

どちらにも共通して言えるのは、穏やかで優しげな雰囲気漂わせていると言ったことだった。

『はじめまして、重形青くん。教室がまだ把握できてないだろうと、DD7が言っていましたので、迎えに来ました』

「7が？ そう言ったの？」

『はい。昨日あなたと話をされたようで』

歩きながらふたりは会話した。

『今日使う教室は、実習室なのでまだあなたは行ったことが無いと思います。だから彼が言うには、あなたを迎えに行つてあげた方がいいと言いました』

「へえ、すごい！ 会話するんだ」

『はい。我々は夜になると一旦集まって、今日の出来事を話合いま

す。それから交代で警備を兼ねて構内を見回るんです』

「二十四時間動いてるのかと思ったよ」

『十分可能ですが、夜は私たちの需要は少ないですから、交代で仕事をしています。その間、仕事に就いてない者はチャージャーに戻ります。そうすることにより、より長くここで任務に就くことができます。DD7から聞いたと思いますが、基本百年働けますが、充電、節電を小まめに繰り返すと百五十年くらいは持つそうです』

「すつげえ」

青は感嘆の声を上げた。

『昨今じゃ、そんなに純粹に驚いてくださるのはあなただけですよ』
「だってさあ、オリン岬には何にも無かったから、おれはここに来て驚くことばかりだ」『何時までも、その純真さを保ってくださいね』

DS6は優しく微笑んで青を見ていた。

やがてふたりはエスカレーターで、中二階にある自習室にやって来た。

ここは全てふたり部屋で、そしてガラス張りで仕切られていて、外に音が漏れないよう防音室になっていた。

各部屋には青のようにX-IDD、X-DSと言った人工知能の教師や、上級生のボランティアとかに勉強を教えて貰っている者が数名いて、小部屋はそういった人たちでほぼ一杯になっていた。

「おれだけじゃないんだ」

『勿論！ 訓練が忙しくなったりすると、みんな勉強が疎かになりがちですから。さあ、その部屋に入ってください』

三メートル四方の小さな部屋で、向かい合わせに二人は座った。

他の自習室では補修を受けている生徒と、それを教えている上級生が並んで机に座っていたりしたが、それは二人が端末を見やすいからであった。

青は持っていた運動着の入ったバッグを足元に置いて、社会の教科書を机に出した。

『学園での教科書は参考書のような位置づけで、ここでは教科書は要りません。必要な資料は全て端末に入ってますから。私の”頭脳”は各端末と繋がっていて、君がそこに入力することが全て読み取れます。さあパネルに手を翳して下さい。機械が作動します。』

言われた通り、手を翳すと電源が入って画面が明るくなった。

そして、そこには『初等社会科問題』という画面が直ぐに現れた。

『君の編入試験の結果を見たところ、この国の歴史について何も理解してないようだね。これから将来、ここでスカイ・ポリスの一員になろうと思っっているんだったら、絶対に避けては通れない必要不可欠な常識なんです。ここは何が何でも覚える必要があります』

「……、どこに行っても同じ事言われるよ」

そう言って、既に項垂れている青を見てDS6は微笑んだ。

『そうです。学園の授業は統べてがとても大事なことで、今から君がここで学ぶことは、君の将来において無駄はないですから。時には、授業が苦しくなって脱落してゆく者もありますが、しかし、彼らはきっと後悔すると思います。何故なら、一度は立派なスカイ・ポリスになろうと、志高く決心してここにやって来た者たちですから、そんな彼らが地上に降りてスカイ・ポリスより魅力的かつ重要で使命ある仕事に就けると思いますか？』

青は首を振った。

『ええ、君らの能力に見合ったこんな素敵な仕事は無いと思いますよ、市民の安全を守り悪い奴を捕まえる。スカイ・ポリスの一員になるって事が、どんなに素晴らしく名誉ある事が、肝に銘じておくということです』

人工知能とはとても思えない心に響く彼の言葉は、青の胸の奥にずしりと鎮まった。

言葉なくじつとDS6の目を覗き込んでいた青に、彼はにっこり微笑んでモニターの画面を見るよう促した。

『さあ、始めよう。まず基本的なこと、この国について初代大統領の名前から挙げてごらん……』

「……うえ、いきなりかよ……」

『さあ、挙げてごらんなさい』

微笑を絶やさないDS6の前で、青は両手の指を使って臍気な記憶を辿って暗唱始めた。

机に向かって二時間が経過していた。

教室の窓から外に帳が落ち始め、行き交う飛行船がライトを照らしているのが見えた。

『今日はこれくらいにしましょう。君もお腹が空いたでしょうし……』

「ぺこぺこだよ……」

青は椅子に反り返って、背伸びをした。

『みんなに追いつくのも、そんなに先の話じゃないでしょう。今日は少し長くなりましたが、明日からはもう少し短い時間で大丈夫でしょう』

「ありがとう。おれ陽先生に習ってるんだけど、いまいち能力が使えなくて、その練習もするよう言われてんだ」

『今はみんなに追いつくのが大変でしょうけど、みんな最初はそうですから、頑張りなさい』

「陽先生に言わせたら、おれは」一番たちが悪い能力者だって……」

何かを思い出したように、クスリとDS6が笑った。

『クドー陽先生も、今はあんなに立派ですが、ここに来た時は親と離れて泣きべそかいている、ただの”小僧”でしたよ。あ、失礼”小僧”は暴言でしたね』

「知ってるのか？」

『当然！ 彼にも数式の補習をしました。そうですね、あなたと同

じ13歳の頃でした。それが今、一線で活躍されているんですから、人はどうなるか分かりませんが、ただ、私たちが因子分析した観点から言うと、今の彼が先鋭部隊で存在するのは必然的なものだと思います」

青が怪訝な顔をしたのでDS6は言い直した。

『彼は幼い頃から、そういう雰囲気を持ち合わせていました。95%の確立でスカイ・ポリスになるだろう予測ができていました』

「ふーん、そっかあ」

その事を聞いて何故だか青は彼が誇らしいような、嬉しい気分になり口元が綻んだ。

そんな青とDS6は並んでエスカレーターを降りていた。

『陽先生には黙っていてくださいね』

「うん」

そう言うつも、ニヤケている青を見たDS6は眉毛を上げた。

『君が陽先生に喋る確立は90%ですね』

「えええ、何でわかるの？」

『確立です、あなたの因子を計算して出した結論です』

「すげえ……、うん。当たってる」

『笑い事じゃありません』

二人は笑い合った。

エスカレーターを降りきって、青は寮へDS6は教員室へ反対方向に通路が別れる所まで来た。

『帰り道は分かれますか？』

「うん、ここ真っ直ぐでいいんだろう？ 大丈夫だよ。じゃあ、今

日はありがとうDS6」

『では、明日の放課後お会いしましょう』

二人は手を振り合って別れた。

通路にはオートウォークがあっても、建物から建物への移動の通路は長く、チューブは透き通っていて、星が瞬いているのが見えた。未だに構造が良く分からない青は、案の定、寮に帰る途中で迷子

になった。

「さっきあつちから来たから、こっちに行ってみるか……」

誰かに帰り道を尋ねようと、六時を過ぎた校舎には人っ子一人居なくて、そして、こんな時に限ってX・DDやX・DSの姿は見えなかった。

夜間通路は薄青のエコライトに光は絞られていて、人が歩き出すとセンサーで電気がつくが、徐々に薄暗くなつてゆく構内で、どつちに進んでいいのか途方に暮れていた……。

その時、何か音が聞こえた。

「ん？……何だろう」

それは何かガラスのような物が割れる音で、東の塔の辺りから響いて来た。

そこまでの距離は百メートルほどあったにも関わらず、ここまで聞こえて来ると言うのは、何かが壊れたような音に違いない……。

青は何となくそちらに向かって歩き始めたが、程なく、通路の中央に置かれたメッセージボードに気が付いた。”東の塔は現在封鎖されております。立ち入り禁止”赤い文字でそう書かれていた。

でも今の音は確かに向こうから聞こえて来た……。

「君、そっちの教室は侵入禁止だよ。読んだかい？」

いきなり後ろから声を掛けられ、青は飛び上がった。

「ああ、びっくりした！」

音も立てずに背後に居た人物は、バイオ科学の先生スミエ・グラだった。

「君は確か、編入生の重形青くん。迷ったのかい？」

「はい……、迷ってはいたんですけど、さっき向こうで何か音がして……」

東の塔を指差した。

「あの塔は今使われていないんだよ。従つて、誰もいないはずだ」
「でも……」

「君はこれ以上構内を歩き回つて、禁止されている東の塔に無断で

侵入しようものなら、再び減点評価を貰ってルームメイトに叱られるんじゃないのかい？ 心配なら私が調べてこよう。君はもう戻りなさい、——と、言っても帰り方がわからないんだね」

先生は腕の装置でXと連絡を取ってくれた。

ま、確かに先生の言うとおりで、青はトオルの激怒する顔が浮んで胸を撫で下ろした。

そして、程なく迎えに来てくれたのは、昨日のX・DD7だった。彼は昨日と同じ優しい笑みを零していた。

「彼を寮まで……いや、もう食堂の方がいいかな？ 夕食の時間だね。案内してあげてくれ」

「はい。わかりました。ではこちらへ」

DD7は早速、青を塔に繋がる通路から本校舎へと先導し始める。

「DS6と一緒にじゃなかったのですか？」

「さっきまで勉強見てもらってたんだけどさ、おれも迷うと思わなかったんであっさり別れたら、こんな所で迷っちゃってさ……」

「そうでしたか、私はつきり彼が職場放棄したかと思いました」

「ち、違うからな！ あいつが悪いんじゃないんだ！ おれが馬鹿だからまた迷っただけなんだよ」

DD7が静かに言うので、DS6になにかあつたら悪いと思い、青は慌てて彼を弁護した。

「大丈夫ですよ。別に彼のことを報告したりしませんから」

そう言つて、DD7は全てを見透かしているかのように再びニコリと笑った。

「ああ、驚いた……」

「それにしても……、全く反対方向の東の塔になんて、どうして向かったのですか？」

「それがさあ、音がしたんだよ……、何か、ガラスの割れるような大きな音が……」

『……音？』

DD7の顔が怪訝そうに変わる。

「うん。様子を見に行こうとしたら、途中でスミエ先生に呼び止められたんだ……。東の塔は立ち入り禁止だって言われて……」

『……そだよ。あの塔は五年前から封鎖されているんだ……。なのに……、音がしたと言うのかい？』

「ああ、聞き間違いではないと思うけど……」

オートウオークの上で黙り込み何やら考え込んでいるDD7の、まだ見たことも無い真剣な表情に不穏な空気を感じ取るが、それが何なのかその時は理解できなかった青だった……。

23・深夜に忍び寄る影

食事が終わって部屋に戻って来た青は、制服のまま北の窓際にある自分のベッドへダイブした。

それぞれのベッドは互いの足を向けるように、十字の通路を挟んで区切られている。

青が床に投げたバッグの中から、教科書も訓練服も飛び出して辺りに散乱した。

「散らかすなといつも言ってるだろう！ それにお前、寝るのなら制服脱いで寝ろよ。皺になるじゃないか」

トオルが注意するも、青は睡魔が襲ってきてもう返事どころでは無かった。

ベッドへ突っ伏したまま、もはや眠りの国に行きかけている。

「うん……」

「訓練服とかシャツはランドリーボックスに入れると、朝には届けてくれるからちゃんと入れるよ。ここだから……」

と、振り向いてピクリとも動かない青に言うが、既に全く反応が無かった。

「しょうがねえなあ……」

トオルは部屋の隅に設えてあるランドリードアを開けて、青が床に落としたバッグの中から訓練服を取り出すと、ボックスの中へ放り投げた。

「——たく、世話の焼ける奴だ」

「放つとけよ」

リビングのソファに腰掛けながら、トオルの様子を見ていたシオが言う。

「いや、おれは綺麗好きだから、許せないんだこういうだらしない

のは」

「じゃ、毎日おまえがランドリードアに、放り込むことになるだろつよ……」

あつさりそう言い捨てて、シオは手にしているノート型端末に目を落とした。

「本当はあの制服も脱がしたいくらいなんだ……。朝になったらきつと皺だらけになると思うと許せない……」

シオは口角を少し上げて苦笑いしたが、端末から目を上げることが無い。

「タイガは放課後ジムへ行ってるらしく、疲れているのかご飯食べたら即就寝……。まあ、彼は自分の洗濯物はちゃんと始末してるけどね」

「いいじゃん静かで」

「どうしてこの住人は部屋に帰って来るなりみんな寝るんだ？」

この部屋の者は協調性がなさ過ぎる。もっと会話しようよ」

その時、シオが再び顔を上げて、じっとトオルを見て言った。

「トオル……おまえ、ウザイよ」

トオルの目を見てそれだけ言っていると、シオもまたソファから立ち上がってベッドルームに入って行った。

「何だよーっ、おまえまで！ もっと話をしようよ！ 仲間だろっ？」

トオルの叫びは広いリビングで、無機質に木霊した。

今、何時だろう……。

青は突然目が覚めた。

この暗さは真夜中には違いなかったが、月明かりが差し込む部屋の中で、青は何か違和感を感じた。

だいたいどうして目が覚めたのだろう……、何か……何かを感じたような気がする……。

しかし、しばらく目をパチリと開いてじっとしていても、物音ひとつしなかったもので、青は再び眠る体制を作るべく仰向けになった。その時、――。

薄っすらとはあったが、天井を何かの大きな影が横切った。

それが人間なのか、生物なのか姿は見えないが、闇に何かが蠢く気配を十分に感じて、青の額に汗が浮んだ。

誰か、――何かが居る？

ゆつくりと、本当にゆつくりと頭を持ち上げて足元の向こう、シオのベッドを覗いたが、シオはちゃんとベッドに居た。

それからトオル、タイガのベッドを見ても、みんなちゃんとベッドの中にいた。

――では、誰だ？

この気配は何なのだ――。

この嚴重なセキュリティの中、部屋に入って来る侵入者なんてあり得ない。

金縛りのように、身体が凍てついて恐怖で竦むのがわかった……。喉が引き攣って痙攣しそうだし、指先から血が引くのがわかる……。…。

その時、闇の中で影が動いた。

やはり誰かが居る！

そして……。

——こっちにやって来る！

何かが、こっちにやって来る……！

青は気づかれないようゆっくりと頭を下げ、暗がりの中で薄目を開けた。

誰かの寝息がする中、衣擦れの音を立てて大柄な男の逞しいシルエットが、ベッドルームの入り口に立ち塞がったのを確認した。

人間だ——、でも信じられないくらいとても大きい、そして暗闇で目が赤く光っている！

なんだ？

人間か？

魔物か？

男は暫く入り口に立ったまま、辺りを見回して誰かを探しているようだった。

『もしかして……』

青の予感に当たって、男はゆっくりとシオのベッドに近づき、そして、月明かりでシオの顔が確認しやすいように、窓辺に立って眠っている彼の顔を見下ろしていた。

まさか……。

血管が切れそうなほど脈打ち始めた青は、指が動くか確かめた……、いつの間にか、指先は火がついたように熱かった。この感覚はあの時と同じだ……、大丈夫かも知れない……。

しかし、失敗したら……？

そう考えると、心臓が爆発しそうだった。

でも、やらなければシオが危ない。

男がシオに向かって手を伸ばそうとした瞬間、青は素早く起き上がり自分のサイドテーブルを両手で掴むと、男目掛けて力の限り投げつけた。

そのテーブルは、男に逃げる隙も与えない程のハイスピードで直撃し、防弾ガラスをも突き破って、物凄い爆音と共に男を外へ投げ飛ばした。

獣のよう巨体が闇に落ちて行く……。

「うわっ、なんだ、なんだ？」

トオルの悲鳴に似た声でした。

高層ビルの間を吹き抜ける風に乗って、割れたガラスが部屋の中や外へ雪のように散らばる中、青は窓際に駆け寄り男を確認しようとしたが、下の食堂の屋根に当たって砕けた サイドテーブルは確認できても、そこに男が落ちた様子は無く、ただ、パラパラと落ちてゆくガラスだけが、その更に下の地面へと続く暗闇の中へ吸い込

まれ行つた。

しかし、それはガラスや金属片に過ぎず、男が地面に叩きつけられたような不快な音は、流石にここまで聞こえて来なかった。

消えたのか……？

「何だ——！！！」

その轟音にみんなが飛び起きた。

その様子を見ていた青は、彼らが熟睡していたことに始めて気が付いた。

外からの強風で、室内にある教科書がヒラヒラとはためいている。

「何があつたんだ？」

タイガとシオは窓の近く、青の側までに駆け寄り外を眺めたが、トオルが部屋の明かりを点けて改めて部屋を見回すと、爆撃をうけたような惨状にみんなは呆然とした。

「なんだよこれ……」

「何したんだ？ おまえ……」

トオルとシオが交互に尋ねた。

「お前ら気がつかなかったのかよ……」

「何をだ……」

みんなが一斉に発言した。

しかも、青に非があるような明らかに怒った顔して、みんながじつと答えを待っている。

『これは不味いんじゃないか……？ 誰も気が付いてなかったなんて……』

ただ、ひとりだけばうつと窓際に立ち尽くして、今度は額から出る冷汗を拭う青だった。

誰一人、男の姿を見ていないだろうから、どう言っても信じてもら

えそうに無かったからである……。

「そうだ！ おれトイレに行きたくなつて目が覚めたんだつた！
ちよつと行つてくる！」

「てめえ、待ちやがれ！ 説明しろ！」

シオが叫ぶも、みんなの怖い視線を避ける為、早足でトイレに駆け込む青だった。

時計は夜中の三時を回っていた。

学長室の明かりは煌々と灯り、先生方が出たり入ったり慌しかった。

その横で、むつつりと草臥れた顔で、青ら四人はソファの椅子に座つて、青の事情聴取の審議を確かめに、部屋に向かった先生方の報告が来るのを、じつとして待つしか無かったのだ。

「本当に居たのか？ その変な男が……」

凡そ信じられないと言つた口調でトオルが尋ねた。

「おれはお前らが、あそこまで熟睡してることにしたい信じられないよ」

そして、青は大あくびをひとつした。

「……俺は、いったん深く眠りについたら、なかなか起きられないからな……」

「俺もだ」

トオルの言葉にタイガも頷いた。

黙っているところを見るとシオもそうなのかも知れないと青は思った。

「しかし……、あんな音がして一瞬で目が覚めたのに、その”男”を見ることも無かつたぞ……。本当に、本当に居たのか？ お前、夢でも見たんじゃないのか？」

「夢——？ 夢だと——っ？ ……。夢かな……？」

急に自信が無くなった青は、額に汗を掻くのを感じて頭を抱えた。前日もベッドで目覚めた時に、自分でも夢を見ていたと思っただけ、今回もし本当に夢だったのなら、大変な事になる……、下手すれば退学ものだ……。

瑠華の罵声が聞こえて来そうで、青はより不安になった。

「何言ってるんだよ！ お前、自信無いのか？ 夢見てたなんて言うどぶつとばすぞ！」

トオルが叫んだ。

「そう言われても、自信ない……」

「アホか……、防弾ガラスを割るほどの力で、テーブルを外へ投げておいて夢だと……？」

タイガも呆れている。

「だよな……よくあのガラスを割ったものだ……。あのガラスが割れたの初めて見たぞ」そう言ってるトオルは、タイガと顔を見合わせた。

恐らく落ちこぼれのレッテルが貼られるつつある青の、未知なる能力がかいま現れた間の悪さの同情も含まれていた。

「オレの側に立っていったって？」

以外にも、シオは冷静な顔して青に尋ねた。

「うん。さっきも言ったけどさ……、最初はみんなのベッドを見渡していったんだ、そしてお前を見つけると近寄って、暫く側で立っていたんだ……。それで、お前は、もしそいつがテレポーターだと、お前に触れたとたん連れて行くんじゃないかと思って、そいつがお前に手を出そうとした瞬間、テーブルを投げつけたんだ……」

「それが、先生だったとしたら？ どうするつもりだ」

「違うと思う。だって、そいつは異様に背が高く、上半身裸で肩は物凄い筋肉がついた逆三角形の体形で、背中に毛が生えているようだった……。そして何より目が……、暗闇で目が真っ赤に光っていた……。そんな、獣のような先生なんて居ないだろう？」

「確かに……。それに、この前の奴らとも違う……」

その時、多分シオは青のことを疑っていないと、トオルもタイガも思った。

それは、青の話を真面目な顔して真剣に聞いていたからで、いつものシオだったらとくにソッポを向いて、このソファで横になって寝ていた事だろう……。。

何か思いあたることでもあるのだろうかと思っただ。

「うん。全然違うさ」

思いだしても、ゾツとすると言っただように、青は珍しく顔を顰めた。

「どう思うシオ？」

さつきから難しそうな顔をしたシオにトオルが尋ねた。

「いずれにしても、もうじき先生が帰って来ると解ることさ……」

ここで考え事をする時の常で、シオはソファに深く腰掛けると、頭をヘッドにもたせ掛け、北の大地特有の繊細な彫り物が刻まれた天井を、見るとも無しにぼんやりと見ていた……。

24・夢か現実か

何やらドアの外が賑やかになって、徐に学長室のドアが開いた。

先頭に入って来たのは早瀬学長で、その後にオロン教頭、そしてサイコメトリーのエリアス・ロー教授、そして木、陽の両新鋭先生と、寮監ミラ・アンダーソンが続いて入って来た。

「待たせましたね皆さん。やっと実証検分が終わりました」

オロン教頭は立ったまま、青たちを見渡して静かに言った。

四人は身を深く沈めていたソファから、起き上がり体制を直してオロン教頭の次の言葉を待った。

「サイコメトリーのロー教授が、しげかた重形君の言う、”怪物のような大男”を確かに感知しました」

青以外の三人は驚いて、呻きにも似た声を漏らして声を失ったようだが、当の本人はホツとしたように顔をほころばして言った。

「……良かった、夢じゃなかったんだな」

「君の言う通りだよ、その”何者”かは、リビングに降り立ち、勉強室の中を伺い、そして寝室へと歩いて行ったらしい……」

ロー教授がそこで一旦言葉を切ったのは、今回騒ぎの張本人の重形青が、自分の見た物が夢で無かったことに、安堵したのか笑みを浮かべているのに対して、他のルームメイトの三人が、およそ信じられないとでも言うような、困惑をした表情をしていたからだ。

実際、学年でもトップクラスの实力を持つていると思われる、タイガやシオが気づかないのに、落ち零れ一直線だと思われていた青だけが侵入者を察知したなんてと……、トオルは戸惑っていた。

タイガもシオも……、目が覚めなかった自分自身にシヨックを受けていたのだ……。

ロー教授は再び言葉を続けた。

「……そして、そこでたまたま目が覚めた重形君に気付かれて、サイドテーブルをごと外へ投げ飛ばされた。それまでは確かに私も追

跡できたが、そこからその男は忽然と姿を消している……」

「やっぱり……」

「やっぱりとは？」

教授が青に尋ねた。

「おれ、直ぐに窓へ駆け寄って外を見たんだ。でもテーブルは食堂の屋根に当たって砕けたけど、男の姿は見えなかった……おかしいと思ったんだ」

「……うむ、なるほど……」

ロー教授は白い物が混ざる豊かな顎鬚を、考え事をする時の癖でゆつくりと撫ぜた。もし男がテレポーターとしても、学園都市は外から進入できないように、特殊なバリアーが施されていて、勿論ここから出て行くことさえ出来ない。

しかも、そのバリアーが破られたのなら、警報装置が作動するはずで、警備局から連絡が無いと言うことは、男はまだこのターミナルから出て行って無いと言う事になる……。

ここ第二ターミナル、通称学園都市への入り口は、飛行艇からの出入ゲートはひとつしか無い故、他からの進入は絶対にあり得ないのである。

だから、その男がゲートを通る為に、堂々とIDを取ってここに進入して来たと言うのなら、管理局若しくは内部犯行の危険が高まる……、しかし、彼の言うように優に2メートルを超える大男となると、身なりからして怪しいと判断されて、管理局に連れて行かれるだろう……。

「オロン教頭、管理局へは問い合わせしているんですよね？」

「ええ教授、今データベースで探しています、そこで引つかからなければ、それはとても大変なことになりますが……、学長、今日の所はもう深夜ですし、そろそろ彼らを休ませてはどうでしょうか、明日の授業にも差し支えそうです……」

教頭は生徒をチラリと見た。

「おお、そうだった。アンダーソン君、彼らの仮のベッドは用意で

きているだろうか？」

「ええ学長」

「では、彼らを案内してくれたまえ、それと先生方も深夜に集まってくれてすまなかった、後は警備本部で搜索を続けるから、今日の所は休んでくれたまえ」

「はい。分かりました」

陽先生が返事をした。

「学長、明日の授業は平常通りでしょうか？」

木が尋ねる。

「取りあえずはそのつもりだ。下手に授業を止めてもみんなの不安を煽るだけだからな」

「そうですね」

木は同意した。

「重形君、今回は良くやったね、誰にも怪我が無くて幸運だった」
学長に褒められて青は照れくさそうに微笑んだが、その目は明らかに睡魔に襲われつつあり、瞼が重くのしかかっている。

「さあ、みんな眠いでしょうけど私に着いて来て下さい。今夜は職員寮の方にベッドを作っております」

四人はずるずると立ち上がると、寮監の後に続いて学長室を後にした。

その後を、木と陽が続いてエレベーターの前までやって来た。

「青、今部屋を見てきたぞ、凄まじいな……」

側に来た陽先生が青に言った。

「あの防御ガラスを粉々にするなんて……本当に、お前ひとりでやったのか？」

「先生！ 信じて無いんだな」

青は憤慨した。

「まあなあ、信じろと言う方が無理だろう？ 今日放課後お前の実力見せて貰ったばかりだからなあ……」

丁度、エレベータがやって来てドアが開いて、中へ皆がぞろぞ

ると乗り込んだ。

「木、こいつは今日の授業で、石を動かすどころか、手の平の角度を変えて小石を動かす始末……、まるっきりやる気がなかっただぜ」
木はクスクスと笑った。

「それで、彼の能力が試験のとき発揮されない理由が分かったよ。
青は身に危険とか危機が迫らないと、その能力が発揮できないんだな。それを自由に操れるようにするのが陽、お前の仕事だよ」

「——だって。陽先生」

青はニヤニヤと生意気に笑った。

「だったら、やっぱ崖から突き落とすとするか……」

「先生！」

「俺にはお前を立派な能力者に、しなけらばならない使命があるんだ」

エレベーターの中から、白々と明けて来る街並みを見下ろしながら、陽が微笑を浮かべて言った。

「——ねえよ！ その前にそんなことしたら、オレ死ぬだろ！」

みんなが陽先生の言葉に、納得したように自分を見てるのに気づいた青は、ここは敵だらけだと密かに思うのだった。

翌朝、職員寮から着替えの為に、自分たちの部屋に戻ってきた四人は、ベッドルームが綺麗に片付いて、割れたガラスも直されていたことに驚いた。

おまけにベッドメイキングも完璧だ。

「うわあ、すげえ！ 何もなかったようだ……」

嬉しそくに青は自分のベッドへ、うつ伏せに飛び込んだ。

その様子は、ルームメイトが凡そ十一時間前に見たシーンとまるつきり同じ動作だった。

「何時までもあのままにしておくと、危ないからな。再び敵が襲って来ないとは限らない……、第二ターミナルから外に出た様子は無

「いみたいだし」

「そう言いながら、トオルは窓際に立って、ガラスの強度を調べていた。」

「今までのガラスより、更に強度が増してる」

「窓枠に水硬石を嵌めたな……」

「いつの間にか側にいた、シオも窓枠に触れながらそう言った。」

「こいつは、テレポーターが通り抜け困難だという石のことかい？」

「そう、電磁波の手錠と同じく、こうやって枠に敷き詰めるだけで、この石から出る微量の電子が、物質の因子を分解できないようになっているんだ、テレポーター泣かせの石だよ、擦り抜けは絶対に無理だ。」

「すごい念の入れようだな」

「しかし、あいつだけが起きていたなんて、不覚だったな……」

「続いて、側にやって来たタイガが、ベッドの上ではしゃいでいる青を見て言った。」

「うん、それは俺も非常に悔しい」

「トオルもこっそり呟いた。」

「でも、オレはこれで、あいつに二度も助けられたことになるんだよな……」

「あっさりシオがそう言うので、トオルもタイガも、この学園きつての優秀な生徒である彼を助けたという事実を思い出して、驚愕を隠しきれなかった……。」

「あんなやつに……」

「シオは顔を顰めて、一生の不覚だと言わんばかりに、ベッドの上で仰向けになって、鼻を穿っている青を見た……。」

「確かに……」

「みんなは悔しそうに頷いた……。」

「起きやがれ！」

その声と共に、お腹に鈍い痛みを感じて目が覚めた青は、自分の腹部にシオの足があるのを見た。

そして、脳内時間差で再び鈍痛に襲われる……。

「痛ってー！ーっ」

「さっさとフロ入って、着替えろ」

それは命令だった。

「青ー、今シャワー出たから早く入れ！ 朝食に間に合わなくなるぞ！」

トオルが頭をバスタオルで拭きながら、バスルームから出て来た。見るとタイガもシオも、既に着替えていて、タイガは今日の勉強で使う教科書を揃えていた。

そこで青は、自分が再び眠り込んでいたことに気がついた。

「いけね！」

ベッドから飛び起きて、クローゼットから着替えを取り出すと、バスルームに駆け込んだ。

規律を重んじるこの学園では、朝食は朝七時から八時の間に済ませ、授業には遅れる事無く教室に入らなければ減点対象となる。洗濯物はランドリードアに入れると、翌日には確実に届くので、プレスの行き届いた制服、シャツを着用することは必須だ。

勿論、訓練で朝早く出かけたり、学園を数日間離れる場合もあるので、その時の時間は大幅に擦れるが、それは担当教官から事前に連絡がするので、生徒が心配することは無かった。

ここでは、全てが学びを優先として配慮されていた。

その時、来訪者を告げるブザーが鳴った。

『ID1001工藤莉空と、ID2032ジロイ・アッシュが入室許可を求めています。許可致しますか？』

「いいよ」

リビングの窓枠の上で胡坐をかいて座りながら、今日の時間割を

チェックしていたシオが答えた。

程なくドアが開いた。

ふたりは目の前に目的の人物を認めて、やって来る途中、勉強部屋にいるタイガと、ベッドルームで身支度をしているトオルに声を掛けた。

「ありがとう、でも僕らは大丈夫ですよ」

「タイガも無事か？」

アツシュが尋ねた。

「ああ」

ぶつきらばうにそう言うタイガにアツシュは微笑んで頷いて、青が居ないことをシオに尋ねた。

「今、シャワー浴びてる……」

窓際にいたので、シオの髪の毛はより一層薄くプラチナに輝き、白い肌は透き通るようで、目の下にクマが見て取れて、莉空もアツシュも少しばかり眉頭を寄せた。

「シオ、大丈夫か？」

窓に凭れると、莉空は髪の毛が触れるくらいまで近づいて、シオの顔を覗き込んだ。

「大丈夫だよ……」

「そうは見えないぞ」

目を上げようとしないシオの、顔を隠す長い髪の毛を優しく払って、顔色の悪いシオを莉空は見た。

そして、少し声を潜めて話を続ける。

「学長から聞いた……、お前を執拗に狙ってくるということは、お前のもうひとつの能力を知られてしまったんじゃないかって……」

莉空の視線に耐えられなくなったシオは、顔を上げて彼を見返した。

「……うん。わかってる……」

「俺たちの部屋へ来いよ、守ってやる」

いつもの悪戯な微笑みを消して、アツシュが莉空の後ろから言っ

た。

ふたりの真剣な表情に、シオの心は揺らいでいた。

「……誰も傷つけない」

「僕たちが傷つくとでも？」

莉空がシオの頬に手を当てて優しく笑った。

「怖いんだ……」

莉空の綺麗な薄い董色の目を、真っ直ぐ捕らえて静かに言ったシオだったが、何かを訴えているかのようにその瞳は翳^{かげ}っていた。

「大丈夫だよシオ……」

莉空はシオの頭をゆっくり自分に引き寄せた。

なすがまま彼の肩に顔を預けたシオは、莉空の腕の中で安心したかのように、ひとつ大きく呼吸をした。

その時、バスルームのドアがいきなり開いて、青が素っ裸で出てきた。

「パンツがねえーっ」

莉空たちをそこに認めても、恥らう様子も無く。
「ねー、どっか落ちてないか？ おれのパンツ！」

「……」
「……」
「……」

シオ、莉空、アッシュの瞳が見開かれ、みんなは硬直したが、やがて莉空とアッシュは大爆笑した。

「アハハハハハ」

「何がおかしいんだ？」
ポカンと青が尋ねた。

「てめー、服を着やがれ！」
シオの罵声が飛んだのは、言うまでもない……。

25・三人のDNA

食堂へ降りる為に待っていたエレベーターのドアが開いた時、中にいた数人の学生は驚いて左右に避けた。

青を先頭に、シオ、タイガ、トオルと、莉空、アツシュと一同が一緒に乗り込んだものだから、他の学生が何事だろうかと同様に訝しげな視線を寄越した。

窓際にはシオを挟んで莉空とアツシュが陣取り、扉の後ろでは青を挟んでタイガとトオルという、トリオで並んでいたが、会話の内容は全く違った。

「てめえ、部屋の中では裸禁止だからな」

タイガがドスの利いた声で威嚇するも、青の態度はさほど反省してるようにも思えない。

「朝から変なもの見せやがって」

「あははは、良かった。俺はベッドルームで着替えていて」

極力、他人と接触しないようにしているタイガが、青が素っ裸でうろつろつろするのを見て、どんなに驚いた顔をしたと思うと、トオルは可笑しくて仕方なかった。

「とにかく、わかったな！」

タイガに後ろから首のあたりで制服を掴まれた青は、まるで猫のように成すがままにいる。

「はい」

しおらしく返事をした青から手を離れたと、同時にエレベーターのドアが開いた。

「飯だあゝ、メシメシ！ 今日は何食べようかな」

「てめえ！」

全く反省の色も見せずに、スキップして出て行った青の後を、怒り心頭のタイガとトオルが追って行く。

「あいつ……面白い奴だな」

アッシュが笑いながら、青の後姿を見て言った。

「何だかんだ言って、オレあいつに何度も助けられているんだよ…

…」

「サイコパスは能力の使い方によつては頼りになるからな、僕たちと居るよりそっちがいいか……」

莉空は少し寂しそうに言った。

「そんなんじゃないよ……」

莉空の気持ちを感じ取ったシオは即座に否定した。

「笑えるな、あいつ！ あんな、惚けた奴がシオを救ったんだぜ、凡そ信じられないが……」

同じく、莉空の気持ちがかかるアッシュは宥めるように言った。

「それに、今日からX - D S 6 が青の補習を部屋でしながら、夜中もずっと居てくれるんだって、だから心配ないよ……」

シオは並んで歩く、莉空の端正な横顔をチラリと見た。

「そうだ、僕たちも一緒に泊まるうか？」

「こらっ莉空、何を言い出すかと思つたら！ おまえ、シオ可愛がり過ぎ！ D S 6 が居るんだから大丈夫だよ」

「忘れたの？ D S 6 は武器装備体もあるんだよ。それに超高感度センサーがあつて、どんな気配も逃さないし、万が一、誰かが現れても全システムに繋がった警報は、素早く保安室に知らせが届んだ、第一、部屋まで一分もかからない所に警備員がいるから」

「そうだよ、莉空は心配しすぎだから」

相変わらず難しい顔して、目頭を寄せている莉空を見た。

「おまえに何かあつたら……」

「莉空！」

とうとうシオに睨まれて、莉空は我に返った。

「莉空、おまえシオに対して、異様に過保護過ぎ！ ……でも、まあなあ、こんな女の子みたいに可愛い弟がいたら、俺も分らない

でもないけどね」

につこりと、アッシュがシオを見て微笑んだ。

「やめろアッシュ！鳥肌立ったぞ」

シオがそう言っただけを睨む。

「それに弟じゃないし……」

その事実が少し寂しそうに俯くシオの髪の毛を、莉空は微笑みながらクシャクシャと指で撫でた。

「えええ！？」

食堂のテーブルを囲んで一同が、悲鳴に近い驚きの声を上げた。

「莉空先輩とシオって従兄弟だったの？」

まず、トオルが言った。

「みんな知らなかったんだね。そうだよ」

さつきと打って変わって、莉空は穏やかに笑って答えた。

「驚いたわ！でも言われれば、似てるわよね二人！」

そこにいた梨子も目を丸くしている。

言われなくても実は良く似ていたのに、みんなが気が付かなかっただけだと、シオは密かに思っていた。

それは幼い頃から周りの者に言われ続けて育ってきた。

母親が双子だったので、必然的に彼らは似ていたし、同じ時間を共有することが多かったので、兄弟と言ってもいいくらい仲良く育ってきた。

「勿論、アッシュ先輩は知っていたんですよね？」

梨子が尋ねた。

「当然、莉空の可愛がりようは普通じゃないでしょ」

アッシュはあっさりバラした。

そして一同が、うん、うん、と頷いた。

「いや、確かに変だとは思ったのよね。莉空先輩はシオに気があるんじゃないかと思ってたのよ、禁断の学園バージョンなんて……」
頭上からの声にみんなが見上げると、トレイを持って意味深な微笑みを浮かべた瑠華が現れた。

そんなことを本人の前で堂々と言えるのは、彼女しかないと同じく密かに思う。

「悪かったね、瑠華の期待に添えなくて」

「でも莉空先輩ってしっかりしてるようで、シオのことになると盲目になるのよね」

そう言いながら、話の中心に入ろうと、瑠華は青の左横に無理やり座り込んだ。

「あんた何、そのキツシユのてんこ盛り！」

青のトレイを見ると、独り占めしてきたかと思えるほどのキツシユが、山高く積まれていた。

それに、会話にも加わらず、さっきから独りだけ無心に食べている。

「上手よこれ、姉ちゃん！」

「ここの食事がタダだと思って、薄汚く食べないでよね、みつともない」

「だつ*+、くだ*+……も……ん」

口いっぱい頬張って、それでも喋る弟を呆れて見ている。

「……ああ、情けない、これが私の実弟なんだから……、先輩、シオと変えてくださいよ」

「遠慮するよ」

莉空は微笑むと、きっぱり断った。

「ところで先輩、朝から女子寮でしまかに流れているニュースがあるんだけど……？」

何を言わんとしているか察して貰いたそうに、瑠華は急に小声で話し始めると、真面目な顔して莉空を見た。

「言ってみて……」

「昨夜、何者かが男子寮に侵入して、誰かが連れ去られたって」

「侵入されたのは本当、でも誰も連れ去られて無いし、怪我也無いが、犯人は捕まって無いので、事を大きくしたら学園がパニックになるから、今日の所は授業を続けるんだって」

莉空は静かに言った。

「それって、どこまで喋っていいの？」

「知らないって惚けた方が面倒無くていいんじゃないの？ 実際、公式に発表してないしね、真夜中の事で寮の窓は防音入ってるから、昨夜の一件を知るものは少ないと思うんだ」

「分かった。そうするわ」

「で、誰が狙われたか知ってるの？」

「いいえ……。誰なの？」

「シオ」

「ええ？ 嘘でしょ……」

瑠華はパチリと目を見開いてシオを見るが、何事も無かったかのように澄ました顔してジュースを飲んでいた。

「そして、誰が助けたと思う？」

「誰？」

「君の弟」

「ええええええええええ」

瑠華の大きく開いた口に、青のキッシュが詰め込まれた。

職員が集まって朝食を取っている食堂の一角で、青たちが居る賑やかなテーブルを眺めながら、早瀬学長が向かいの席に座っているバーディーに言った。

「彼らと向こうで一緒に食べてもいいんだよ、バーディー」

「どうして？ そんなんじゃないから……」

友人の忘れ形見とも言えるバーディーが、心配を掛けないように一生懸命笑顔を作って微笑む姿は、どこと無く痛々しい。

早瀬はバーディーが職員寮と大学が研究室の往復で、同じ年頃の友人がいない事を気に掛けていた。

食事はいつもこうやって大人達に混じって食べているが、きつと向こうで同い年の学生と食べたいに違いないだろうが……、学年をスキップしたことを本人も、それを許可した学長自身も少なからず後悔していた。

その時、近くに食べ物のお代わりを取りに来た青が、バーディーに気がつき声を掛けた。

「あ、バーディーじゃないかあ！ お前、そんなところにいたのか？」

「え……、あ、青……」

名前を呼ばれて、バーディーは顔を上げた。

「こつち来てみんなと食べないのか？」

「僕はいいんだ、いつもここなんだ」

少し寂しげにバーディーは言った。

「お前、そんなだから友達できないんだよ」

そう言うなり、バーディーの食べているトレイを掴んだ青は、有無を言わずそれを持って元いた自分の場所に戻り、持ってきたバーディーのトレイを自分の隣、瑠華と反対方向のテーブルに置いた。フォークを掴んだまま、突然のことに戸惑っているバーディーに学長が微笑んだ。

「行きなさい。行ってみんなと一緒に食べてきなさい」

「……はい」

小さな声で返事をしたバーディーの顔が嬉しさをかみ締めているように、綻んでいたのそこにいる教師もみんな微笑んだ。

バーディーが席を立つと、木も微笑んで言った。

「良い友達ができたみたいですね」

「ああ」

「あいつでいいんですか？ —— たく、ふざけた奴ですよ」
陽が呆れたように微笑んだ。

「少々、やんちゃ過ぎるが、あのくらいが丁度いいんじゃないか？
バーディーは真面目すぎるから」

相変わらず賑やかな青たちのテーブルを見ながら学長が言った。

「少々？ 学長！ きつといつか後悔する日が来ますぜ」

学長は声を立てて笑った。

「早々、手こずってるようだな」

「普段のあいつは、やる気無し、能力ゼロです、ゼロ。石ころだつて転がせませ——ん」

「だからそれは教官である君の役目だろう？ 陽。あいつには絶大な能力が眠っているような気がするんだけどね俺には」

誰もが苦笑する中、木が話しに入ってきた。

「お前、他人事だと思ってるだろ」

ぶつぶつと不平を言う陽の後ろを通って、オロン教頭がそそくさ
とやって来ると、学長の耳元で何やら呟いた。

すると、俄に学長の顔色が変わったのに誰もが気がついて不穏な
空気が漂った。

「わかった。直ぐに行く」

それだけ聞くと、教頭は再び同じ道に戻って行った。

「どうしたんです？ 何か分かりましたか？」

「昨日、青が投げつけたテーブルに、男のDNAが残っていてな、
それを分析したらなんと……、木京介、フドー・陽、そして現在は
先鋭部隊で活躍しているテレポーターのスガ教官、三人のDNAが
混ざっていたそうだ……」

「な、なんと……」

木は言葉に詰り、陽は目を見開いて言葉を失っている……、数ヶ
月前に連れ去られ殺害された情報管理センターの室長から、データ
Iを抜き取られた事態を重く見た国家警察は、機密事項の徹底管理
と研究機関に携わる人物の安全管理を指導したが、それにも関わら
ずDNA総合研究所が狙われ、侵入者によって荒らされたことがあ
った。

その時は、生徒のDNA保管法は幾つものセキュリティーが掛かった後だったので、盗難を免れたのだったが、実は教師のDNAのサンプルがいくつか盗まれていたのだった。

まさかとは思っていたが、実際、目の前に衝撃の事実を突きつけられて、教授陣はその根底を揺るがすような事実には打ち震えたのだった。

「それはつまり、男がテレポーター能力、木の超自然能力、陽の念力の能力を操れる可能性が出てきたと言うことだ……」

学長の言葉に誰もが息を呑んだ……。

26・我が儘の悲劇

とある倉庫が立ち並ぶ界隈は、昼は勿論のこと夜間になっても人が殆ど立ち入らない、そんな一角に錆びた錠が掛けられた廃屋に近い建物があった。

昼だと言うのに何年も使われていなかったせいで、埃りを纏って陽も射さないガラス窓は、部屋の中にセピア色の影を落としていた。今にも朽ちそうな外観とは裏腹に、最新危機が揃った室内に響いているのは、男が苦渋に悶える声で、先ほどのたうち回るほどの痛みを抱えて呻いているからであった。

「何とかしろ！ この痛みを……」

「あなたがいけないんですよ。あれほど警告したのに……、あの培養液から出てくるのが早かったんです」

「うつつうつつ」

「分かりますよ、どんなに苦しいか……、まだそれぞれのDNAが定着しないままに、動いてしまったのですから、責めてあと三日あれば……」

「煩い！ 貴様、わしに命令するのか！」

「とんでもございません、ただ、意見を言わせて頂きたく……」

「お前の意見など、聞かぬわ！ 早くしろ！ この痛みを何とかするんだ！」

「回復には一番手っ取り早かった、培養液の入ったチューブも壊してしまいましたし……、なぜあんな真似を？ お陰で生徒に見つかる所でしたよ、何とか取り繕って校舎に返しましたけど」

そう言つて、スミエ・グラは笑顔でメガネの位置を直した。

「お前があの時、何か液を注入しただろう。あれは何だ、あれが苦しかったんだ……」

「我慢してくださいと申し上げた筈です。あれは筋肉増強剤でしたから、あなたは急激な成長をお望みで、それとDNAとの適合を考

えて培養液に混ぜたつもりでしたが、駄目でしたね……、あなたが
急ぎすぎた結果ですよ」

スミエ・グラは大きな注射器を男の腕にした。

「それは何だ」

「ようするに筋肉定着財ですよ、剥がれ掛けて苦しいから悶えなければならぬのです。それを落ち着かす物です、培養液の代わりに
体内に直接注入します。私だって博士の助手を長年務めて来ました
から……」

「ああ、神になろうとした男か……」

「まあ、博士はそんなこと考えていませんでしたが、単に自分の研
究を追及していたら、人間と猫の子供が出来てしまっただけで……」
くくくく、と男は肩を震わせて笑った。

幾分、楽になったようだ判断したスミエ・グラは彼に尋ねた。

「どうして、そんなに性急に彼を必要としているのですか？」

「お前に言う必要はない」

部屋を凍らすほどの冷たい視線を寄越した魔王の顔に戻った男に、
質問したことをスミエ・グラは震える程後悔した。

そこに居たのは、残酷な光を宿した闇の帝王そのものだったから
だった……。

「ほらな……」

青の手の平で、頑としても動かない石を見つめて、フドー陽は溜
息を吐いて言った。

「なめんじゃねえぞ、青」

おまけに拳骨を一発くらわした。

「痛いってーっ、暴力教師！」

昨日と同じ屋内練習場で、漫才のような二人のやり取りを聞いて

いる生徒から、忍び笑いがクスクス漏れている。

決して、なめてる訳でも、やる気が無い訳でも無いのだが、青にとってこの能力は、ままならないのだ。

「ノノア、ちよつと来てくれ！」

呼ばれてやって来たのは、昨日、梨子から紹介された青い髪に薄群青の瞳を持ったスガ・ノノアだった。

同じ練習用の戦闘服を着ていても、男の子と違い何となく可愛い。「ノノア、こいつに見せてやってくれ、あの石を浮かせてから、壁に当てて粉々にするんだ」

「はい。先生」

ノノアはにつこり微笑んで、5メートル先の石に手を翳すと、石はふわっと浮き上がり、急スピードで壁に当たって砕けた。

「すっげえ！」

「こんなんで感動する馬鹿があるか！」

「だって、すげえよ!？」

「アホかお前は……」

がつくりと肩を落とした陽は、ノノアにありがとうと言って下がらせた。

「お前、何か忘れてないか？ 昨夜の力はどこ行っただ？」

回りに誰も居ないことを確かめ、やや小声で言う。

「それが問題なんだよな……教えてくれよ先生」

青は手の平に乗せた小石がピクリとも動かないのを、陽の目の前で再び見せた。

そして、がつくりと頂垂れた陽が言う。

「ああ、お前はオレの教師生活至上、最大の難関だ……」

今日も、何の進展も無く、青自信がつくりして教室を出てきた所

で、ノノアに呼びかけられた。

「大丈夫だよ青くん。私だって、最初はなかなか石を持ち上げられなかったんだから」

「そうなのか？」

「そうよ。練習を積み重ねて、やっとあのくらいになったの」

そう言ってノノアは、可愛く微笑んだ。

「おれってほんと、イザというときじゃ無いと出ないんだよな」

「取りあえず、それでいいんじゃない？ だから私たちはここに勉強に来てるんだし」

「そうだよな、うん。そうだ」

ノノアは青が嬉しそうな顔して笑ったので、自分も嬉しくなった。青のような天真爛漫な男の子に会ったのは初めてで、良い意味で喜怒哀楽が激しくて楽しいと思う。

「あれ？ あそこに居るの瑠華さんとシオくんじゃない？」

渡り廊下を歩いていたら、もうひとつ向こうの廊下を瑠華とシオが歩いていたが、突然立ち止まると向かい合わせで話をし始めた。

そして、青が二人に手を振ろうとした瞬間、なんと瑠華の手がシオの頬をぶった。

「な、なんだー？」

青とノノアは目を丸くして手摺に捕まったまま、向こうの二人に釘付けになった。

「ちょっと、待ちなさいよ！」

研究室を出てから漸くシオに追いついた瑠華が、シオの肩に手を掛けて振り向かせた。

彼は機嫌悪気で鷹揚に振り向いて、瑠華を睨んでいる。

「折角、バーディーがあなたの為に装置を開発してるのに、どうし

て協力してあげないのよ」

「今日は疲れた」

「何が疲れたよ、みんな一生懸命対策練ってるのに」

「誰が頼んだよ」

こういう事を平気な顔して言うシオに、瑠華はムカついた。

だいたい莉空先輩はこいつを甘やかし過ぎだと、瑠華は心の中で悪態を吐く。

「ムカつくクソガキね」

瑠華はシオを睨んで言った。

「うるせえ、ブス」

その時、瑠華がシオの腕をガシッと掴んだ。

「何すんだよ……」

シオはそう言いつつ、鬱陶しい瑠華から離れるつもりでテレポトしようとして、出来ないことに気がついた。

『あ、……あれ？』

身体が動かないのだ……。

そして、息がかかるくらい間近かで、瑠華がにやりと微笑んだかと思うと……。

” バッチーーン!!!! ”

—— え？

次の瞬間、シオは瑠華から思いっきり平手打ちを食らった……。

27・シオの天敵

バッチーン！

辺りに音が響いた。

シオは赤くなつた頬に手を当て、驚いて呆然と瑠華を見ていた。人に殴られたのは後にも、きつと先にも無いだろうショックと、何故、テレポートでき無かつたのか、その二つの疑問に頭が渦巻き、アイスブルーの瞳は見開かれたままだ。

「ぐーじゃ無いのは、情けよ。あんたの可愛い顔にあまり傷をつけちゃ可哀想だと思ってね」

瑠華は目を細めて、したり顔でニヤリと笑った。

「てめー、今何しやがつた……」

「あんたを打った」

平然と言う。

「チッ」

「何よ、”チッ”て」

「ふざけんな、分かってるだろう、今どうしてオレはテレポート出来なかったんだ？」

瑠華はたっぷり間を空けて、答えを求めて自分を凝視しているシオを見て言った。

「……行つてよし。疲れてんでしょ」

あっさりそう言い、身を翻すと研究室へと、戻って行く。

「こら！ クソ女！ 待ちやがれ！」

暫くして、いきなり瑠華が立ち止まったので、後ろを追いかけていたシオがぶつかりそうになる。

「私は謝らないわよ」

瑠華は振り向くと、シオの目を捉えて気丈に言った。

「……」

「せめて自分が狙われていると、自覚できてる時だけでも協力しなさいよ、みんな心配してるんだから……」誰が頼んだ”なんて、子供じみた真似は、ここでは通用しないのよ、みんな命がけなんだから……」

いちいちがまともな瑠華の言葉や、自分を見返す真っ直ぐな瞳に、シオは逆らえなかった。

一連の事件はすべてシオ絡みで、学園に多々被害を齎し、みんなには色々な意味で迷惑を掛けている……、シオは改めて思い出した。

「……ごめん」

素直に謝るシオを見て、瑠華は微笑むと静かに頷いた。

「でも、痛かったぞ」

「だから、謝らないってば」

「……殴られたの初めてだ、……オレ」

「こんなに我侭なのにね……」

そして、瑠華は澄ました顔で付け足した。

「てめーは、まったく……」

シオが呆れたように言いかけた所で、瑠華の指が伸びてきてシオの唇に触れた……。

「切れちゃったね」

そして、神妙な顔して親指で拭き取るので、シオはじつと瑠華を見ていたが、ふと、長い睫を上げたハシバミ色の瞳と目が合った。

「ほんと女の子みたいだねシオって……」

「何しやがる……」

瑠華はシオの前髪を後ろに払って、端正な顔を覗き込んでから、持っていたピンでその前髪を上留めた。

「だから、——何しやがるんだ！」

「目が悪くなるよシオ」

惚けてるんだか、無いんだか、再び歩き出す瑠華の後ろを追うシオだった。

「だから、教えろって言ってるだろう！ 待ちやがれ、クソアマ！」

それから凡そ二時間後、研究室から出てきた瑠華、シオ、バーデイーが向かったのは食堂で、彼らがトレイを持ってみんなの席に着いた時、そこにいた何時ものメンバーが、シオの赤くなった頬と切れた唇を見て驚いた。

——と、言うか、シオが食堂の入り口に立った時点で、食堂にいたみんながざわめいていた。

「ど、どうしたんだシオ？」

座って食事をしていた莉空が、真っ先に声を掛けた。

アッシュも珍しい物を見たように、目は見開いているが口元は綻んでいる。

「瑠華に殴られた」

シオがポツリとそう言うと、今度は一斉に瑠華に視線が集まった。
「ほんとうか？」

「うん。殴ったわ莉空先輩」

そう言いつつ、食べることに専念してる瑠華は、隣の青に塩の容器を超越せと命令した。

静まり返ったテーブルに気がついて、瑠華が顔を上げると、みんながじっと自分の一挙手一同見ているのに気がついた。

「ん？ どうしたの？」

「その理由を聞いてもいいかな瑠華？」

穏やかに、宥める様に、その理由を莉空が尋ねた。

「我侬で生意気だから」

” おおー ” と、一同から声が漏れる。

” なぜそんなこと聞くの？ ” って感じで、瑠華は肩を竦めた。

「ま、まあなあ…… そんなところはああるけどさあ……」

横でトオルが苦笑いすると、シオに睨まれた。

それよりも殴られたシオが従順に、瑠華と一緒にここに来て、同じテーブルで向かい合わせに座って、何事も無かったように食事をしている方が、不思議でならない莉空とアッシュだった。

シオが本気で怒ったら二、三日は口も聞いてくれない事を知っていたからだ。

しかも、殴られた???

シオは今までだって殴られた事など無い筈だ、それなのに……。

莉空の心はパニックだった……。

「シオくん、そのピン可愛いね」

梨子に言われて、今までずっと自分が前髪をピンで留めていた事

に気がついた。

「あ……忘れてた」

「可愛いでしょ、私が留めたの。目に前髪が入りそうで鬱陶しいから」

「いい加減、外しやがれ」

そう言つと、シオは瑠華の前に身を乗り出して、頭を傾けた。渋々、瑠華はピンを取る。

「可愛いのに」

「うつせえ……」

そんな、一連の動作も莉空には信じられなかった……。

……な、……懐いている？

シオが——？

莉空とアツシユは顔を見合わせた。

「あ、そうそう。みんなに話そうと思つてたのよ。これ何だと思つて？」

瑠華が腕を翳してブレスレットらしき物を、みんなに見せた。

「あれ？ さっき廊下で見たのより、かなり厚くなってないか？」

青が尋ねた。

「あんた見てたの？」

「うん、シオが殴られてるところ……。最初、おれはラブシーンでもしてんのかと思つただけ」

青がケラケラと笑うので、シオは目を細めて睨みつけたが、青は

そんな事には全然動じない。

「まあ、いいわ。それがね、これをはめて相手に接触すると、相手の能力を無効化できるの。彼の名誉の為にも言っておくけど、彼が殴られたのはこれのせいなの。それを知らなかったから、シオは私から逃げ遅れたわけ」

『我侬で生意気だから？ それでシオが殴られた？』

一同は顔にそんな疑問を浮かべて、二人を交互に凝視している。

「ねえ、ちよと莉空先輩聞いてる？」

「ああ、……聞いてるよ」

「これバーディーが開発したのよ、凄いでしょ！」

そこで初めてバーディーに目の目が当たり、みんなの視線が移って、バーディーは少し照れていた。

「でもさ、要するに手錠と一緒になんじゃないか？」

青が素朴な疑問をする。

「ちつつち！ 甘い青、これはそんな物じゃないわ。ここに座っているみんな、私から半径二メートル以内の人は能力が使えないはずよ」

そう言われて、タイガが指先に火を灯せるか試したが、確かに点かない。

「え？ ……ほんとだ」

「この厚さが一ミリ増す毎に、能力が使えなくなる範囲が一メートル広がるの、凄いでしょ」

「それは凄いな……」

アツシュの興味を引いた。

「そうでしょう？ 自分が所持してたら能力が使えないのが難点なので、携帯ケースも考案中よ。相手が気がつかないよう、側に置いておくとか、ポケットに入れるとか、それだけで敵の動きを封じ込めることができるのよ」

「じゃ、シオは今それを借りとけばいいんじゃないの？ お前の半径二メートル以内に入ったら能力使えないから、一緒に転送される

ことはなくなるじゃん」

トオルがそう言っと、みんなは真面目に頷いた。

「そう言うこと」

かなり苦勞してバーディーと成分分析をして、このプレスレットの合成物を作り出した瑠華は得意気に微笑んだ。

そして、シオに腕を出すよう、自分の手の平を仰向けに伸ばした。渋々差し出したシオの長袖をたくしあげて、細く白い手首を出すと、そこに自分が今までしていた薄空色のプレスをはめた。

一瞬、瑠華とシオの目が合った。

「これで安心、少なくとも、あなたがいきなり現れた敵に、連れ去られることは無くなったってこと……、後は体術で対処しなさい」
無表情でシオは瑠華を見ていたが、何も言わなかった。

——がしかし、莉空としては自分以外の誰かに、シオが従順にしているのを見ると、一抹の寂しさが宿るのを拭いきれなかった。

そんな莉空をアッシュが見守っていることも、気づかない程に……。

28・C・V・バーデীর父親

夕食を終えた青たち四人が部屋に戻って来たら、扉の前に完全武装体のX-DS6が待っていた。

フェイス部分だけが映像で、と言っても殆ど人間が入っているの間違えそうなほどリアルな映像で、ボディはメタルのシャンパン・ゴールド色で、普段よりひとまわり以上大きくなっていて、武装体の強靱そうな様子に青はしきりに関心していた。

「やあ、DS6、今晚から見張りにしてくれるんだって？」

トオルが尋ねた。

「はい。お任せください。青君の補習授業が終わって、皆さんが食事に行かれたら、武装体になってこちらに戻って来ます。そして朝までしっかり見張りますので、安心してください」

「助かるよ、物騒だからね。それと聞いたかい？ バーデীর能力を無効にする物質でブレスレットを作ったってこと」

「先ほど、教員室にサンプルを持って来られて説明されてました」

「今日、シオはそれを貰って嵌めて寝るんだよ、だから彼にしる、俺たちにしろ、その物質の半径二メートル以内に入ると、能力が使えないん」

「分かりました。気をつけておきます」

「よろしくね、6」

DS6は微笑んで、みんなの後に続いて部屋に入ってきた。

そしてリビングの一角に立ち止まったまま、動かなくなった。

「ねーねー、そこにずっといるの？」

「はい。こちらで待機します」

「立ったままで、疲れないのか？」

「機械ですから大丈夫ですよ、青くん。質問されれば答えますけど、それ以外はセーフモードで管理してます」

DS6は青の素朴すぎる質問に、にっこり微笑んだ。

「頭にあつた箱のような物が、どこかに入ってるのか？」

『記憶メモリーのことですね、ええ、この上に入るのです』

そう言つて、DS6は青に少し俯いて頭の上にある、小さなボツクスの扉を開いて見せてくれた。

『私たちは必要とあらば、何時でもこの中に入つて実装体として、活動できるのです』

「すつげえ」

キラキラした瞳は更にDS6の実装体に移つて、腕にある突起物を指して尋ねた。

「ねえねえ、それつてやつぱ銃だよな？」

『これですか？ はい、連射可能なレーザー銃です。腹部には小型爆弾も数個入ってます』

「すつげえ！」

しきりに感心して、そこから動こうとしない青を、バスルームに行く途中のタオルが見かねて言った。

「青、明日の授業の準備をしておけよ、おまえはいつも朝バタバタするから、夜のうちにちゃんと用意しとけ！」

「わかつてるつて！」

今度はシオがキッチンに入つて来た。

『おや、シオくん、その顔はどうしました？』

「何でもない」

それだけ言つと冷蔵庫を開けて飲み物を取り出している。

「瑠華に殴られてやんの」

『おや……』

飲み物を口に運ぼうとして、傷口に沁みたのかシオは顔を顰めた。「あいつのずる賢いの教えといてやるよ、あいつはさあ、髪の毛あんなに長くして女の子らしくしてると、男が殴らないと踏んでるんだ。実際、喧嘩して何度殴ろうと思つたか知れないおれだって、あの長い髪を摩かせながら目の前に立たれると、殴れないもんなくしょう！」

確かに瑠華は殴れないと思った……、でも、どこから見ても女だけだな……、そうシオはぼんやりと思った。

「しかも、いちいち腹が立つのは、あいつの言うことが、だいたい本当のことで、反論できないんだ、おれはそれが悔しい！」

確かに青の言うとうりで、今日殴られた理由もそこにあって、高慢ちきな顔が浮んでムカついたが、瑠華も自分の事をそう思っていると思うと、シオは口角を少し上げて微笑んだ。

「うえ、何笑ってんだよ、お前の笑顔、瑠華と一緒に不気味だ……」

「とつとつ、部屋に行って明日の用意しやがれ！」

「ちえっ、忠告してやったのに、じゃねDS6」

『はい』

怖い顔のシオに疎まれて、笑いながらDS6に挨拶をすると、青はそそくさ勉強部屋に向かった。

一方、その頃学園の会議室では、円卓の大きなテーブルを囲んで、学長は元より先生方、情報局員、スカイ・ポリス本部部長が勢ぞろいして会議が行われていた。

勿論、議題は二度に渡る今回の事件の事だった。

「前回の事件と、今回の男の関連性は何か分かったのでしょうか？」
オロン教頭がスカイ・ポリス本部長に尋ねた。

「既に、こちらで検査したDNAにおいて、第四のDNAを調べた結果、誰にも該当しないことは分かった。今の所、前回の男との関連性が掴めず、何とも申しがたいのですが、こちらに管理してあった先生方のDNAサンプルが使用された事は、大変許しがたい犯罪で、これを管理していたと思われるスミエ・グラを拘束する寸前で逃亡を図られました。その事実から、どうやらスミエ博士が関与したことは拭えない事実となりそうです」

円卓から、呻きとも嘆きとも取れる声が漏れた。

「ご存知のように、スミエ博士は五年前に失踪した、シャーロット・V・デービッドの弟子でした、シャーロット博士が実験とは言え、偶然、培養して出来た”息子”シャーロット・V・バーディーは、”奇跡の産物”或いは”悪魔の申し子”として、こちらに生存しておりませんが、本来なら彼は国家警察の管理下で厳重に管理される所を、早瀬学長の好意により、ここに置いてもらってます。しかも、彼の能力は桁外れの天才で、研究室においては多大な能力を発揮されているとお聞きしましたが、学長、それでよろしいですか？」

本部長は、言葉を切って学長に同意を求めた。

「ええ、わが国に置いて、特殊能力者による犯罪の多発に置いて、武器開発は必須です。S・V・バーディーは類稀な能力で、若干十三歳にしてここ数年の中で、あらゆる武器を開発してきたのは事実です。皆さんがご心配のように、父親と同じくして重犯罪にも匹敵する、人類創造の扉を開けるような事があれば、彼の後見人として私が処罰することを宣言しましょう。しかし、現在、彼の才能は武器開発と言う、この国に最も必要な不可欠な分野に置いて発揮されております。そして、こちらを見てください」

学長はバーディーが作り出した青いブレスレットを、皆の前で翳した。

「こちらは、先ほどバーディーが持って来た物ですが、この物質から半径二メートル以内の能力者は、能力が使えない筈です。どうか皆さんお試しになってみて下さい」

円卓の能力者達から低いどよめきが漏れた。

彼等がそれぞれブレスレットを手に取り、試してみるが本当に誰も能力が使えなかった。

「ほう……、これは素晴らしい！」

「水硬石で出来た手錠が、捕まえた者意外に効力を成さないのに比べて、こちらの性質はこの物質の側にあるもの全てに対応できます。従って、リグラス・シオのようにテレポーターから狙われている者

に対して、一緒に連れ去る事が出来ないと言う多大な効果が発揮されます。その他、敵に気づかれず、これを側に置くことができれば、相手の能力を封じることが出来ます」

「学長、そうすると、これはそのC・V・バーディーが作り出したと言つのですか？」

「ええ、そうです。若干数人の学生達も鉱石分析を手伝つたようですが」

学長はバーディーを国家警備局の監視下に置くと言う意見も多々ある中、それがいかにナンセンスな話だと腐食すべくようにきっぱりと言つた。

「最早、彼は研究室において必要不可欠な人物となり得ます」

「うむ……」

本部部長は同意したかのように、頷いた。

そこで、今度は教頭が話を続けた。

「では、少し本題を逸れてしまいましたが、現在逃亡中のスミエ・グラについて報告をさせて頂きます。ご存知のように彼はシャーロット博士の弟子でした。博士が失踪して培養技術が世に知らしめられてから、研究室がある東の塔は完全封鎖されていましたが、一昨日の夕刻に生徒から東の塔で何かの音がしたと言う報告がありました。X・D・D7が調べた所、封鎖されていた筈の研究室には何者かが侵入していて、しかも、床には最近培養液が使われたと思われるチューブの容器が割れて、そのガラス片が散乱しておりました。それは、片付ける事無く堂々と痕跡を残しておりまして、きっと培養が終わつてその人物が完全なる者になつただろうと言う事を示しているのだと思います。博士の培養技術も完全隠蔽した筈でしたが、スミエ・グラは博士の側にいてその技術を密かに受け継いだか、または何らかの形で独自に研究していたと思われます」

「ひとつ質問があるのだが？」

「はい、部長どうぞ」

「教授方のDNAを持ったその男は、凡そ膨大な力を秘めておる

と思うのだが、昨夜生徒の前に現れた男が、テーブルをぶつけられただけで、すぐ帰って行ったと言うのはどうにも信じられないのだが……」

「そうですね、確かにその通りです。唯一の不可解な行動です……、それについては何の報告も出来なくて申し訳ありません……」

「恐らく、まだ時期で無かったんだろとは思われるな、それは、奴らがまだここを出ていないという事実からも立証されているだろう。一体どうやってここから出て行く計画をしているのか謎ではある……、がしかし、きっとそれと関係があるのではないだろうか」
そうして、再び円卓は重苦しい空気に包まれた。

29・ルームメイトの憂鬱

食堂を出て学び舎に入って直ぐに、学年ごとに設えてあるロッカーと、レストルームと一緒に併設された部屋があった。

食事の後に再び歯磨きしたり、重い教科書等は一時的にここに置いて移動することが出来る、その部屋の中で青は朝から騒動していた。

「ねーおれの、教科書知らない？ 部屋に無かったから、てつきりここだと思ってたんだけど……」

そう言いながらこそこそ、縦長のロッカーの中を上から下へと混ぜ返していた。

「部屋はちゃんと見て来たのか？」

トオルは扉の横に立って、青を見下ろしてながら言った。

タイガは椅子に座って黙っているし、シオも冷たい目をして壁に凭れ、じっと腕組みし青を見ていた。

当然、二人とも超の付くほどの不機嫌さで……。

そうなのだ、独りが遅刻すれば連帯責任を取らされる……。

クラスメイトは気の毒そうに、四人を尻目に教室に向かうが、しかし、タイガやシオが怖いのか、何も言わずに青をクスリと笑っただけだった。

「青くーん！ ほらほらタイガくんも、シオくんも、目がだんだん吊り上つてきたよ！」

トオルが茶化した。

「だからー探してくれよー！ そんなとこにばうっと立ってないでさ！」

「オレに言ってんのかポケッ」

シオの返答を無視して、青はロッカーの最下部を見ている。

「お前、さっき何冊か手に持ってたろう、あれどこへやった？」

冷静なシオの声に、青は顔を上げた。

「あ……」

「あ”って、さっきは聞こえてるのに無視こいてたなおまえ、上等じゃねえか！」

そして、青は徐に個室トイレに入って行くと、打って変わり笑顔で出てきた。

「あつたぞー！ 早く行こう！」

そう言うなり、既に廊下に走りだした。

「ちよい待て！ 手を洗え！ こらっ」

「あーあ……」

シオの声を無視して青は教室に走って行く、それも独り猛ダツシユで……。

トオルから溜息が出た。

部屋の怒りん坊、二代巨頭の顔を伺うと、激怒を通り越して容赦なさそうな顔をしている。

「ふざけやがって……あいつ」

大体において青が巻き起こす騒動の数々を、今まで黙って見過ごしていたタイガも、流石に怒っていた。

青に置いて行かれた三人が、ぎりぎりセーフで着席した時、タイガの拳骨が青の頭を直撃したのは言うまでもない……。

青がタイガに殴られた頭を抱えて、机の上でのたうち回っている間、近代武器解説学の講義の内容が、デロン・イイ先生によって説明されていた。

四十台半ばの黒い眼鏡を掛けた先生の講義は、教室で武器解説が半分、後は屋内練習場にて実際レーザー銃などの武器を使用しての、実施訓練がカリキュラムがあることの重要性を説いていた。

今日は教室にて、新しく開発された製品の説明をしていた。

「こちらに注目！ 新しいゴーグルのサンプルが店から届いたので、興味がある者は見てくれ。これは瞳の焦点を感知して標的を合わす事が可能になっている。練習は勿論、実際の現場でも扱いやすいらしい」

早速、トオルはデロン先生から借り受け、ゴーグルを掛けて様子を見ている。

「へえ、本当だ。何もなくても見たものに銃の照準を合わす機能が付いてる……、いいねこれ、着けてみてシオ」

隣の席のシオに渡すと、彼もまた黙ってそれを着けてみた。

「いいだろう？」

「そうだな」

ゴーグルを着けたシオの目に飛び込んできたのは、前の席に居た青の顔である。

「ねーねー、おれにも見せてくれよ」

顔を近づけて覗き込んでくる青の眉間に、シオは指を充てた。

「おまえ、今死亡フラグ立ったな」

ふたりを見ていたトオルが、横でケラケラと笑った。

タイガでさえ笑っている。

「——たく」

「さあさあ、みんなも面白いかな？ 話を聞いてくれ。来週から銃を実際に扱ってレベル10の訓練になる。一年の時に使用していたゴーグルでも問題はないが、あれは今回の商品のように照準機能は付いていない。より精密に標的を捕らえるのなら、この商品は君らの手助けになるだろう。無理強いはいしないが、折角学割価格で購入できるから試してみるのも良いと思う。ゴーグルが破損、もしくは持っていない者は今週末に揃えておいて欲しい」

「お前、持っていないんじゃないか？」

トオルが青に尋ねた。

「うん。瑠華がゴーグルは好みがあるから自分で選べって、買って無かったんだ」

「じゃ、明日にでも買いに行かなくちゃな、俺もこれ欲しいし。シオとタイガはどうする？」

「俺も行くつもり……、でも、コイツとは行かねえよ」
タイガが青を見て言う。

「なんでさー、一緒に行こうよ」
青が文句を言う。

「そうだよタイガ、俺、コイツが暴走したら止める自身ないよ」
その言葉にタイガが黙って、妙に納得顔で青を見た。

「面倒な奴をルームメイトに持ったものだぜ……」

「シオは？ 行こうよ」

「オレは今、外出禁止命令中」

「えーがっかりだな、みんなで行ったら楽しいと思ったのに」
心底、がっかりしたようにトオルが言った。

「でも、オレも新しいゴーグルが欲しいから店で落ち合おう、時間言ってくればその時間にテレポートする」

「わかった、じゃあ、明日、シオとは店で落ち合おう」

「おいおい、学園での能力使用は禁止じゃなかったのかよ」

青が尋ねた。

「シオなら大丈夫だ」

「なんで？」

「シオはそこに現れたり消えたりするだけで、お前みたいに多大な被害を出しはしないから、見つからないんだよ」

「お前は、一旦能力を使うと馬鹿みたいな破壊力を出すからな、制御を覚えるよ」

「制御も何も、普段は石ころも動かねえんだけどよう、何でだ？」
「知るか！」

余りにも呑気すぎる青の言葉に、みんなは呆れ果て話を打ち切った。

この惚けた奴にはホトホト手が掛かると、ルームメイトは誰もがそう思っていた……。

翌日、街に遊びに行ける事で、早くから目が覚めた青は、一番にバスルームに駆け込み、素っ裸で出てきた所をタイガに見つかりどやされた。

「こらっ！ 野猿！ 服を着ろ！」

「あれ、服持って行ったつもりだったんだけどさ」

そう言いつつも、まだみんながベッドに居る前で、自分のクロゼットを開けてごそごそ探している。

「……ああ、目覚め悪い……タオル、何とかしろよアイツ」

「あのさ、おれアイツの教育係じゃないんだから」

二人のベッドの会話である。

シオはと言えば、起きているにも関わらず、煩いものだから完全無視の体制で、皆に背を向け窓際を向いていたつもりが、今一番会話したくない奴がいきなりベッドへ飛び乗って来た。

「なーなー、シオ！」

上から被さるようにシオの顔を覗き込んでいる。

「煩せえ……」

シートを手繰り寄せて顔を隠そうにも、青が上から重っているの
で隠れることが出来ない。

しょうがないから、シオは今度反対に寝返りを打って、青を頭から
払うように目を閉じた。

「ねーってば！ シオ」

しかし、しつこい青はまだ顔を覗きこんで来る。

「煩い！ てめえ」

シオが目を開けて声の方向を見ると、上半身裸でにこにこ微笑む
青がいたが、それ以上顔を上げると見たくない物まで見えそう
で、シオは怒って言った。

「おまえ！ 下着着けてるんだろうな！」

「パンツは履いた。タイガが怒るから」

「重いじゃないか！ トオル！ こいつ何とかしてくれよ」

今度はシオが悲鳴を上げる。

ベッドの上で青に重されるシオを見て、トオルもタイガも爆笑している。

「何でもみなおれに言うのさ、シオお前に懐いてるじゃないか野猿が……、しかも知らない人が見たらかなり怪しい構図」

そして、声高らかに笑って、トオルは二人の写真を撮っている。

「ねー、おれも一緒にテレポートしてくれよ」

「するか！ ボケツ！ どけよ」

渾身の力を振り絞り、シオは青を脇にどかした。

「何でさ、もう一度やってくれよ」

「……空に飛ばされたいか、てめえ」

「それはカンベンだけどさ、テレポートもう一度したいんだよ！」

「フン、やだね。てめえのお陰でこんな朝早くからこの騒動で、迷惑この上ない奴だ」

シオは両手で顔に降りかかった髪の毛を掻きあげた。

その様子をじっと見ていた青は、納得したように言った。

「姉ちゃんの言った通り、ほんとお前って女の子みたいだな？」

「マジ、殴るぞ……」

青はシオの身体の上に、再び何食わぬ顔して大の字に寝転んだ。

「あゝあ、つまんねえ」

そしてジタバタ手足を動かしている。

自分より体重がある青に押さえ込まれて、完全ギブアップ体制のシオはもう動けなかった……。

「重い……野猿を捕まえてくれ……トオル！ トオル——？」

とうとうシオが根を上げた。

30・超能力学園通り

日曜日とあって寮のエントランスには、オートモービル待ちの行列が出来ていた。

出かける際は基本制服が推奨されたが、別に私服でも良いのでバラバラの姿でそれぞれやって来たオートモービルに乗り込んでいる。「シオも一緒に行けばいいのにさ」

「あいつは朝方までゲームして遊んでたから眠いんじゃないか？ お負けに、お前に早くから起こされてさ……」

「ゲームって？」

「あれ？ お前寝てたっけ？ 昨夜、俺たち遊んでたんだ。リアル・スコープを掛けて敵と対戦するやつ、体術の練習にもなるし、他の部屋の奴らと対戦したりして、けっこう面白いんだ。身体を動かすからリビングでやってたんだ、俺とタイガは途中で抜けたけどな」

「何で起こしてくんないのさ」

「対戦形式で三対三で人数は丁度だ合ってたしな、起きてたらお前呼ばなくても来てただろう？」

「ちえっ」

その時、目の前にオートモービルがずりりと現れて、青はいそいそと中に入り込み、続いてタイガ、トオルと乗車して扉は閉まった。「おれさあ、そう言えばタイガの能力って見たことないんだよな、トオルのは見たけど」

「知ってるだろう？ タイガは炎を操るんだ」

「自在に？」

「そう、自在に」

そんな話をしている、当の本人はそ知らぬ顔して窓の外を見ている。

「まあ、そうそう機会は無いだろっけど、訓練が同じだったから見せてもらえ」

「すつげえなあ、炎かあ……、そう言えば、この前の訓練にはタイガは来てなかったのか？見なかったような気がするけど」

タイガはチラリと青を見て答えた。

「あの時は上級生の卒業試験の手助けに行ってた」

「だよな……」

「ほら、着いたぞ、通称、”能力学園通り” 学校関連の品はここで何でも揃うんだ」

オートモビルがビルの谷間で静止すると、扉がシュツと軽い音を立てて開き、トオルが先立って降りて行く。

確かに”能力学園通り”の異名らしく、ビルの谷間には店がずらりと並んで、学生たちで溢れていた。

中には教職員、或いは技術者関係風のお堅いスーツを来た男性が、大きな荷物を抱えて歩く姿も見られた。

石畳は緩やかに登っていて、店頭に並ぶ商品は、学校関連の品だけではなく、甘い菓子や果物と言った、食べ物から、普段着る衣服、靴屋や鞄と言った、あらゆる物が揃っていた。

この前に見た室内のショッピングセンターに似てる店構えではあったが、ここは外である分開放的で、もっと専門的な物があるようにも思えた。

「あ、エア―・ボードだ」

青はウインドウの中に飾ってある緑色したエア―・ボードを見て声を上げた。

その横には、同じ品をコンパクトに畳んで、如何に軽量になるかを証明していた。

「お前は新しいの学園から貰っただろう？」

「うん。まだ使ったこと無いけど」

「今の所はそれで十分じゃないか？ お前まだ空中で乗ったこと無いだろう？」

「うん」

青は素直に頷いた、エア―・ボードが空中で乗れる事自体知らない

かったからだ。

「じゃあ、あれで練習して、乗りこなせるようになったら、きっと物足りなくなる。その時に買い換えたらいいんだ」

「エアー・ボードって授業で使うのか？」

「基本的には使わないかなあ……、訓練のときに、ほら、この前のような時に使うんだ」

二人が立ち止まって話しているうちに、タイガはどんどん前へ進んで行く。

「待てよタイガ」

DS6は朝になっていつもの時刻、構内の警備任務に就く為に、出て行ったので、現在部屋に居るのはシオ独りだけだった。

ルームメイトが出す日常の騒音が全く無い、誰も居ない室内は静かでいつもよりやたら広く感じられた。

青がそのままにしてある散らかし放題の衣服や、積み重ねられた教科書などや、日々繰り返される騒動に、慣れてきている自分がある事に、驚きつつも順応し始めた自分がシオは可笑しかった。

シャワーを浴びて着替えをし、ブレスレットを嵌めようとして気が付いた。

「あ……」

そうなのだ、これを持っていたらテレポートできない。

かと言って、持たないで外出も万が一の事を考えると、少しばかり不安だ……、どうしたものかと考えあぐねていた時、来客の知らせが入った。

「ID101002、シャーロット・V・バーディーが来ました。」

ドアを開けますか？』

「ああ」

程なく入って来たバーディーは、勉強部屋にいたシオを見つけて寄ってきた。

「おはようシオ」

「珍しいな、お前がここに来るなんて、どうしたんだ？」

「プレスを入れるケースを持って来たんだ。これが無いと何かと不便じゃないかと思ってね」

そう言つて、バーディーは自分の胸ポケットから、金属性の小さく平べったい容器を取り出した。

「そうだよ、実際困っていたところなんだ」

シオの言葉をあぐねて、バーディーは頭を傾けた。

「”能力通り”の店で、あいつらと待ち合わせしてんだけど、これを置いていかないとテレポートできないから、どうしようかと悩んでたんだ」

「じゃ、丁度良かった」

「移動の際はケースい入れとくといいいよ」

バーディーは特殊加工でできた小さな箱を開けて、プレスを中に仕舞って見せた。

「ほら、こうやって、ポケットに入るサイズだよ、でもこのケースは邪魔だから、今度はプレス自体を折りたたんで持ち運びできるように、研究してるからもう少し待ってね」

「助かるよ、バーディー」

「でも、君は確か外出禁止じゃなかったんだっけ？」

何気ないその言葉に、シオは落胆したようにバーディーを見た。

「バーディー……」

「君に泣きつかれるのは初めてだな」

バーディーは、微笑んだ。

「約束してんだ」

「そう言えば、この部屋は誰も居ないんだな……、君は一人じゃ危

ないよ」

「だから、学長には黙っていてくれ」

「止めても行くくせに……。しょうがないなあ……。でも、早く帰って来てよ。君に何かあったら大変だから」

そう言つて、バーディーは部屋を見渡した。

「青も居ないよ。店にいる」

バーディーの顔が曇つたのをシオは見逃さなかった。

誘われなかったことに、胸を痛めたのだろうかと思つた。

「お前も行くか？」

「え？」

「青もいるし」

「でも……、僕は……いいよ」

「何遠慮してんだ、行きたいなら行きたいと言え、そしたら連れてつてやる」

「でも……」

躊躇するバーディーに、業と意地悪してカウントする。

「5、4、3、2、……」

「行く！ シオ、僕行きたい！」

薄っすらと涙ぐむバーディーの瞳を見て、シオは微笑んだ。

「お前は相変わらず泣き虫だな」

「泣いてなんかいない」

そう言いつつ、大粒の涙がポロリと零れた。

「そして意地っ張りだ」

「違う！」

シオはフツと優しく笑つて、バーディーの腕を掴んだ。

「行くぞ、あいつの鼻先に降ろしてやる、しっかり立ってる」

シオが不適にニヤリと笑つた次の瞬間、部屋は静寂に包まれた。

31・銀髪のアントン・ウィツシュ

石畳を登りきった場所にある、ゴーグルだけを扱う専門店に入ると、色もサイズも、勿論機能でさえ千差万別な、目移りしそうに膨大な数のゴーグルを見て、目を輝かせていた青の目の前に、いきなりバーディーとシオがテレポートで現れた。

本当に鼻先を掠って、青が赤くなつた鼻を押さえている。

「痛つて〜〜！」

「あ、ごめんね青、当たったかな、痛かった？」

心配したバーディーは、青の顔を覗き込んだ。

「バーディー！ おまえ何でここに？」

「シオに連れてきて貰ったんだ」

嬉しそうに言って、傍らに立っているシオを尊敬に近い眼差しで見ている。

が、本人は素知らぬ顔して立っている。

「何でえおまえ！ おれがテレポートしてくれって頼んだときは断つておきながら」

「バーディーとお前は違うからな」

「すっごいよ、テレポート！ 面白い！」

「ちえっ」

青はふて腐れた。

自分をお願いしても堅く拒んでおきながら……と。

「お、バーディーも来たのか？」

「うん」

棚の影からひょっこり現れたトオルは、幾つかゴーグルの試供品を持っている。

「丁度いいや、研究者の立場からどれが良いか選んでくれよバーディー」

「僕は、ゴーグルに関してあまり詳しくないんだよ」

「まあ、そう言わずさあ、これ照準が合うタイプだけど、かえって見難いような気もするんだよな、こっち来てくれタイガもいるから」
そう言つて、バーディーはトオルに引張つて行かれた。

青がふとシオを見ると、彼がケースからプレスレットを取り出して、腕に嵌めているのを見て言つた。

「そっかあ、ケースが出来たんだ。じゃないとレポートできないもんな、ちくしょう、おれだってレポートしたかったのによ」
「まだ言つてやがる」

シオは鼻で笑つてチラリと青を見た。

「じゃさ、帰りは一緒に」

「嫌だ」

こちらが狼狽するほどの真顔で、シオは即刻否定した。

「なんだよ！そんな事言つてると、おめえなんか、もう助けてやらないからな」

「誰が助けてくれと言つた？」

「うわっ、……出た。超我侂発言、しかもマジ真顔で……、おめえ！ 本気で言つてるだろう？」

「当然だ」

アイスブルーの瞳は氷点下の冷たさを宿して、青を見ていた。

「おまえ、絶対！ 友達無くすぞ！」

「そんなものいらない」

シオの衝撃発言に、青でさえ怯んでしまった。

青は妙に真剣なシオの顔が信じられなかった。

「本気で言ってるな、おまえ」

「そう言ってるだろう」

「ちよい待て！ それはおかしいぞ、リグラス・シオ！ 友達は大切だ！」

「鬱陶しい、重形青」

シオは目頭を寄せて、本当に迷惑そうな顔をした。

「何だとーっ」

「それと、オレの半径3メートル以内に入るな」

そう言って、近寄ろうとする青の額に手の平を当てて静止した。

「おまえなあ！」

「煩いぞ！ 青！」

いつの間にか後ろに来ていたタイガが、青の首根っこを掴んだ。

「こいつさ！ こいつが……」

「人それぞれなんだ、お前の意見を押し付けるな」

タイガの意見は、いつも見た目同様に大人びていて、取り合えず青を黙らすには十分だった。

そこへトオルやバーディーもやって来た。

「青の声は店中筒抜けだ、恥ずかしいったらない、タイガと一緒に良かったよ」

「青、シオは口ほどでは無いんだから、本気にしちゃ駄目だよ」

「バーディー、オレは本気だ。特にこいつに対しては」

「シオ」

バーディーは流石にどちらの見方について良いのか、オロオロしてして両者の顔を交互に見ていた。

そんな気まずい雰囲気、切り替えようとトオルは頭を振った。

「ヤメヤメもう、この話は終わりで。シオ、ゴーグル見に来たんだろう？ 二、三、良さそうなの見つけたんだ、こっち来いよ」

トオルはシオにシルバーと黒のゴーグルを渡しながら、店の奥へ促した。

それを掛けて様子を見るシオの後ろ姿を、青は不満顔で見ていた。

「友達がいらない」なんて、どうしてあんな真顔で言えるんだろう……、しかも、あの目が本気だったから、余計に腹が立った青だった。

「熱血少年よ……」

その時、青は背後から声がして振り向くと、窓際で緑のゴーグルを光に翳している男と目が合った。

光沢の無いシルバーに近い灰色のロングコートを着、同じ色の帽子を被った男が微笑んでいる。帽子からはみ出ている銀の髪の毛は、その胸元に輝く宝石と相俟い、差し込んでくる陽の光に反射して輝いていた。

そして、男は優雅な身のこなしで青の方に向き直った。

「焦ることは無いんだよ」

男はニツコリと微笑む。

「日々を重ねることで見えてくることも沢山ある。勿論、目に見えることだけが真実で無い場合もあるけどね」

「おじさん、誰だ？」

「おじさんとは！ まだ私は三十代なんだが……、責めて”お兄さん”にしてくれないかな？」

男は一瞬たじろぎながらも気を取り直すように言う。

「うん、お兄さん、あんた誰？」

「アントン・ウィツシュ、アントンでいいよ」

「学校の人？」

「違うよ。単なる通りすがりの物です」

そう言つて、青にウィンクをした。

「おれに何か用なのか？」

「用かい？ あるような、無いような……。おや、君のその頬の傷は……」

「ああ、これか？ 少し前にレーザー銃が掠った傷なんだ、きっともう直らない」

「触つてみてもいいかい？」

アントンは興味を持ったのか、傷から目を離さずにじっと見ている。

「うん」

そして、アントンは触れるか触れないかの所で手を翳し、何かを思案しているように、心ここに在らずと言った風にぼつりと言った。

「……ひとつ、君に教えておこう」

「何だ？」

「言葉は重要であつて、時に意味が無いものだ……」

そして再びニツコリ微笑みながら、持っていた緑のゴーグルを青に手渡した。

「これが君に向いているんじゃないかな？」

青が手の中のゴーグルを見ていたら、トオルが店の奥から青を呼んだ。

「青ーっ、何やってんだ？ こっち来てみな」

「うん、今行く……」

トオルに返事をして、アントンに挨拶しようと振り向いた所、既に彼の姿はそこに無かった。

「あれ？ アントン？」

幾つか棚を抜けて探してみたが、彼の姿はどこにも見当たらなかった。

幻のように表れて、あつという間に去って行ったアントンの行方を思つて青は呆然と立ち尽くすのだった。

「何やってたんだよ」

「今さあ、男の人と話をしていたんだ……」

「誰と？」

「見たらどう？ 帽子を被った銀髪の人」

「俺がお前に声を掛けた時、お前は独りだったぞ？」

「見なかった？」

そっか、何時の間に居なくなつたんだろう……、不思議な人だったけど、楽しかったなと青は微笑んだ。

「夢でも見てたんじゃないのか？ それより早く選べ、みんなもう決めたぞ」

「これ、どう思う？ その男の人が進めてくれたんだけどよう、おれ何が良いんだかわかんなくてさ」

青が差し出した緑のゴーグルを、トオルは試しに掛けて見た。

「おお、いいね。照準が素早くロックできるし、高度、距離、追尾機能まであるぞ、上級者向けだけど、慣れたら頗る良い品かも知れないな」

「じゃ、決めた。おれはこれにする」

「うん、いいだろう」

トオルに認めて貰って、青は嬉しそうにレジに向かうのだった。

アントンは初めて会ったとても不思議な人物だったけど、何故だか青の直感では良い人だと思える確信があった。

それがどういう理由かと尋ねられても非常に困るが、ただ、単純にそう思えたのだった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6100w/>

スカイ・ポリス ～ 国立特殊能力学園 ～

2011年12月15日12時52分発行